

唐山遺跡 1

— 第1・2次調査 —

大野城市文化財調査報告書 第220集

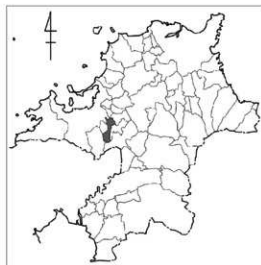
2025

大野城市

からやま い せき
唐山遺跡 1

— 第1・2次調査 —

大野城市文化財調査報告書 第220集



2025

大野城市



(1) 第2次調査地全景（東上空から）



(2) 第2次調査地全景（西上空から）

序

福岡県大野城市は福岡平野南部に位置し、市域は中央がくびれ、南北に細長い形をしています。市名は、日本最古の朝鮮式山城「大野城跡」に由来し、東部に大野城跡、中央に水城跡、南部に牛頭須恵器窯跡とそれぞれ国指定史跡を配し、それらを中心に数多くの文化財が残る歴史豊かな街です。

唐山遺跡は市域東北部、唐山（井野山）南麓の丘陵上に所在し、対岸の乙金山麓では善一田古墳群をはじめ多くの古墳が発見されています。

今回報告する唐山遺跡第1次調査と第2次調査では、古墳時代後期から終末期の古墳が確認され、第2次調査では馬具や玉類などの副葬品やたくさんの土器が見つかっています。なかでも当時の朝鮮半島にあった国である「新羅」から持ち込まれた「新羅土器」が出土したことは、朝鮮半島との交流を物語るのみならず、当地の地名である「唐山」の由来を考える上でも重要な発見といえるでしょう。

遺跡は土地に刻まれた歴史であり、我々にたくさんのことを教えてくれます。心のふるさと館では、こうした遺跡を記録し、報告書というかたちで広く一般に公開するとともに、後世へと伝えていけるよう努めています。本書が文化財の理解と認識を深める一助となるとともに、学術研究や教育の面で広く活用していただけたら幸いです。

最後になりましたが、事業関係者及び地元の方々にご理解とご協力をいただきましたことに対し厚く御礼申し上げます。

令和7年3月31日

大野城心のふるさと館
館長 赤司 善彦

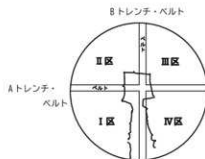
例 言

1. 本書は、大野城市教育委員会が発掘調査を実施した大野城市乙金東3丁目および4丁目所在の「唐山遺跡第1次調査」と「唐山遺跡第2次調査」の報告書である。
2. 第1次調査は地権者の委託を受け、第2次発掘調査は福岡県那珂県土整備事務所の委託を受け、大野城市教育委員会が実施した。
3. 発掘調査は第1次調査は徳本洋一、第2次調査は早瀬賢（主担当）、上田龍児（副担当）、城門義廣、遠藤茜が担当した。
4. 遺構写真は、各担当者が撮影した。
5. 遺物写真は、写測エンジニアリング㈱に委託し、牛嶋茂が撮影した。
6. 遺構実測図は、各担当者が作成した。
7. 遺構図の製図は、第1次調査は小嶋のリ子が作成し、石川健が修正・編集を行った。第2次調査の遺構図は（株）埋蔵文化財サポートシステムに委託し、小嶋・眞田萌世が一部を加筆・修正した。
8. 遺構配置図、地形測量図の作成は、第1次調査は（株）埋蔵文化財サポートシステムに委託し、第2次調査は（株）九州文化財研究所に委託した。
9. 遺構実測図中の方位は、磁北を示す。
10. 遺物の実測・拓本は、第1次調査出土遺物を古賀栄子、第2次調査出土遺物を上田・遠藤・大里弥生・吉田浩之が作成した。
11. 遺物実測図の製図は、第1次調査については小嶋、第2次調査については（株）タクトに委託したほか、鉄製品の一部は神啓崇（福岡市史跡整備活用課）が作成した。
12. 遺物観察表は、古賀が作成した。
13. 本書に掲載した遺跡分布図は、国土地理院発行の1/25000地形図『福岡南部』『太宰府』を使用した。
14. 本書に掲載した資料は、大野城市が管理・保管している。
15. 本書に使用する土色名は、『新版標準土色帖』農林水産省技術会議事務局監修を使用している。
16. 本書の文章のうち、馬具類は神、玉類は森春奈（大分県立埋蔵文化財センター）が、Ⅳ章3は山元瞭平、Ⅳ章4は神、Ⅳ章5は小林啓（九州歴史資料館）、Ⅳ章6は森が、他は上田が執筆した。
17. 編集は石川・上田が行った。
18. 発掘調査・報告書作成に関しては以下の方々から、ご教示を得た。
（五十音順・敬省略）牛嶋茂・小田富士雄・亀田修一・武末純一・寺井誠・洪潜植

凡例1 須恵器蓋杯名称



凡例2 墳丘の部分名称



凡例3 石室の部分名称



本文目次

I. はじめに	
1 調査に至る経緯	1
2 調査体制	1
II. 位置と環境	
1 地理的環境	5
2 歴史的環境	5
III. 第1次調査の成果	
1 調査の概要	11
2 遺構と遺物	12
(1) 古墳	12
1号墳	12
3 まとめ	27
IV. 第2次調査の成果	
1 調査の概要	29
2 遺構と遺物	29
(1) 古墳	29
① 1号墳	29
② 2号墳	44
③ 3号墳	71
④ 4号墳	80
⑤ 5号墳	86
(2) 大溝	89
(3) その他の遺物	97
V. 総括	
1 主要遺構の時期と古墳群の形成過程	109
2 大溝及び1号墳石室開口部付近の土器群について	110
3 唐山遺跡第2次調査2号墳出土暗文土師器の位置付け	116
4 唐山遺跡第2次調査2号墳出土馬具の検討	122
5 鉄釘に残存する木材痕跡を用いた木棺構造の想定復元	124
6 唐山遺跡第2次調査出土土玉類についての検討	128

挿 図 目 次

第1図	周辺遺跡分布図 (S=1/25,000)	7~8
第2図	調査地の位置図 (S=1/4,000)	11
第3図	1号墳現況測量図 (S=1/300)	12
第4図	1号墳墳丘遺存状況図 (S=1/150)	13
第5図	1号墳墳丘土層断面図 (S=1/60)	14
第6図	1号墳周溝内出土遺物実測図 (S=1/3)	15
第7図	1号墳石室実測図 (S=1/80)	16
第8図	1号墳玄室遺物出土状況図 (S=1/30)	18
第9図	1号墳玄室出土遺物実測図 (6~9はS=1/2、その他はS=1/3)	19
第10図	1号墳閉塞施設実測図 (S=1/40)	20
第11図	1号墳羨道遺物出土状況図 (S=1/40)	20
第12図	1号墳羨道出土遺物実測図 (20~31はS=1/2、その他はS=1/3)	22
第13図	1号墳墓道出土遺物実測図1 (S=1/3)	24
第14図	1号墳墓道出土遺物実測図2 (S=1/3)	26
第15図	遺構配置図 (S=1/800)	30
第16図	1号墳現況測量図 (S=1/150)	31
第17図	1号墳墳丘遺存状況図 (S=1/150)	32
第18図	1号墳地山整形状況図 (S=1/150)	33
第19図	1号墳墳丘土層図① (S=1/60)	34
第20図	1号墳墳丘土層図② (S=1/60)	35
第21図	1号墳Ⅰ・Ⅳ区墳丘土層図 (S=1/80)、墳丘遺物出土状況図 (S=1/20)	36
第22図	1号墳Ⅰ区墳丘内出土遺物実測図 (S=1/3)	37
第23図	1号墳Ⅲ・Ⅳ区墳丘盛土、周溝、その他の出土遺物実測図 (71・72はS=1/2、その他はS=1/3)	38
第24図	1号墳石室実測図 (S=1/60)	40
第25図	1号墳閉塞石検出状況図 (S=1/60)、遺物出土状況図 (羨道部：S=1/20、玄室：S=1/40)	42
第26図	1号墳石室、開口部出土遺物実測図 (81~86はS=1/2、その他はS=1/3)	43
第27図	2号墳現況測量図 (S=1/200)	44
第28図	2号墳墳丘遺存状況図 (S=1/200)	45
第29図	2号墳地山整形状況図 (S=1/200)	46
第30図	2号墳墳丘Bトレンチベルト東面土層断面図 (S=1/80)	48
第31図	2号墳墳丘A・Cトレンチベルト南面土層断面図 (S=1/80)	49
第32図	2号墳Bトレンチ(大溝)ベルト東面土層断面図 (S=1/80)	50
第33図	2号墳Aトレンチ(大溝)ベルト南面土層断面図 (S=1/80)	51
第34図	2号墳Ⅰ区墳丘~大溝ベルト(A-A')南面土層断面図 (S=1/60)	52

第35図	2号墳墳丘出土遺物実測図1 (96・97はS=1/2、その他はS=1/3).....	53
第36図	2号墳墳丘出土遺物実測図2 (S=1/3).....	54
第37図	2号墳石室実測図 (S=1/60)	55
第38図	2号墳石室見通し断面図 (S=1/60)	56
第39図	2号墳石室内遺物出土状況実測図 (S=1/30)	57
第40図	2号墳玄室出土遺物実測図 (111・119はS=1/1、110・115~118・120・121はS=1/2、その他はS=1/3)	58
第41図	2号墳前室遺物出土状況・土層図 (S=1/30)	60
第42図	2号墳前室出土遺物実測図1 (S=1/3).....	62
第43図	2号墳前室出土遺物実測図2 (S=1/2).....	63
第44図	2号墳前室出土遺物実測図3 (S=1/2).....	64
第45図	2号墳前室出土遺物実測図4 (177~186はS=1/2、その他はS=1/3).....	66
第46図	2号墳羨道部床など実測図 (S=1/60)	67
第47図	2号墳羨道開口部付近遺物出土状況図 (S=1/30)・壁面土層図 (S=1/60).....	68
第48図	2号墳羨道出土遺物実測図 (197はS=1/2、その他はS=1/3)	69
第49図	3号墳現況測量図 (S=1/200).....	72
第50図	3号墳墳丘遺存状況図 (S=1/200).....	73
第51図	3・5号墳地山整形状況図 (S=1/200).....	73
第52図	3号墳土層断面図① (A・Cトレンチ南面土層) (S=1/80).....	74
第53図	3号墳土層断面図② (S=1/80)	75
第54図	3号墳出土遺物実測図 (S=1/3).....	76
第55図	3号墳列石検出状況図 (S=1/80)	77
第56図	3号墳石室実測図 (S=1/60)	79
第57図	3号墳閉塞石実測図 (S=1/60)	80
第58図	4号墳現況測量図 (S=1/200).....	81
第59図	4号墳墳丘遺存状況図 (S=1/200).....	81
第60図	4号墳地山整形状況図 (S=1/200).....	82
第61図	4号墳土層断面図 (S=1/30)	83
第62図	4号墳石室検出状況図 (S=1/60)、玉類出土状況図 (S=1/5)	84
第63図	4号墳出土遺物実測図1 (210はS=1/2、その他はS=1/1)	85
第64図	4号墳出土遺物実測図2 (S=1/3).....	86
第65図	5号墳現況測量図 (S=1/200).....	87
第66図	5号墳地山整形状況図 (S=1/200)と周溝土層図 (S=1/60).....	87
第67図	5号墳石室展開図 (S=1/60)	88
第68図	5号墳出土遺物実測図 (S=1/3).....	89
第69図	2号墳大溝遺物出土状況図 (S=1/20)	90
第70図	大溝上層出土遺物実測図 (255はS=1/2、その他はS=1/3)	92
第71図	大溝中層出土遺物実測図 (S=1/3).....	94
第72図	大溝上層~下層出土遺物実測図 (S=1/3).....	96

第73図	その他の遺構出土遺物実測図 (S=1/2).....	98
第74図	唐山遺跡第2次調査大溝出土土器と参考資料 (S=1/6)	112
第75図	暗文土師器実測図 (S=1/6)	117
第76図	暗文土師器法量分布図.....	118
第77図	畿内産暗文土師器杯Cの径高指数と模倣品の対応関係.....	120
第78図	器物の基本的構造 (左) と釘の木材パターン (右)	124
第79図	鉄釘の木材パターンと材の木取り.....	126
第80図	鉄釘の出土状況と木材パターン.....	126
第81図	鉄釘の顕微鏡観察結果.....	127

表 目 次

表1	唐山遺跡第1次調査出土遺物観察表①.....	99
表2	唐山遺跡第1次調査出土遺物観察表②.....	100
表3	唐山遺跡第2次調査出土遺物観察表①.....	101
表4	唐山遺跡第2次調査出土遺物観察表②.....	102
表5	唐山遺跡第2次調査出土遺物観察表③.....	103
表6	唐山遺跡第2次調査出土遺物観察表④.....	104
表7	唐山遺跡第2次調査出土遺物観察表⑤.....	105
表8	唐山遺跡第2次調査出土遺物観察表⑥.....	106
表9	唐山遺跡第2次調査出土遺物観察表⑦.....	107
表10	暗文土師器一覧.....	117
表11	唐山2号墳出土馬具の内訳.....	122
表12	鉄釘の観察結果.....	125

図 版 目 次

巻頭図版(1) 第2次調査地全景(東上空から)	図版8 唐山遺跡第1次調査 1号墳出土遺物(1)
巻頭図版(2) 第2次調査地全景(西上空から)	図版9 唐山遺跡第1次調査 1号墳出土遺物(2)
図版1 (1) 唐山遺跡第1次調査1号墳遠景 (北東より)	図版10 唐山遺跡第1次調査 1号墳出土遺物(3)
(2) 唐山遺跡第1次調査1号墳全景 (南東より)	図版11 (1) 第2次調査地全景(南東上空から) (2) 第2次調査地上空から南側をのぞ む
図版2 (1) 調査前現況(北東から) (2) 墳丘近景(南から) (3) 墳丘Bトレンチ断面 (南東から)	図版12 (1) 1号墳墳丘全景(南上空から) (2) 1号墳墳丘全景(東から)
図版3 (1) 墳丘Bトレンチ周溝断面 (南東から) (2) 墳丘Cトレンチ周溝断面 (北東から) (3) 墳丘Aトレンチ周溝断面 (北から)	図版13 (1) 1号墳Aベルト土層(南から) (2) 1号墳Bベルト土層(東から) (3) 1号墳Cベルト土層(南から)
図版4 (1) 墳丘Bトレンチ石室裏込め (南東から) (2) 墳丘Cトレンチ石室裏込め (北から) (3) 墳丘Aトレンチ石室裏込め (北から)	図版14 (1) 1号墳IV区墳丘土層(南から) (2) 1号墳墳丘南側土層(南西から) (3) 1号墳地山整形状況全景 (上空から)
図版5 (1) 閉塞状況(墓道から) (2) 閉塞状況(石室から) (3) 閉塞石一部除去(墓道から)	図版15 (1) 1号墳I区墳丘内遺物出土状況① (南西から) (2) 1号墳I区墳丘内遺物出土状況① (西から) (3) 1号墳I区墳丘内遺物出土状況① (西から)
図版6 (1) 閉塞石除去後遺物出土状況 (墓道から) (2) 閉塞石除去後遺物出土状況 (墓道から) (3) 出入口部付近遺物出土状況 (墓道から)	図版16 (1) 1号墳I区墳丘内遺物出土状況② (南西から) (2) 1号墳I区墳丘内遺物出土状況② (南西から)
図版7 (1) 出入口部付近遺物出土状況 (羨道から) (2) 羨道敷石上土師器出土状況 (玄門から) (3) 石室内耳環出土状況(東から)	図版17 (1) 1号墳IV区遺物出土状況 (南東から) (2) 1号墳IV区遺物出土状況 (南東から)
	図版18 (1) 1号墳石室全景(南から) (2) 1号墳東側玄門部(北西から) (3) 1号墳西側玄門部(北東から)
	図版19 (1) 1号墳玄室西側壁(南東から)

- (2) 1号墳玄門部(北から)
 (3) 1号墳追葬時床面(南から)
 図版20 (1) 1号墳初葬時床面(南から)
 (2) 1号墳羨道東側壁(南西から)
 (3) 1号墳羨道西側壁(南東から)
 図版21 (1) 1号墳閉塞石全景(南から)
 (2) 1号墳閉塞部周辺遺物出土状況(南から)
 (3) 1号墳閉塞石基底部全景(南から)
 図版22 (1) 1号墳玄室奥壁側裏込め状況(北から)
 (2) 1号墳玄室北東隅裏込め状況(北東から)
 (3) 1号墳玄室北西隅裏込め状況(北から)
 (4) 1号墳玄室西側壁裏込め状況(西から)
 (5) 1号墳玄室東側壁裏込め状況(東から)
 (6) 1号墳Aベルト石室掘方土層(南から)
 (7) 1号墳Cベルト石室掘方土層(南から)
 (8) 1号墳Bベルト石室掘方土層(東から)
 図版23 (1) 2号墳墳丘全景(北西上空から)
 (2) 2号墳地山整形状況全景(北上空から)
 図版24 (1) 2号墳Aベルト土層(北から)
 (2) 2号墳Bベルト土層(東から)
 (3) 2号墳Cベルト土層(南から)
 図版25 (1) 2号墳石室全景(南から)
 (2) 2号墳石室全景(北から)
 図版26 (1) 2号墳石室全景(上空から)
 (2) 2号墳石室全景(南から)
 図版27 (1) 2号墳玄室全景(西から)
 (2) 2号墳玄室全景(南から)
 (3) 2号墳玄室全景(北から)
 図版28 (1) 2号墳玄室奥壁(南から)
 (2) 2号墳玄室西側壁(東から)
 (3) 2号墳玄室東側壁(西から)
 図版29 (1) 2号墳玄門(北から)
 (2) 2号墳西側玄門(北東から)
 (3) 2号墳東側玄門(北西から)
 図版30 (1) 2号墳東側玄門と側壁の関係(北西から)
 (2) 2号墳西側玄門と側壁の関係(北東から)
 (3) 2号墳玄室奥壁側排水溝(南東から)
 (4) 2号墳玄室前室側排水溝(北から)
 (5) 2号墳東側玄門付近遺物出土状況①(北西から)
 (6) 2号墳東側玄門付近遺物出土状況②(北西から)
 (7) 2号墳玄門遺物出土状況(北西から)
 (8) 2号墳玄室排水溝内遺物出土状況(南西から)
 図版31 (1) 2号墳前室東側壁(北西から)
 (2) 2号墳前室西側壁(北東から)
 (3) 2号墳前室敷石(北から)
 図版32 (1) 2号墳前室遺物出土状況(北から)
 (2) 2号墳前室遺物出土状況(西から)
 図版33 (1) 2号墳前室遺物出土状況(西から)
 (2) 2号墳前室遺物出土状況(北西から)
 図版34 (1) 2号墳前室遺物出土状況(北西から)
 (2) 2号墳前室排水溝内遺物出土状況(北から)
 (3) 2号墳前室排水溝内遺物出土状況(西から)
 図版35 (1) 2号墳羨道全景(南から)
 (2) 2号墳羨道西側壁(北東から)
 (3) 2号墳羨道東側壁(北西から)
 図版36 (1) 2号墳閉塞石(南から)

- (2) 2号墳閉塞石除去状況(南から)
 (3) 2号墳羨道排水溝土層(南から)
- 図版37 (1) 2号墳羨道遺物出土状況
 (南東から)
 (2) 2号墳羨道遺物出土状況
 (南東から)
 (3) 2号墳羨道土層(北から)
- 図版38 (1) 2号墳玄室奥壁裏込め(東から)
 (2) 2号墳玄室西側壁裏込め
 (南西から)
 (3) 2号墳玄室東側壁裏込め
 (北東から)
- 図版39 (1) 2号墳前室西側壁裏込め
 (南西から)
 (2) 2号墳前室東側壁裏込め
 (南東から)
 (3) 2号墳前室～羨道西側壁裏込め
 (南西から)
- 図版40 (1) 3号墳墳丘遺存状況・5号墳検
 出状況全景(南上空から)
 (2) 3号墳墳丘遺存状況全景
 (南東上空から)
- 図版41 (1) 3号墳墳丘地山整形状況全景
 (上空から)
 (2) 3号墳墳丘地山整形状況全景
 (南東上空から)
- 図版42 (1) 3号墳Aベルト土層(南から)
 (2) 3号墳Bベルト土層(東から)
 (3) 3号墳Cベルト土層(南東から)
- 図版43 (1) 3号墳Ⅳ区墳丘列石検出状況
 (南東から)
 (2) 3号墳Ⅳ区墳丘列石検出状況
 (北西から)
 (3) 3号墳現況(東から)
- 図版44 (1) 3号墳石室全景(南から)
 (2) 3号墳玄室西側壁(南東から)
 (3) 3号墳玄室東側壁(南西から)
- 図版45 (1) 3号墳玄門部(南から)
 (2) 3号墳羨道西側壁(北東から)
- (3) 3号墳羨道東側壁(北西から)
- 図版46 (1) 3号墳閉塞石検出状況①
 (南から)
 (2) 3号墳閉塞石検出状況②
 (南から)
 (3) 3号墳閉塞石基底部検出状況
 (南から)
- 図版47 (1) 3号墳玄室奥壁・西側壁裏込め
 状況(北から)
 (2) 3号墳玄室奥壁・東側壁裏込め
 状況(北東から)
 (3) 3号墳羨道東側壁裏込め状況
 (東から)
- 図版48 (1) 3号墳羨道南北土層(南東から)
 (2) 3号墳石室開口部付近南北土層
 (南東から)
 (3) 3号墳地山整形状況全景
 (南から)
- 図版49 (1) 4号墳全景(南上空から)
 (2) 4号墳南北土層(西から)
 (3) 4号墳石室全景(南から)
- 図版50 (1) 4号墳石室床面玉類検出状況
 (南から)
 (2) 4号墳石室床面玉類検出状況詳細
 (南から)
- 図版51 (1) 4号墳石室床面玉類検出状況
 (東から)
 (2) 4号墳石室床面玉類検出状況詳細
 (東から)
- 図版52 (1) 4号墳石室掘方検出状況
 (南から)
 (2) 4号墳玄室奥壁掘方土層
 (西から)
 (3) 4号墳石室掘方全景(南から)
- 図版53 (1) 5号墳全景(上空から)
 (2) 5号墳全景(北から)
 (3) 5号墳全景(南東から)
- 図版54 (1) 5号墳玄室西側壁(南東から)
 (2) 5号墳玄室東側壁(南西から)

- (3) 5号墳玄室南北土層(西から)
- 図版55 (1) 5号墳石室南北土層(南西から)
- (2) 5号墳Aベルト(石室掘方)
土層(南から)
- (3) 5号墳Cベルト(石室掘方)
土層(南から)
- 図版56 (1) 大溝全景(北上空から)
- (2) 大溝土層(北から)
- (3) 大溝(2号墳Bベルト東面)
(東から)
- 図版57 (1) 大溝上層遺物出土状況(北東から)
- (2) 大溝上層遺物出土状況(東から)
- 図版58 (1) 大溝上層遺物出土状況詳細
(東から)
- (2) 大溝上層遺物出土状況詳細
(東から)
- (3) 大溝上層遺物出土状況詳細
(東から)
- 図版59 (1) 大溝中層遺物出土状況
(南東から)
- (2) 大溝中層遺物出土状況詳細
(南東から)
- (3) 大溝中層遺物出土状況(南から)
- 図版60 (1) SX11全景(南東から)
- (2) 調査区西側平坦部全景(北東から)
- (3) 調査区西側平坦部詳細(南から)
- 図版61 唐山遺跡第2次調査大溝出土遺物
- 図版62 唐山遺跡第2次調査2号墳石室出土遺物
(馬具集合)
- 図版63 唐山遺跡第2次調査出土遺物(1)
- 図版64 唐山遺跡第2次調査出土遺物(2)
- 図版65 唐山遺跡第2次調査出土遺物(3)
- 図版66 唐山遺跡第2次調査出土遺物(4)
- 図版67 唐山遺跡第2次調査出土遺物(5)
- 図版68 唐山遺跡第2次調査出土遺物(6)
- 図版69 唐山遺跡第2次調査出土遺物(7)
- 図版70 唐山遺跡第2次調査出土遺物(8)

I. はじめに

1 調査に至る経緯

【第1次調査に至る経緯】

大野城市の東部に位置する乙金東地区は後述の通り古代より糟屋方面への交通の要所であった。唐山遺跡第1次調査は、交通路として重要な位置を占める付近一帯の中でも最も東側、糟屋郡宇美町との市境に近い丘陵上に位置する。

今回の調査要因は、対象地を含む範囲で大規模な土地造成工事が予定されたことによる。平成14年9月に対象地に関して埋蔵文化財の有無についての問い合わせがあった。現地を踏査したところ円墳を1基発見した。そのため、本調査を実施するに至った。

【第2次調査に至る経緯】

中・乙金東地区は大野城市の東部に位置し、県道60号線や九州自動車道が通り、古代から糟屋郡やその先の筑豊地域など東への交通の重要な位置を占めていた。今回の発掘調査の要因である県道飯塚大野城線（那珂川宇美線）の建設は、福岡市周辺の交通量の増加による県道60号線の渋滞緩和を図るため以前から計画されていた。これに伴い平成16年度に用地買収が完了した区間について、平成16年5月13日付けで福岡県那珂土木事務所より試掘調査の依頼書が提出され、本市教育委員会社会教育課文化財担当（平成19年度からふるさと文化財課、現・心のふるさと館文化財担当）との間で埋蔵文化財の取り扱いについての協議が行われた。6月21日付けで埋蔵文化財試掘調査委託契約書を締結し、用地買収が完了した一部区域において先行して試掘調査を実施することとなり、調査が開始された。平成17年度も平成18年1月17日付けで埋蔵文化財試掘調査委託契約書を締結し、用地買収の完了した一部区間について試掘調査を実施した。平成18年度は本格的な工事を開始したいとの申し入れがあり、さらに前年度の試掘調査の結果を受け本市教育委員会でも本格的な調査に着手する必要性が生じたため、改めて那珂土木事務所と教育委員会ふるさと文化財課との間で埋蔵文化財の取り扱いについての協議が行われ、4月28日付けで「県道飯塚大野城線関連遺跡埋蔵文化財に関する協定書」を、さらに5月8日付けで埋蔵文化財発掘調査委託契約書を締結し、試掘調査に加え本調査を開始した。

2 調査体制

平成14～20年度における発掘調査ならびに整理作業における調査体制は以下のとおりである。なお、令和6年度に第1次調査の整理作業を行い、第2次調査分は平成20年度及び令和5・6年度に実施した。

〔平成14～20年度〕

大野城市教育委員会

教育長 堀内貞夫（～15年6月） 古賀宮太（15年6月～）

教育部長 鬼塚春光（14年3月～17年3月）

小嶋 健（17年4月～20年3月）

森岡 勉（20年4月～）

社会教育課長 秋吉正一（14年4月～17年3月） 水野邦夫（17年4月～18年3月）

ふるさと文化財課長 舟山良一（18年4月～）

文化財担当係長 舟山良一（～18年3月） 中山 宏（18年4月～）

主 査 徳本洋一 石木秀啓 緒方一幹（16年4月～18年3月） 丸尾博恵

主任主事 大道和貴（～16年3月）

主任技師 林 潤也 早瀬 賢（16年4月～）（調査・整理担当）

技 師 上田龍児（19年4月～）（調査担当）

嘱 託 井上愛子（16年4月～20年3月） 城門義廣（18年4月～19年8月）

田尻義了（19年4月～6月） 遠藤 茜（19年4月～21年3月）

石川 健（19年7月～） 大里弥生（19年10月～）

甲斐康大（20年4月～21年3月） 中島 圭（20年4月～）

能塚由紀（18年8月～20年8月） 玉ノ井博紀（20年10月～21年3月）

整理作業員 松岡信子 町井裕子 鬼塚穂子 白井典子 村山律子 井上理香

渡部美香 城真奈美 橋本悦子 渡辺直美 仲村美幸

発掘作業員

原田敬子 大海雅子 高木幸子 満富スエコ 吉嗣波津子 岩切ふえ 前田チエ子

西田幸子 那波幸子 高木冴子 藤田和子 三原ひろみ 吉田香織 岡本妙子 馬場孝子

田中照子 寺垣みゆき 中垣 親 松山洋子 日野律子 小林敏子 坂本泰子

渡辺久美子 小林久美子 西村清子 貞包由起子 広渡隆子 穴井和子 立石律子

船越桃子 樋之口浩一 深野人美 大園英美 仲前富美子 井口のみ子 倉富倫子

釣屋種利 飯田三治 溝口 忍 金澤好子 田浦秀子 小川ケイ子 三善公子 山下隆子

團野ハマ子 篠崎繁美 東島真弓 安里由利子 中山文子 牧野和美 川村真樹子

村岡真由美 槇坂陽子 原口美奈子 山口文代 大島五津子 大浦旗江 清成健悟

高木由佳 木村奈津子 織田 徹 松田和美 戸渡京子 野崎美智子 倉住孝枝

稲富久子 山田賢治 松尾純子 末永 勝 安達はるみ 西本福雄 田中悦子 田野和代

吉村秀子 宮原ゆかり 尾ノ口英晴 碓井ふき子 木室友希 川岸昌子

〔令和4～6年度〕

大野城市

市 長	井本宗司
地 域 創 造 部 長	増山竜彦（～5年3月） 日野和弘（5年4月～）
大野城心のふるさと館長	赤司善彦
文化財担当課長	石木秀啓
文化財担当係長	林 潤也
	上田龍児（～6年3月） 早瀬 賢（6年4月～）
主 査	徳本洋一（～5年3月） 濱田裕之（5年4～6月）
主任主事	秋穂敏明（～5年3月） 下川みお（5年7月～）
主任技師	龍 友紀（5年4月～） 山元瞭平
技 師	齋藤明日香（～5年3月）
会計年度任用職員	澤田康夫 石川 健 山村智子 深町美佳
	照屋真澄（～5年3月） 尾川絢香（5年4月～）
（庶務）	小川久典（～5年3月） 大塚健三（～5年3月）
	清水康彰（～6年3月） 藤田 香（5年4月～）
	丹 宣幸（6年4月～9月） 慶田芳一（6年10月～）
（事務補助）	山上恵子（～5年3月） 井之口彩子 西村恭子（5年4月～）
（整理作業）	小畑貴子 古賀栄子 小嶋のり子 篠田千恵子
	白井典子（～5年3月） 津田りえ 仲村美幸 氷室 優
	松本友里江 眞田萌世（5年4月～）

Ⅱ. 位置と環境

1 地理的環境

大野城市が位置する福岡平野は、南を脊振山地、東を三郡山地に挟まれ、北は博多湾に面している。平野中央部に那珂川・御笠川が貫流し、広大な沖積平野を形成する。大野城市は福岡平野東南の最奥部に位置し、最も平野が狭くなる地峡部にあたる。古代以来この地峡部は交通の要衝で、現在でも九州縦貫自動車道・JR鹿児島本線・西鉄大牟田線・国道3号線など九州の南北を結ぶ幹線道が走っている。市域は東側を月隈丘陵に連なる乙金山・四王寺山、南側を牛頭山に挟まれ、中央に御笠川が貫流する。山地は早良花崗岩からなり、風化が著しく真砂土となっており、山麓部から平地丘陵部にかけて段丘が発達する。高位段丘は開析がすすみ、中位段丘は平坦部も多く、平野部では沖積地が広がる。

2 歴史的環境

旧石器時代 市域北東部の松葉園遺跡、薬師の森遺跡、原口遺跡、雉子ヶ尾遺跡、釜蓋原遺跡や市域南部の出口遺跡、横峰遺跡、本堂遺跡など丘陵上の遺跡でナイフ形石器・細石刃が確認される。周辺では南八幡遺跡、諸岡遺跡、井尻B遺跡、門田遺跡などで後期旧石器時代の遺物が分布する。

縄文時代 市域で草創期の遺構・遺物は確認されていないが、周辺では門田遺跡で爪形文土器が出土している。早期になると遺跡の数が増加し、市域北東部の善一田遺跡、古野遺跡、薬師の森遺跡、雉子ヶ尾遺跡、釜蓋原遺跡や市域南部の本堂遺跡といった丘陵地で押型文土器や石器が出土するほか、石勺遺跡などの平野微高地上にも遺跡が展開する。前期～中期の遺跡は市域では確認されておらず、周辺でも遺跡の数が増加する。後・晩期の遺跡として牛頭塚原遺跡・日ノ浦遺跡で後期後半～晩期の住居等が確認されているほか、善一田遺跡、古野遺跡、原口遺跡、薬師の森遺跡で後・晩期の遺物が分布する。なお、薬師の森遺跡や石勺遺跡では落とし穴状遺構を確認しており、これらは縄文時代の所産である可能性が高い。

弥生時代 弥生時代には福岡平野全域で遺跡が増加し、沖積地にも遺跡が展開する。市域では北部～中央部の丘陵・平野部に遺跡が多い。

【前期】 川原遺跡や薬師の森遺跡で板付Ⅰ式期にさかのぼる集落がある。墳墓は御陵前ノ塚遺跡（前期中頃）、中・寺尾遺跡（前期中頃～中期）、塚口遺跡（前期後半～末）で甕棺墓・土坑墓・木棺墓などが展開する。南部では牛頭日ノ浦遺跡で前期後半の甕棺墓・土坑墓がある。また御陵遺跡では前期中頃～末の集落が確認されている。前期末頃には仲島遺跡、石勺遺跡、ヒケシマ遺跡など平野部で集落の数が増加し、これらの多くは中期に継続する。なお、周辺地域では板付遺跡や那珂遺跡で早・前期の環濠集落が成立し拠点集落となる。

【中期】 市域では平野部の仲島遺跡、石勺遺跡、ヒケシマ遺跡が前期末から中期を通して継続する集落である。丘陵地でも北部の中・寺尾遺跡、森園遺跡で中期前半～後半に集落が展開し、南部でも本堂遺跡で小規模な集落がある。墳墓遺跡は前期から継続する中・寺尾遺跡や、森園遺跡で中期

後半を中心にした甕棺墓群があるほか、平野部の石勺遺跡や瑞穂遺跡で甕棺墓を主体とする墳墓が展開する。周辺では春日丘陵に大規模な集落・墳墓が出現し、青銅器生産も開始される。特に須玖岡本遺跡D地点甕棺は約30面の前漢鏡・ガラス璧・多数の青銅器を副葬し「王墓」と称される。

【後期】 中期以来の集落である仲島遺跡、石勺遺跡、中・寺尾遺跡、森園遺跡、松葉園遺跡、本堂遺跡などが継続するほか、村下遺跡、榎町遺跡で新たな集落が出現する。仲島遺跡では貨布・銅鏡片や青銅器鋳型などが出土しており拠点的な集落となる。周辺地域では中期以降春日丘陵一帯や那珂・比恵遺跡群が拠点集落として継続しており、特に春日丘陵一帯は『三国志』『魏書』東夷倭人条に記された「奴国」の中心的な地域と位置づけられる。

古墳時代

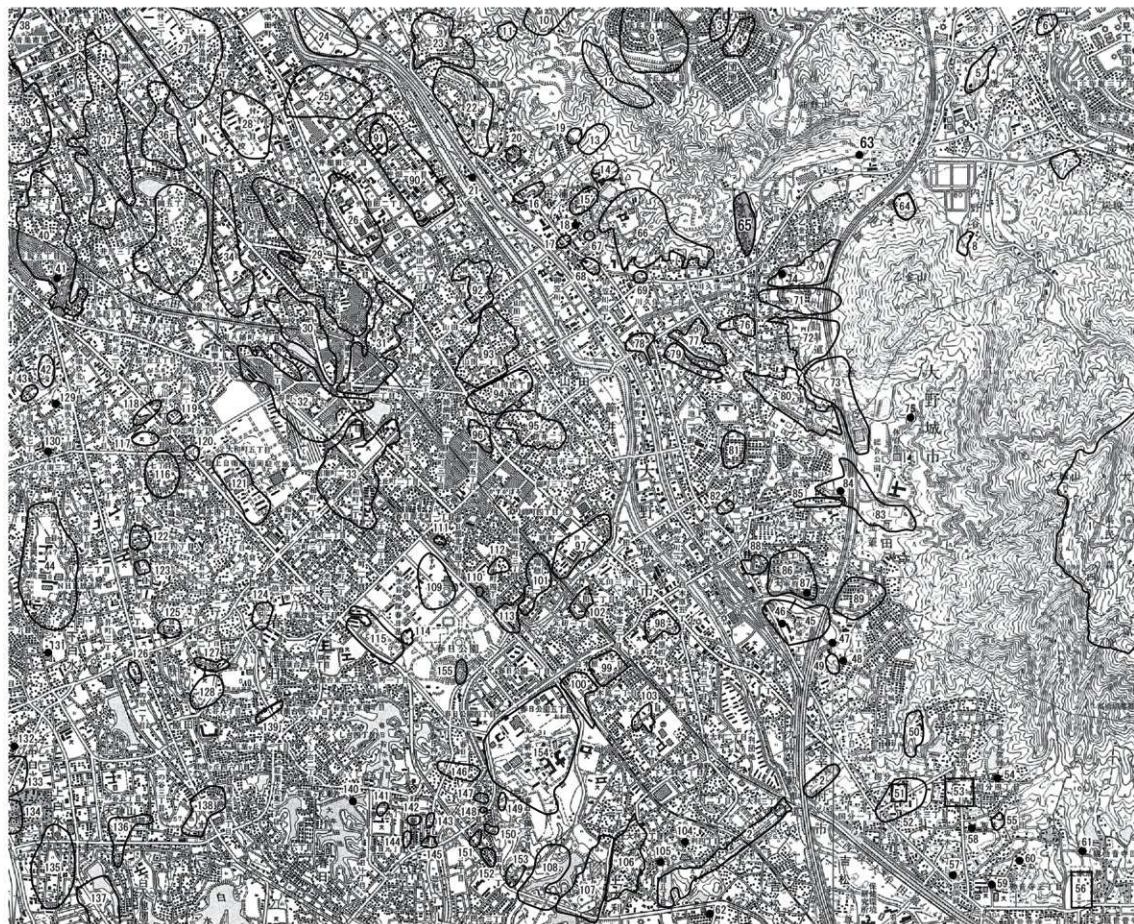
【前期】 古墳時代になると福岡平野でも前方後円墳が出現し、那珂川流域を中心に首長墓級の前方後円墳が分布する。福岡平野最古式の前方向後円墳として、三角縁神獣鏡が出土した那珂八幡古墳（全長75m）がある。これに後続する盟主墳として安德大塚古墳（全長62m）や三角縁神獣鏡が出土したとされる卯内尺古墳がある。市域において明確な前方後円墳は確認されていないが、御陵古墳群周辺にはかつて前方後円墳があったという指摘があるほか、江戸時代には三角縁神獣鏡が出土しており、有力な在地勢力が存在したと考える。

集落では、福岡平野の拠点集落として博多湾沿岸の西新町遺跡、博多遺跡群や那珂・比恵遺跡群がある。市域では仲島遺跡、石勺遺跡、村下遺跡が弥生時代後期から継続し、瑞穂遺跡、原ノ畑遺跡などでも集落が出現する。この他、森園遺跡や本堂遺跡でも再び集落の形成が認められる。

【中期】 福岡平野の盟主墳として初期横穴式石室を導入した老司古墳（全長76m）があり、博多遺跡群でも博多1号墳（全長56m）が築造される。また剣塚北古墳、井尻B1号墳、野藤1号墳、貝徳寺古墳など中規模の前方後円墳・円墳がある。市域では5世紀前半の笹原古墳（円墳：30m）があり、隣接して5世紀後半の成屋形古墳（帆立貝式前方後円墳：32m、太宰府市）が築造され、御笠川流域の盟主墳と考えられている。5世紀後半には牛頭塚原古墳群や古野古墳群で群集墳の形成が始まる。このうち古野古墳群では、鏡・鈴・鉄剣・農具類といった豊富な副葬品を有する古墳もあり、成屋形古墳につぐような有力な人物がいたことを示す。

集落遺跡は福岡平野全域で非常に希薄で、前代までの拠点集落である那珂・比恵遺跡群や西新町遺跡は消滅する。周辺では高畑遺跡、立花寺B遺跡などで滑石製品の生産を伴う集落が展開する。市域では石勺遺跡が弥生終末から継続する大規模な集落で、初期のカマドや朝鮮半島系の軟質系土器が出土し、滑石製品の生産も伴うことから拠点集落と位置づけられよう。このほか仲島遺跡、中・寺尾遺跡、森園遺跡、金山遺跡、原田遺跡、上園遺跡などで集落が展開する。

【後期】 福岡平野の盟主墳として6世紀中頃築造の東光寺剣塚古墳（75m）や日拝塚古墳（46m）といった前方後円墳がある。6世紀後半には大型前方後円墳は姿を消し、これに代わり6世紀後半以降、福岡平野一帯の丘陵上には直径10mほどの小円墳を主体とした群集墳が爆発的に増加する。市域では月隈丘陵から乙金山・四王寺山麓にかけて大規模な群集墳が展開し、善一田古墳群・王城山古墳群をはじめとする乙金古墳群がこれに該当する。善一田古墳群は朝鮮半島系資料や鉄器生産に関わる資料が豊富であり、王城山古墳群では7世紀を中心とした新羅土器が集中することが特徴



1. 大野城跡
2. 全城跡
3. 石長瀬古墳群
4. 飯倉山古墳群
5. 正通古墳群
6. 池原古墳群
7. 坂ノ本古墳群
8. 内野谷古墳群
9. 坂ノ庄古墳群
10. 七曲古墳群
11. 金剛山古墳群
12. 待田・通古墳群A群
13. 待田・通古墳群B群
14. 待田・通古墳群C群
15. 待田・通古墳群D群
16. 待田・通古墳群E群
17. 待田・通古墳群F群
18. 寺原古墳群
19. 堤ノ通古墳群
20. 影ノ通古墳群
21. 大山古墳
22. 全通古墳群
23. 立左寺古墳群
24. 立左寺古墳群
25. 井田山古墳群
26. 井田山古墳群
27. 板付古墳群
28. 井田山古墳群
29. 井田山古墳群
30. 井田山古墳群
31. 井田山古墳群
32. 井田山古墳群
33. 井田山古墳群
34. 井田山古墳群
35. 井田山古墳群
36. 井田山古墳群
37. 井田山古墳群
38. 井田山古墳群
39. 井田山古墳群
40. 井田山古墳群
41. 井田山古墳群
42. 井田山古墳群
43. 井田山古墳群
44. 井田山古墳群
45. 井田山古墳群
46. 井田山古墳群
47. 井田山古墳群
48. 井田山古墳群
49. 井田山古墳群
50. 井田山古墳群
51. 井田山古墳群
52. 井田山古墳群
53. 井田山古墳群
54. 井田山古墳群
55. 井田山古墳群
56. 井田山古墳群
57. 井田山古墳群
58. 井田山古墳群
59. 井田山古墳群
60. 井田山古墳群
61. 井田山古墳群
62. 井田山古墳群
63. 井田山古墳群
64. 井田山古墳群
65. 井田山古墳群
66. 井田山古墳群
67. 井田山古墳群
68. 井田山古墳群
69. 井田山古墳群
70. 井田山古墳群
71. 井田山古墳群
72. 井田山古墳群
73. 井田山古墳群
74. 井田山古墳群
75. 井田山古墳群
76. 井田山古墳群
77. 井田山古墳群
78. ヒカシマ遺跡
79. 中ノ寺遺跡
80. 東郷の森遺跡
81. 前山遺跡
82. 山門遺跡
83. 庵子ノ尾遺跡
84. 庵子ノ尾遺跡
85. 庵子ノ尾遺跡
86. 安楽原古墳群
87. 安楽原古墳群
88. 金山遺跡
89. 安楽原遺跡
90. 中島遺跡
91. 井田山古墳群
92. 井田山古墳群
93. 井田山古墳群
94. 立左寺遺跡
95. 立左寺遺跡
96. 井田山古墳群
97. 石ノ尾遺跡
98. 石ノ尾遺跡
99. 井田山古墳群
100. 井田山古墳群
101. 井田山古墳群
102. 井田山古墳群
103. ハヅコ遺跡
104. 井田山古墳群
105. 井田山古墳群
106. 井田山古墳群
107. 井田山古墳群
108. 井田山古墳群
109. 井田山古墳群
110. 井田山古墳群
111. 井田山古墳群
112. 井田山古墳群
113. 井田山古墳群
114. 井田山古墳群
115. 井田山古墳群
116. 井田山古墳群
117. 井田山古墳群
118. 井田山古墳群
119. 井田山古墳群
120. 井田山古墳群
121. 井田山古墳群
122. 井田山古墳群
123. 井田山古墳群
124. 井田山古墳群
125. 井田山古墳群
126. 井田山古墳群
127. 井田山古墳群
128. 井田山古墳群
129. 井田山古墳群
130. 井田山古墳群
131. 井田山古墳群
132. 井田山古墳群
133. 井田山古墳群
134. 井田山古墳群
135. 井田山古墳群
136. 井田山古墳群
137. 井田山古墳群
138. 井田山古墳群
139. 井田山古墳群
140. 井田山古墳群
141. 井田山古墳群
142. 井田山古墳群
143. 井田山古墳群
144. 井田山古墳群
145. 井田山古墳群
146. 井田山古墳群
147. 井田山古墳群
148. 井田山古墳群
149. 井田山古墳群
150. 井田山古墳群
151. 井田山古墳群
152. 井田山古墳群
153. 井田山古墳群
154. 井田山古墳群
155. 井田山古墳群

第1図 周辺遺跡分布図 (S=1/25,000)

である。このうち、善一田18号墳が最古・最大（6世紀後半築造・直径約25mの円墳）で、豊富な副葬品を有することから当地域の盟主的な墳墓に位置づけられる。また市域南部では須恵器工人の墓と考えられる牛頭中通・後田・小田浦古墳群や、6世紀後半の大型円墳である日ノ浦1号墳がある。また、特殊な墳墓として梅頭窯跡では窯跡を転用した墳墓があり象嵌大刀を副葬する。これらの横穴式石室を主体部とする古墳や群集墳は6世紀後半～7世紀にかけて築造し、8世紀代まで追葬を行うものもある。

集落は6世紀中頃以降、福岡平野の各地で再び増加する。比恵遺跡群では6世紀後半に大型建物群が出現し、「那津官家」の可能性が指摘される。市域では仲島遺跡、塚原遺跡、日ノ浦遺跡、上園遺跡、梅頭遺跡、本堂遺跡、薬師の森遺跡などで集落が展開し、7世紀代まで継続するものが多い。仲島遺跡は集落規模が大きく、多数の掘立柱建物の存在や多量の馬骨・子持ち勾玉などの存在から、拠点的な集落と考えられる。牛頭窯跡群周辺の塚原遺跡、日ノ浦遺跡、上園遺跡、梅頭遺跡、本堂遺跡などは須恵器工人集落と位置づけられる。薬師の森遺跡は一部に渡来人が居住し、鉄器生産・須恵器生産に関わる集落であることが明らかになっており、先述の乙金古墳群との対応関係が確実視できる。

なお、牛頭窯跡群の開始は6世紀中頃に求められ、乙金・四王寺山麓の乙金窯跡・雉子ヶ尾窯跡もこれに近接した時期に須恵器生産を開始する。

飛鳥時代 7世紀前半代は集落・墳墓ともに古墳時代後期の様相を踏襲する。墳墓で注目すべきは大野城市と福岡市博多区の境界に位置する今里不動古墳で、7世紀前半前後の大型円墳（直径約30m）とされ、御笠川右岸地域の盟主墳である。また6世紀後半の比恵遺跡群に展開した大型建物群は那珂遺跡群に移動する。この時期、牛頭窯跡群の須恵器生産はひとつのピークを迎える。また野添窯や月ノ浦窯などでは初期瓦を生産しており、那津官家比定地の那珂遺跡に供給されたことが知られる。牛頭窯跡群周辺では集落の数や住居の数が飛躍的に増加し、牛頭塚原遺跡、日ノ浦遺跡、上園遺跡などは前代から継続する須恵器工人集落と考えられている。

7世紀中頃～後半には、中国・朝鮮半島を含む東アジア世界が激動の時代をむかえる。日本も白村江の戦（663年）で敗戦を経験し、日本史上初の国際的な危機に直面する。これに伴い664～665年にかけて水城・大野城が相次いで築造される。国内情勢でも壬申の乱（672年）が起こり、これを機に律令体制に基づく本格的な中央集権国家を形成していくことになる。また大宰府では第Ⅰ期政庁が成立する。

このような時代背景の中で、市域全体で遺構・遺物の減少が認められる。例えば、薬師の森遺跡では7世紀中頃～後半段階に一時的に遺構・遺物が希薄となる。乙金古墳群では6世紀末～7世紀初頭前後に古墳築造のピークを迎え、7世紀後半にかけて順次築造数が減少していく。また、牛頭窯跡群における窯の数も減少し、一時的に須恵器生産も停滞期を迎える。

奈良時代 奈良時代になると律令国家が成立し、九州も大宰府を中心とした支配体制が整い、各地に官衙が設置される。またこの時期には官道も整備され、井相田C遺跡、板付遺跡、那珂久平遺跡や谷川遺跡、先ノ原・春日公園内遺跡などで道路状遺構が確認されている。集落遺跡として市域では仲島遺跡や隣接する井相田C遺跡で掘立柱建物を中心とした集落が展開する。周辺の高畑遺跡は

「高畑廃寺」あるいは那珂郡衙の可能性が指摘され、麦野遺跡・南八幡遺跡で大規模な村落が成立し、御笠川中流域の官道沿いに官衙や村落が展開している景観が復元できる。牛頭窯跡群では8世紀前半に窯の数が増加し、供膳具を中心に大量生産が行われる。この他、本堂遺跡群では村落内寺院と考えられる遺構が確認されている。また、薬師の森遺跡では集落経営が再開し、鈔帯金具・ヘラ書き須恵器・越州窯系青磁・製塩土器などの特殊遺物が分布する。鍛冶炉に加え、須恵器窯に関連する遺構もあり、古墳時代に引き続き手工業生産に関わる集落と考えられる。なお、水城では8世紀前半に門の建て替えがあり、東西門や欠堤部周辺を中心に水城に関わる遺構・遺物が展開する。平安時代 平安時代前半の9・10世紀代は福岡平野全域で遺跡数が減少する。牛頭窯跡群も規模が縮小し、9世紀中頃には操業を停止する。市域の遺跡も減少し、前代に見られた仲島遺跡、井相田C遺跡や麦野遺跡の集落も9世紀代に消滅する。9～10世紀代では牛頭月ノ浦窯跡、本堂遺跡、塚口遺跡、中・寺尾遺跡で土坑墓、薬師の森遺跡で土坑墓や掘立柱建物が展開する。

なお、9世紀前半に改称した鴻臚館は対外交渉の窓口として機能し、9世紀後半以降は中国商人の滞在・交易施設となり、初期貿易陶磁器が大量に出土している。

平安時代後半になると、11世紀中頃～後半に大宰府政庁・鴻臚館が廃絶し、かわって博多遺跡群において中世都市「博多」が成立する。律令制は完全に崩壊し、各地で武士が活躍する時代を迎える。市域においては塚口遺跡、森園遺跡、松葉園遺跡で輸入陶磁器を埋納する土坑墓が確認されており、有力者の存在を示す。集落は松葉園遺跡、御笠の森遺跡、宝松遺跡・上園遺跡で確認されている。なお、水城の外濠は平安時代末頃でほぼ埋没し、西門周辺では経塚の形成や棒状土製品など土器生産に関わる遺物が集中することから、律令制の弛緩とともに本来的な役割が終焉を迎えていくこととなる。なお、土師器・瓦器焼成に関わる棒状土製品は、水城西門周辺～上園遺跡・本堂遺跡周辺にかけて濃密に分布し、牛頭窯跡群終焉以降の土器生産の再開を示す。

鎌倉時代～戦国時代 市域では御笠の森遺跡、本堂遺跡、石勺遺跡、川原遺跡、薬師の森遺跡などで当該期の遺構が確認されている。薬師の森遺跡では12世紀後半～14世紀の中世墓が多数営まれるほか、集落を囲むと考えられる区画溝やピット群が広範囲に広がり、比較的有力な集団が存在していたと考えられる。御笠の森遺跡は11世紀後半以降継続して集落が営まれる。16世紀後半～17世紀中頃に多数の方形区画溝が展開し、有力農民層の集落跡と考えられている。なお、市域には戦国期の山城として乙金の唐山城、牛頭の不動城があるが、未調査のため詳細は不明である。

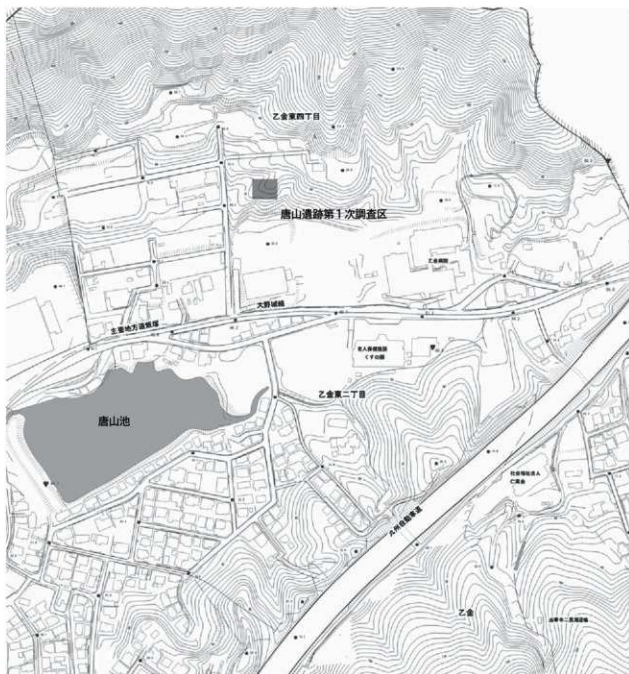
近世 後原遺跡、御笠の森遺跡、雑餉隈遺跡、村下遺跡、川原遺跡、屏風田遺跡などで遺構・遺物が確認されるが、当該期の遺跡の多くは現在の集落域と重複していると考えられる。このうち、市域中央部の後原遺跡は「白木原村」の本村にあたり、屋敷地や墓地在確認されており、地祇神社を中心とした集落景観が復元できる。また、市域東北部の薬師の森遺跡・原口遺跡・古野遺跡では近世～近現代にかけての墓地在展開し、乙金村の集団墓地と位置づけられる。

近代・現代 市域東北部の王城山遺跡・古野遺跡・原口遺跡で太平洋戦争時の防空壕跡を調査しており、このうち王城山遺跡のものは規模や遺物の内容から地下疎開工場と位置づけられる。また、市域中央部の野添遺跡では、本土決戦に備え野砲を設置したと考えられる洞窟壕が確認されている。

Ⅲ. 第1次調査の成果

1 調査の概要

調査地は大野城市乙金東4丁目1212-142他に所在する。調査面積は約670㎡である。遺跡は井野山から南にのびる丘陵上の斜面に位置し、標高は70～74mである。当地はもともと山林で、調査前の踏査により古墳を発見した。その時には、すでに天井石はなかったため、すでに盗掘を受けているものと予想された。



第2図 調査地の位置図 (S=1/4,000)

調査の結果、古墳時代後期の古墳1基を確認し、須恵器、土師器をはじめ、鉄製品、ガラス製品などが出土した。

2 遺構と遺物

(1) 古墳

1号墳

i) 古墳の位置と現況 (第3図・図版1・2)

唐山遺跡1次調査区1号墳は井野山から南にのびる低丘陵上の、標高70~74mの斜面に位置する。古墳の位置する場所は急傾斜地における段状の平坦面をなしている。

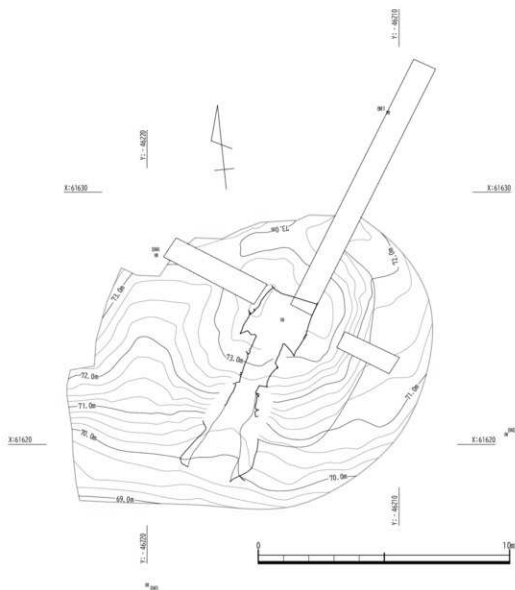


第3図 1号墳現況測量図 (S=1/300)

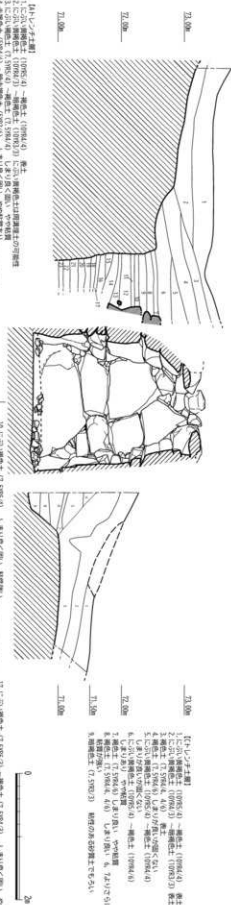
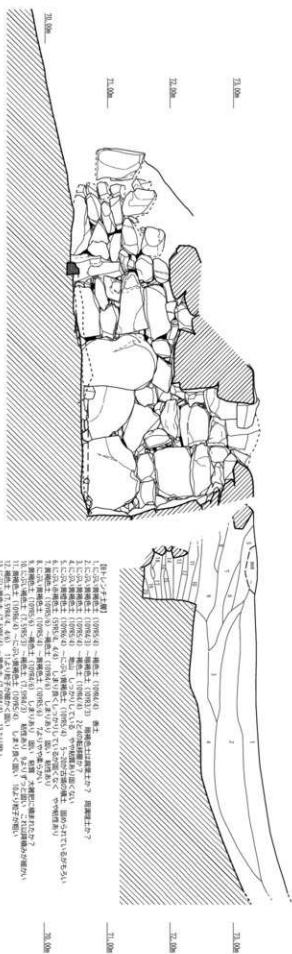
埋蔵文化財の有無に関する照会があったのち、対象地を踏査し古墳の石室を発見した。この時点で天井石は失われていた。上記のように古墳の位置する場所は平坦であるのに対し、墳丘の北西側と南から南東にかけては南向きのかなり急な斜面となっている。

ii) 墳丘（第4・5図・図版2～4）

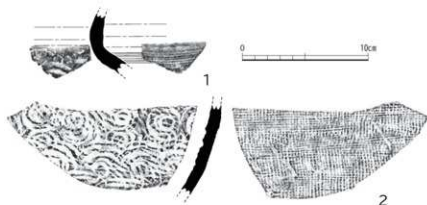
墳丘の盛土はすでになんかなり流失していたため、本来の墳丘の高さは不明である。現状で約3mを測る。墳形は円墳であるが、北東から南西方向にやや長い楕円形を呈する。墳丘の規模は、石室の主軸方向北東側で石室中央から3.2mまで墳丘の積土を確認でき、その北をめぐる周溝下端部までが5.0mを測る。石室中央から開口部方向は墳裾部まで約5.0mを測る。そのため、北東－南西の主軸方向で10mを測る。石室中央から東側は3.1m、同様に西側は3.4mの範囲で墳丘の積土が確認できる。そのため、主軸に直行する方向での墳丘規模は6.5mを測る。また開口部付近・短軸方向で最も墳丘が良く残存している部分で、6.7mを測る。



第4図 1号墳墳丘遺存状況図 (S=1/150)



第5图 1号墳墳丘土層断面図 (S=1/60)



第6図 1号墳周溝内出土遺物実測図 (S=1/3)

地山整形 古墳の玄室部分から墳丘の北西部にかけて造成し、平坦面を形成している。この平坦面を墳丘基底面としている。地山を平坦に整形した後、石室掘方を掘削している。石室北西側Aトレンチと石室北東側Bトレンチでは石室掘方はほぼ垂直に掘削されている。石室の南東側Cトレンチではやや傾斜のある掘方が50cmほど掘削される。

盛土 玄室北東側の裏込めに関しては、その上部までしか調査できなかった。そのため裏込めの下部の状況は不明である。裏込め上部は、主に15cm前後の厚さの層と10cm弱の薄い層によって構成される。粘性のやや強い土としまりのある固い土を複数枚単位で相互に積み上げる。裏込めを行ったうえで、石室側を若干高くして墳丘盛土を積み上げる。その後、周溝を掘削している。墳丘の盛土部分は層の厚さが裏込め土に比べ厚くなる。

石室東側Cトレンチでは、石室掘方に裏込め土が確認できた。粘性のやや強い土と固くしまった土を25cm程の層厚で積む。その上にしまりのある土を積む。石室西側Aトレンチでは、裏込めの土は5cm前後の層厚から20cm前後の厚さのものまであり、裏込めの下部ほどしっかりつき固めた層厚の薄いしまりのある裏込め土である。また、粘性のやや強い土と、固くしまった土をそれぞれ2～4層ほどで一単位として、交互に積む。裏込め上部に墳丘の積土を行うが、盛土はやや厚みを持つ。5・6層はほぼ水平に積み、その上の3・4層は石室側から斜めに傾斜した盛土を行う。2層が周溝の埋土の可能性があり、3層を積み上げた後に周溝を掘削している。

周溝内出土遺物 (第6図)

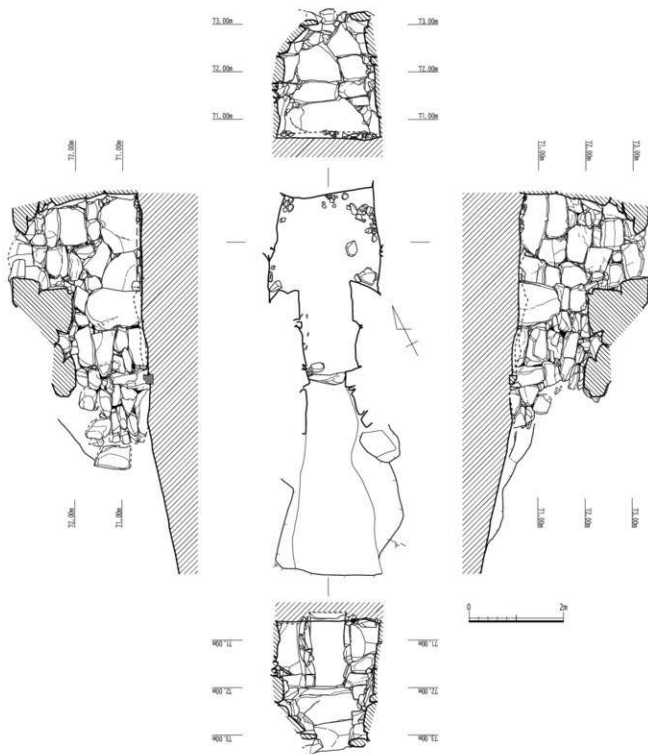
周溝内の出土遺物はいずれも埋土中の出土であり、原位置を保つものはない。

須恵器

甕 (1・2) 1は甕の頸部屈曲部の小片である。頸部外面は回転ナデで、胴部は粗いカキメである。内面は頸部がカキメ、胴部は同心円文当て具痕がみられる。内外面とも色調は灰白色を呈する。2は胴部下半部の破片で、外面は擬格子タタキの後に横方向のカキメを施す。内面は同心円文の当て具痕が残る。

iii) 主体部 (第7～14図・図版5～7)

主体部は主軸をN-25°-Eにとる、単室両袖式の横穴式石室である。開口方向は南西方向に開口



第7図 1号墳石室実測図 (S=1/80)

する。主体部残存状況について玄室は、天井石が失われるが、それ以外は残っており、遺存状態は良好である。主体部の全長は主軸上で5.8mを測る。羨道部は左右側壁、天井部ともにほぼ完存する。玄門部で天井までの高さは1.4m、樞石の部分で1.6mを測る。

玄室 平面形は方形に近いが、奥壁に対し玄門側の幅がやや広く、また左右の袖石が玄室側に張り出しており、ややいびつな形態を呈する。左側壁は2.3m、右側壁は2.2mを測り、玄門側の幅は2.3m、奥壁側の幅は1.9mと奥壁に向かって幅がやや狭くなる。床面から天井残存部までの最大高は2.4mである。

奥壁基底部には、幅広の大型石材1石を据える。また、右側壁と接する間隙部分にやや小ぶりの長方形あるいは不定形の石材を用いる。大型の石材はほぼ直立する。基底石の上位には長方形の石材2石を配し、横目地をそろえて積み上げる。これら2石の上面は標高71.8mでほぼそろえる。基底石上位から85°で持ち送られている。これら2石の上位には縦の目地をほぼそろえる形で左側壁側には側面が弧を描く形態の大型石材を積み上げ、その弧状の傾斜に合わせて方形あるいは台形のやや小型の石材を右側壁側に積み上げる。これら左右の石材上面は右側壁側から左側壁側に傾斜するが、この傾斜面から天井部にいたるまで不定形の小型石材を積み上げる。これらの石材のうち、右側壁側の2段目・4段目の石材は右側壁へ架け渡されている。

右側壁は、長方形の大型石材を奥壁側に、小型の方形石材を玄門側に据える。奥壁側の大型長方形石材上面が玄門側に傾斜するが、2段目の奥壁側には長方形の大型石材を据え、玄門側には台形と長方形の小型石材を積み上げる。2段目奥壁側2石の上面は標高71.6mでほぼそろえる。3段目は奥壁側に小型石材を積み、玄門側にはやや大型の長方形石材と不定形の石材を積み上げる。その上には3段目のやや大型の石材双方の上にやや大型の石材を据え、その奥壁側と玄門側に小型の石材を積み上げる。これら奥壁側と玄門側の小型石材の上にやや大きな石材2石を積み上げ、その間を小型石材で充填する。基底石上面から約80°で持ち送られている。

左側壁は、大型のやや横長の石材を基底石として配す。2段目は基底石2石の間に積み上げ、奥壁側はやや小型の長方形石材を用い上面をそろえて積み上げる。また、大型の石材の玄門側にも長方形の石材を積む。これらやや小ぶりの長方形石材は、間に大型の石材をはさむが、上面を標高71.8mにそろえる。3段目は奥壁側に長方形の大型石材を積み上げ、玄門側にそれより小さな長方形石材を積み、間に大小の石材を充填する。4段目は奥壁側に大型の石を2石積み、玄門側にはそれより小型の石材を据える。5段目は4段目の大型石材の上にやや高さの低い方形石材を2石積み上げ、玄門側に長方形の石材を据える。これら5段目の中央部位に大型の石材を据え、両側に小ぶりの石材を積み上げる。2段目の石材は奥壁側2石と玄門側1石で横目地がおおよそそろえるが、それより上の石積みでは4段目で横目地がそろえる。また、奥壁側の基底石の上に乗る石積みは縦目地がほぼそろえる。基底石上位から75°で持ち送られている。

玄門は、両袖ともに石材を多段積みする。いずれも高さのある方形石材を基底石として据えるが、右袖の石材が左袖のそれに比べ40cm程高さが低い。そのため、右袖は基底部の大型石材の上に2段積みし、左袖は基底部大型石材の上に1段石材を積み上げる。最後に、楣石を架構する。この石材は羨道部の天井石も兼ねる。楣石は両袖石間には見られず、玄門から1.8m離れた閉塞部に据えられている。玄門の高さは1.4m、幅は1.1mである。

石室床面の敷石は、後世の攪乱のためか遺存状態が悪くほとんど残存しないが、石室隅や右側壁、奥壁中央部にわずかに残る。右側壁側玄室中央部や袖石近くに比較的大型の石が残る。そのほかの



第8図 1号墳玄室遺物出土状況図 (S=1/30)

部分には小ぶりの石材が残存する。

玄室内遺物出土状況 (第8図・図版7)

後世の攪乱のため、遺物の残存状況は悪い。左側壁の玄門側隅で刀子 (9) が出土。右側壁の玄門側隅から須恵器杯蓋 (3) が出土している。また、石室内北隅付近からは丸玉 1 (6) と耳環 1 (7) が出土している。それに加え耳環 1 (8) が石室内の攪乱坑から出土している。

玄室出土遺物 (第9図・図版8)

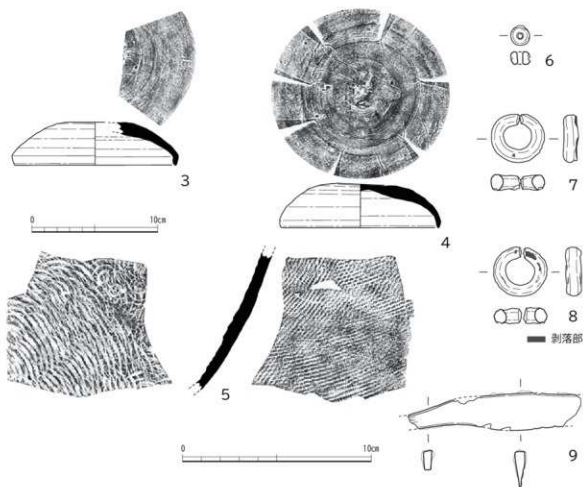
須恵器

杯 (3・4) 3は杯蓋の破片で、口縁部から天井部まで残存する。平坦な天井部に直線的な体部がつき、口縁部でやや内側に屈曲して端部に至る。外面には火樺に加え、ヘラ記号がみられる。口径は13.2cmに復元でき、器高は3.4cmである。形態、胎土や色調などから羨道で出土した10と同一個体と考えられる。4は完形の杯H蓋である。天井部から丸みをもつ体部がつく。口縁端部は丸く収める。天井部から体部外面にかけて火樺がみられる。内面は回転ナデである。中心部が丸く窪んで器壁が薄くなる。外面にはヘラ記号がみられる。口径12.6cm、器高は3.5cmである。

甕 (5) 底部近くの胴部片である。外面は擬格子タタキの後横方向のカキメを施す。内面は同心円文の当て具痕が密にみられる。残存部により外面の風化の程度に差がみられる。

ガラス製品

丸玉 (6) 直径1.05cm、厚さ67mmのガラス製丸玉である。孔径は32mmで側面中位は剥離している。色調は半透明青緑色で部分的に白濁する。



第9図 1号墳玄室出土遺物実測図（6～9はS=1/2、その他はS=1/3）

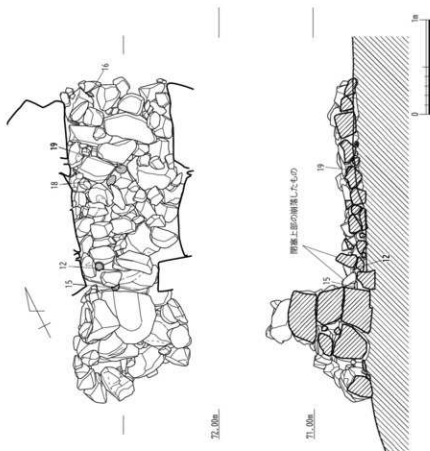
銅製品

耳環（7・8） 7は銅芯で表層の金が良いが残るが、裏面は金が一部剥がれる。外径2.83cm、内径1.48cmで、厚さは82mm、重さは16.9gである。8も銅芯で、表裏面とも部分的に表層の金が剥がれる。外径2.8cm、内径1.54cmで、厚さ83mmを測る。重さは16.7gである。

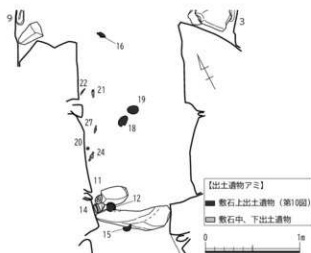
鉄製品

刀子（9） 先端部、茎部の一部を欠損する。残存長9.2cm、最大幅2.0cmを測る。重さ18.1gである。羨道 玄門から石室主軸に沿って南西方向にのびる。上記のように玄門両袖石の間には柵石あるいは仕切石はみられず、玄門から1.8m離れたところに仕切石がおかれている。左側壁は玄門から主軸に沿って直線的に構築されるが、右側壁は仕切石の部分で基底部の長方形石材が羨道部につきだすように据えられている。そのため、片袖の前室のような空間が形成されている。この部分から墓道に向かって側壁はやや開き気味に据えられる。

仕切石のおかれた位置の左側壁には長方形の石材1石を立てて据えており、袖石との間には横長の石材を基底部の石材として据える。この石材の上に玄門側は横長石材を積み、仕切石側には小型の石材を2段積む。さらにその上には横長の大型石材を2段積み、その上に小ぶりの石材を積み上げる。仕切石横の縦長に据えた石材の上には小型ないしは中型の石材を縦方向に目地がおおよそそ



第10図 1号墳閉塞施設実測図 (S=1/40)



第11図 1号墳羨道遺物出土状況図 (S=1/40)

ろうように積み上げる。

羨道部の右側壁は、左側壁と同様に仕切石横に基底部石材として長方形の大型石材を縦に据える。この石材と袖石の間の基底部および2段目には目地をそろえて長方形の比較的大きな石材2段を積み上げる。その上にはやや不整形の石材を積み、袖石との間にはやや小さな石材を積む。4段目には開口部側の2石にまたがって横長の石材を積み、その上には小型石材を天井部まで積み上げる。袖石側には小型の石を3段目と目地をそろえるように2石積み上げる。

床面は敷石が敷設される。また、玄門から仕切石に向かって床面がやや低くなる。

閉塞施設 閉塞は、上記の仕切石に接するように開口部側に積み上げられる。仕切石の南に接するように基底部に大型の石材2石を据

え、仕切石側の1石に比較的大きめの石を積み上げる。主軸上に比較的大きめの石材を配し、その周りにこぶし大程から中型の石を積み上げる。閉塞の最も高い部分は標高71.5mで、床面から1.1mほどの高さまで残存している。閉塞部の天井石の高さは標高約72.0mであることから、ここまで本来閉塞していたものと考え、上部が約50cm欠落しているものと推測できる。墓道の堆積状況が

不明なことから詳細はわからない。しかし、仕切石の玄門側、敷石上に閉塞に用いられていたと考えられる小石が複数転落した状況がみられることから（第10図）、おそらく後世の攪乱の際に、閉塞石最上部が再開口されたのであろう。

羨道部遺物出土状況（第11図・図版6・7）

羨道からは遺物が比較的多く出土している。遺物は大きく2つのレベルに分かれて出土した。敷石上あるいはそれとほぼ同じレベルで出土した遺物は、須恵器（12・15・16）、土師器（18・19）である。このうち仕切石にのった状態で須恵器杯Gの身（15）と蓋（12）が出土している。12は左側壁よりに位置する。玄門から仕切石までのほぼ中央部の主軸上に18・19の土師器が位置する。16の須恵器は甕片で玄門近くから出土している。

敷石の下位のレベルからも主に左側壁に沿って鉄器や土器が出土している。11・14は須恵器の蓋杯で、仕切石に接する位置から出土する。20は耳環、24・27は鉄鏃である。いずれも玄門から仕切石までのほぼ中央部、左側壁沿いに位置する。21・22はいずれも鉄鏃で玄門に比較的近い場所から出土している。

羨道部出土遺物（第12図・図版8・9）

須恵器

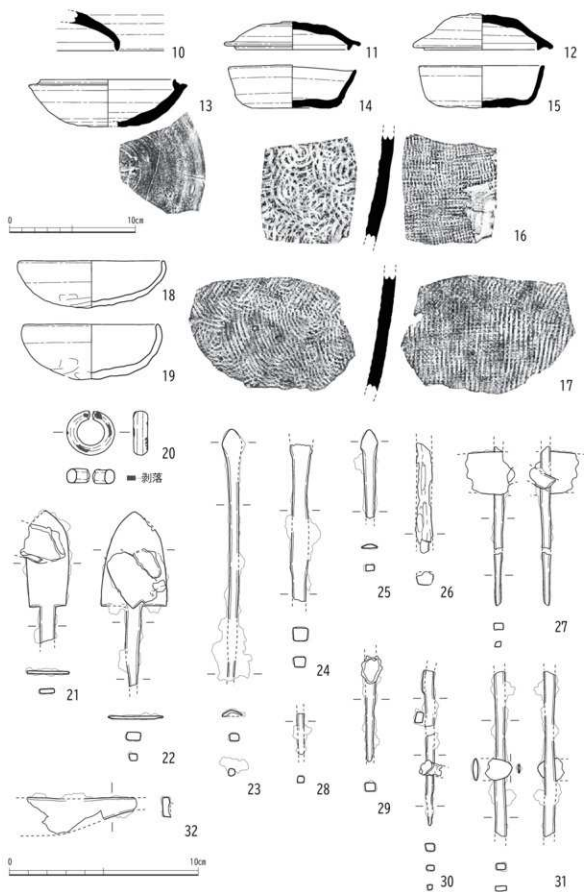
杯（10～15） 10・11・12は杯蓋である。10は杯蓋の口縁部から体部にかけての小片である。浅い体部から口縁部が屈曲し内面に稜を形成する。端部はやや細くなる。体部の器壁は残存部で8mm程とやや厚みがある。体部外面にヘラ記号が部分的にみられる。11は完形の杯蓋である。天井部外面はヘラ切り未調整である。内面は回転ナデの後、横あるいは中心から放射状にナデの痕跡が残る。口径9.0cm、器高2.2cmである。12は杯Gの蓋で、口縁部の一部を欠損するがほぼ完形である。天井部から丸みを持って体部が付く。天井部外面はヘラ切り未調整である。口径9.1cm、器高2.9cmである。

13・14・15は杯身である。13は杯身で、薄い器壁の底部からゆるやかに体部が立ち上がり、口縁部は短く内傾して立ち上がる。外面にはヘラ記号がみられる。重ね焼きにより受部には別個体がわずかに融着する。外面は全体的に降灰がみられる。口径は10.7cmに復元でき、器高は3.8cmを測る。14は完形の杯G身で、底部からやや外に開く体部が付く。口縁端部は先端をやや細く収める。底部外面はヘラ切り後未調整、内面は回転ナデの後中心から放射状になでた痕跡が残る。口径10.2cm、器高3.4cmである。焼け至まで器形が歪んでいる。15は杯Gの身で、口縁から体部の一部を欠損する。底部はヘラ切り後ナデ、体部は回転ナデである。底部内面は回転ナデの後、中心から放射状になでた痕跡が残る。口径は9.9cm、器高は3.4cmである。口縁部から体部にかけて一部降灰がみられる。

甕（16・17） 16は甕の胴部小片である。外面は擬格子タタキの後カキメを施す。内面は同心円文の当て具痕が残る。17も甕の胴部片である。外面は擬格子タタキ、内面は同心円文の当て具痕が残る。

土師器

杯（18・19） 18は体部を一部欠損するがほぼ完形の杯である。丸底の不安定な底部から湾曲した



第12図 1号墳築道出土遺物実測図 (20~31はS=1/2、その他はS=1/3)

体部が立ち上がる。口縁部はやや内湾し、丸く端部を収める。底部外面は手持ちのヘラケズリである。その他の部分は器面の荒れが著しく調整は不明であるが、内外面とも全体的に平滑に仕上げられている。口径11.7cm、器高3.8cmである。胎土に微細な金雲母の粒子を多く含む。19も不安定な底部から湾曲する体部が立ち上がり、やや内湾する口縁部に至る器形を呈する。47に比べ残存はよくなく、2/3程が残る。底部外面は手持ちヘラケズリである。その他の部分は器面の荒れが著しいため調整などは不明である。胎土に微細な金雲母の粒子を含む。口径は10.9cmに復元でき、器高は4.4cmである。

銅製品

耳環 (20) 銅芯で表層の金が良く残るが、表裏面の一部が剥がれる。外径2.51cm、内径1.47cmで、銅芯は縦長の楕円形を呈する。厚さは78mm、重さは13.6gである。

鉄製品

鉄鏃 (21~31) 21は鏃身部から茎部の一部が残存する。鏃身部平面形は長三角形である。鏃身関部は角関で直角をなす。残存長は7.05cm、鏃身部長5.1cm、鏃身部幅2.3cm、茎部残存長1.95cm、茎部幅0.8cmである。22は茎部先端を欠損する。鏃身部平面形は三角形を呈する。鏃身関部は直角をなす。残存長9.2cm、鏃身部長4.95cm、鏃身部幅2.85cmである。茎部は残存長4.25cm、幅0.75cmである。重さは16.5gである。鏃身部に長軸に対し斜めに別個体の鏃身部が錆着する。23~31は長頭鏃である。23は鏃身部から頭部が良く残存しており、頭部先端部を欠損する。刃部は片丸造である。24は鏃身基部から頭部の一部が残る。25は鏃身部から頭部の一部が残る。刃部は片丸造である。26から31は頭部片である。28は断面方形を呈し、その他は断面長方形である。

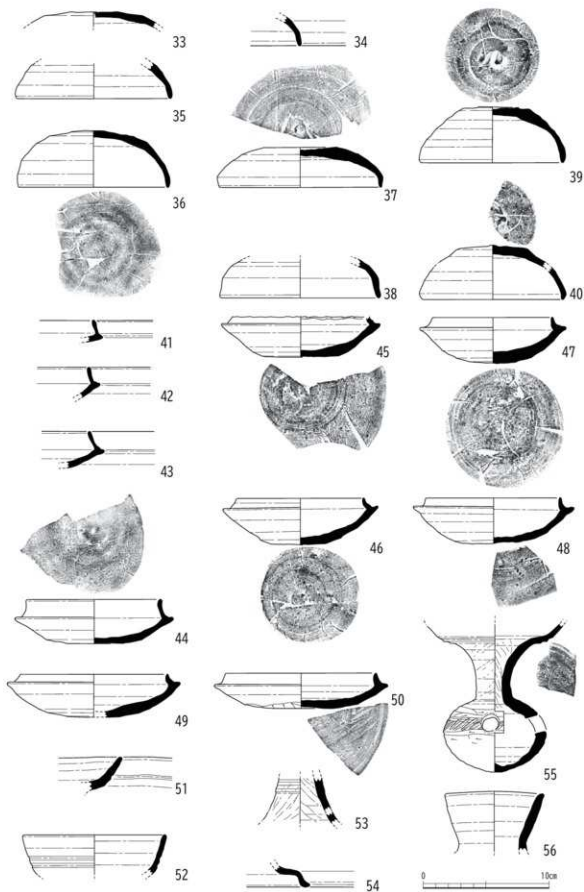
刀子 (32) 刃部の基部近くと茎部の一部が残る。刃は遺存しない。残存長5.8cm、残存幅1.8cmを測る。重さ6.0gである。

墓道 仕切石から南西方向に約1.2mまで閉塞石が積み上げられているが、この範囲まで左右の側壁が構築されている。右側壁の最も南西部の石材は抜き取られているが、ここからさらに南西方向に2.4mほど主軸に沿って墓道がのびる。仕切石から先は両側とも次第に幅が広がりながら墓道先端部にいたる。床面は閉塞部から先は緩やかに傾斜し、閉塞部平坦面から墓道先端部にかけての高低差は約60cmを測る。

墓道出土遺物 (第13・14図・図版9・10)

須恵器

杯 (33~50) 33~40は杯Hの蓋である。33は天井部の破片である。焼成は良好。34は口縁部の小片で端部はやや先細りに丸く収める。35は口縁部から体部中位の破片である。口縁部付近でやや肥厚し端部は丸く収める。口径12.4cmに復元できる。36は天井部と体部が一体化し、器高が口径に対して比較的高くドーム状の器形を呈する。天井部内面にヘラ記号が施される。口径は12.1cm、器高は4.5cmを測る。37は天井部がやや薄く平坦で、やや器高の低い体部が付く。口縁部で緩く屈曲し先細る口縁端部にいたる。天井部から体部の外面にヘラ記号がみられる。また火樺も外面に認められる。口径13.0cmに復元でき、器高は3.2cmである。38は口縁部から体部にかけての破片である。体部からゆるく折れ、口縁部はやや反って端部にいたる。内外面ともにぶい橙色から褐色を呈する。



第13図 1号墳墓道出土遺物実測図1 (S=1/3)

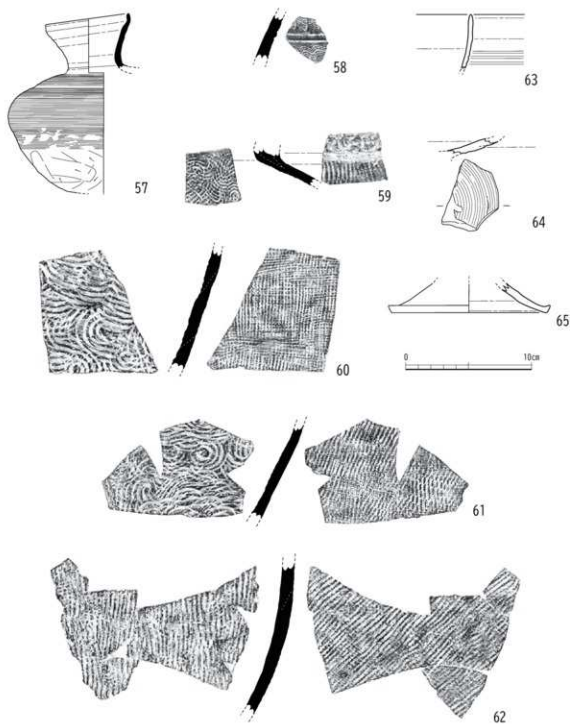
焼成は良好。口径は12.8cmに復元できる。39は天井部が平坦で、そこから体部が口縁部に向かってやや湾曲して付く。体部中位でいったん器壁が薄くなるが、口縁部付近でやや厚みが増し端部にいたる。天井部外面にヘラ記号がみられる。口径は11.6cmである。40は口縁部から天井部にかけての小片である。体部が一部欠損する。平坦な天井部から内湾気味に体部が立ち上がる。口縁部は短く内側に曲がり端部を丸く収める。天井部外面にヘラ記号がみられる。口径は11.7cmに復元できる。

41～50は杯Hの身である。41・42・43は口縁部の小片で、41は蓋の受部が非常に小さく、内傾して直線的に立ち上がる口縁部が付く。口縁端部はやや肥厚し丸く収める。42も受部が小さく、内傾して口縁部が立ち上がる。端部はやや肥厚して丸みを持つ。43も小さな受部に内傾して立ち上がるやや高い口縁部が付く。44は平坦な底部から外に開く体部が付く。受部は小さく、口縁の立ち上がりはやや内傾するが高く、端部が肥厚し丸く収める。口径は10.8cmに復元できる。底部から体部内面にかけてヘラ記号がみられる。45は平坦な底部から直線的に開く体部が付く。口縁部は内傾して立ち上がるが、端部は打ち欠きにより欠損する。底部から体部の外面にヘラ記号がみられる。46はほぼ完形の杯H身である。底部と体部の境が不明瞭である。口縁は内傾して立ち上がり、端部はやや直立気味に反る。口径は10.1cmである。底部外面にヘラ記号がみられる。47は口縁部が一部欠損する以外、ほぼ完形の杯身である。底部から湾曲した体部が立ち上がる。口縁部の立ち上がりは内傾しやや外反する。外面のヘラケズリは粗い。口径は9.7cmを測る。底部外面にヘラ記号がみられる。48も口縁部と体部が一部欠損するが、完形に近い個体である。底部と体部が一体となりゆるく湾曲しながら立ち上がる。口縁部は内傾し端部は先が細くなる。口径は10.7cmである。底部外面にヘラ記号がみられる。49は底部からゆるやかに浅い体部が立ち上がる。口縁部は短く内傾して立ち上がる。口縁端部は先細る。受部に別個体がわずかに融着する。外面にはヘラ記号がみられる。内面は回転ナデの痕跡が同心円状に明瞭に残る。50は平坦な底部から浅い体部が開く。口縁部の立ち上がりは短く内傾する。底部外面は手持ちのヘラケズリで、内面は丁寧な回転ナデを施す。口径は12.0cmに復元でき、器高は2.8cmと低い。

高杯（51～54） 51・52は無蓋高杯の身で、51は口縁部の小片で、底部から口縁部につけ外に浅く開く形態を呈する。体部中位に1条の沈線が巡る。やや焼け歪む。52は無蓋高杯の口縁部から体部の破片である。体部に2条の沈線が巡る。体部から口縁部につけやや外に開く形態を呈する。口径は11.4cmに復元できる。53は高杯の脚部小片である。外面は回転ナデで、内外面ともシボリ痕が比較的明瞭である。内面には降灰がみられる。54は赤焼の須恵器あるいは須恵器を模倣した土師器であろうか。短脚高杯の脚部小片である。脚裾部近くで水平に広がり、裾端部に向け下方に屈曲する。内外面とも橙色を呈する。

甕（55） 頸部上半から口縁部にかけて大きく欠損するが、そのほかの部位はよく遺存している。やや扁平な胴部にほぼ直立する頸部が付く。この頸部の上半は口縁部に向かって大きく開く。頸部上端部から屈曲した後外に向かって開く口縁部が付く。口縁部と頸部の境には2条の浅い凹線状の施文が施される。胴部最大径部には上下2条の沈線の間を斜行する連続刺突で充填する。この文様部の施文後に一か所注口部を差し込むための穿孔が施される。

平瓶（56・57） 56は口縁部の破片であるが、平瓶の口縁であろう。口縁部下の外面は強いヨコナ



第14図 1号墳墓道出土遺物実測図2 (S=1/3)

デである。器壁がやや厚く、焼け歪んでいる。57は口縁部から底部にかけて残存するが、全体の半分ほどを欠損する。口縁部は頸部から緩く折れ直立して立ち上がる。胴部は下半部を手持ちヘラケズリし、それより上部はカキメを施すが、一部は横方向のナデで不明瞭になる。口径は6.8cmに、器高は14.2cmに復元できる。底部外面にヘラ記号が一部みられる。

甕 (58~62) 58は甕の頸部の小片で、外面は浅い2条の凹線の下に櫛波状文が施される。内面はナデである。59は胴部の小片で、頸胴部接合部で頸部が剥離している。外面は擬格子タタキで内面は同心円文当て具痕がみられる。また、頸部との接着部にも外面のタタキと同様の調整痕が残っており、胴部のタタキを行った後に、頸部を接合している。61も胴部片であるが、外面は擬格子タタキと間隔をあけた横方向のカキメ、内面は同心円文の当て具痕がみられる。60は胴部の破片で、外面は擬格子タタキを行った後、5cm程の間隔をあけ横あるいは斜め方向の粗いカキメ状の調整を施す。内面は同心円文の当て具痕(当具の径は約5cmで2と近似する)が残る。62も甕の胴部片で外面は擬格子タタキで内面は平行当て具痕がみられる。

土師器

椀 (63) 椀の口縁部片で、体部には少なくとも3条の沈線が巡る。内外面とも器面の荒れが進んでいるが、表面は平滑でミガキの痕跡がわずかに残る。

高杯 (64・65) 64は杯部で、脚部との接合部近くの破片である。外面には同心円状にカキメが施される。65は高杯の脚部である。脚裾部に向かって大きく開く。裾端部はわずかにつまみ上げたような形態を呈する。脚裾部は12.8cmに復元できる。

3 まとめ

唐山遺跡第1次調査では1基の古墳を調査した。以下では本古墳の年代的位置づけを中心に整理しておく。1号墳は、横穴式石室を主体部とする円墳である。墳丘の盛土はかなり流失していたため本来の高さは不明である。残存する墳丘の形状は、北東-南西方向の主軸で10m、北西-南東方向で6.5mほどの楕円形を呈する。周溝底面までの規模をみると、主軸方向で墓道開口部から石室北東部周溝底面までが11mを測る。主体部は南西方向に開口する単室両袖式の横穴式石室である。全長は8mを測る。玄室は奥壁側がやや幅が狭いがほぼ方形をなす。

福岡平野における群集墳の検討により、石室構造については、以下のような点でおおよその時間的推移が明らかにされている(土井1992)。一つは玄室の方形化、さらに玄室高、前壁高の減少、腰石の退化と石積みの粗雑化などである。1号墳の玄室について玄室比((左側長+右側長)/(奥幅+前幅))をみると1.1となる。前壁高と玄室高については、石室天井部が失われており検討できないが、側壁の構築をみると、左側壁と右側壁でやや異なり左側壁では、腰石最大高(96cm)が玄室下半高の1/2(71cm)以上を占めている。腰石より上の石積みは目地が必ずしもすべてそろっているわけではないが、用いる石材は腰石に比べ小さなものを使用している。右側壁は左側壁に比べ腰石とその上部の石材で大きさにさほど大きな差はないが、石積み自体やや整然としている。右側壁の腰石最大高(62cm)は玄室下半高の1/3~1/2である。以上の石室構造から土井氏の石室型式分類の単3型式に相当し、時期は6世紀末~7世紀初頭前後と推定される(土井1992)。以上のような石室の構造から唐山遺跡第1次調査1号墳の築造時期は6世紀末~7世紀初頭頃と考えることができる。

次に出土遺物から古墳の使用期間について整理しておく。玄室からは須恵器杯Hの蓋が2点出土した。いずれも口径などからIVA期のものといえる。一方、羨道からは杯H蓋と身の破片が出土し

た。蓋は口径復元ができなかったが、身は口径がやや小さい。それに加え、杯Gの蓋と身も各2点出土しており、こちらはほぼ完形である。これらの杯Gは蓋と身各1点が敷石下位(11・14)および敷石あるいは切石上(12・15)から出土している。以上から羨道出土遺物にはⅣ期の遺物に加え、Ⅴ期の遺物が含まれる。墓道からは杯Hの蓋と身が比較的多く出土した。蓋の口径には13cm前後と11cm～12cm前後のものが含まれ、ⅣA期とⅣB期のものが混在している。また、臑も1点出土するが、口径が胴部最大径より大きくⅣA期あるいはそれよりやや古い特徴を持つものと考えられる。

以上のような出土遺物から、1号墳からは、ⅣA期、ⅣB期とⅤ期の遺物が出土しているものと考えることができる。墓道からはⅣA期、ⅣB期の蓋杯が出土しており、小片化したものと比較的良好に残っている個体が認められる。このことは、少なくとも両時期にわたって複数回墓道が開口された可能性を推定できる。また、羨道からはⅤ期の蓋杯が出土していることから、Ⅴ期にも少なくとも1度は開口されているものと考えることができる。人骨が遺存しておらず、また副葬品も少ないことから追葬回数や被葬者像については不明であるが、築造時期は6世紀末から7世紀初頭前後と石室構造から推定される年代と出土遺物の年代観で整合性を持つ。そのため、本古墳は6世紀末～7世紀初頭前後に築造され、複数回の開口を経ており、Ⅴ期である7世紀中頃まで祭祀などが行われたものと推定される。

【文献】

土井基司1992「横穴式石室から見た群集墳の諸相－博多湾周辺地域を中心に－」『九州考古学』第67号：63－85。九州考古学会。
舟山良一他2008『牛頭窟跡群－総括報告書Ⅰ－（大野城市文化財調査報告書第77集）』大野城市教育委員会。

IV. 第2次調査の成果

1 調査の概要

調査地は、大野城市乙金東3丁目ほか（小字桑原）に所在する。調査面積は約5000㎡である。遺跡は乙金山から西に派生する丘陵上に展開し、調査地はそのうちの一つの尾根及び緩斜面にあたる。調査前の土地利用は東側が山林、西側がブドウ畑であった。調査前の踏査の結果、東側の山林部には横穴式石室を主体部とする複数の古墳が残っていることが明確であった。西側は緩傾斜地であったため集落遺構が存在する可能性を想定していた。

調査の結果、古墳時代後期～終末期の古墳5基、大溝1条などを確認し、須恵器・土師器をはじめ石製品・鉄製品・ガラス製品などが出土した。

2 遺構と遺物

(1) 古墳

① 1号墳

i) 古墳の位置と現況（第15・16図・図版12）

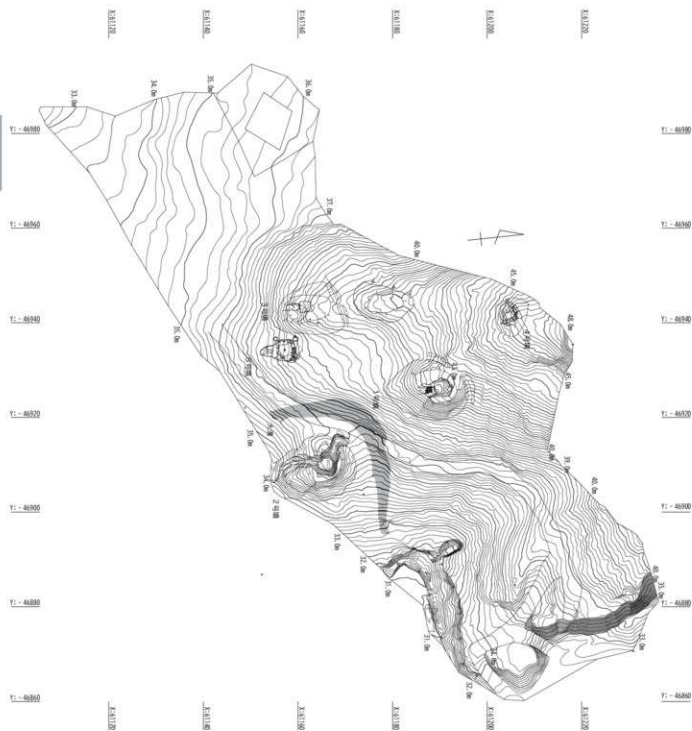
調査区中央部の丘陵尾根からやや下った南側斜面に立地する。標高40～42m付近にあたり、南側の斜面下方に2号墳、北側の斜面上方に4号墳が位置する。調査前より墳丘の高まりが明瞭、中央部に落ち込みが認められ、横穴式石室を主体部とする古墳であることが明確であった。墳丘上部の盛土は流出し、石室上部の石材も消失しており、遺存状況は悪い。

ii) 墳丘（第17～21図・図版12～14）

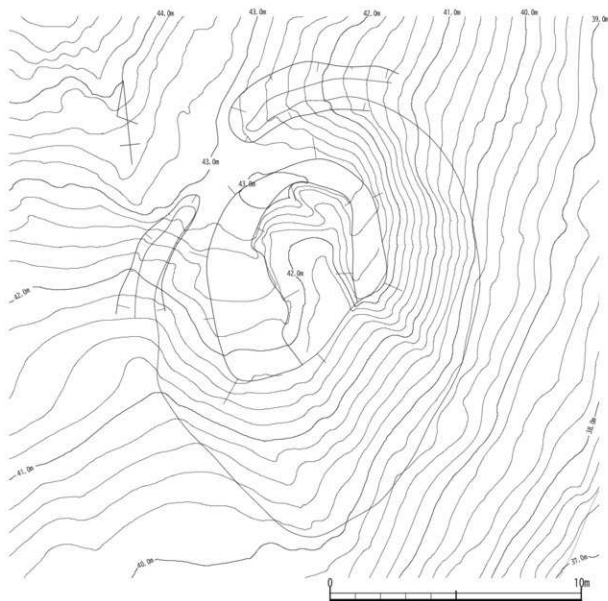
周溝下端部で計測して、直径10～11mの円墳である。周溝は斜面上方のⅠ～Ⅲ区にかけて丘陵を切断するように三日月状に巡る。現状の墳頂部は43mで、玄室床面との比高差は最大で2.1mである。**地山整形** 丘陵斜面を造成して平坦面を造り墳丘基底面とする。Cベルトでは地山直上に旧表土が残るが、A・Bベルトには旧表土が残っていないことから、斜面の上方のⅠ・Ⅱ区側は切土し、斜面下方のⅢ・Ⅳ区側には切土が及んでいないと考えられる。中央部に石室掘方、Ⅰ～Ⅲ区にかけて緩やかに周溝を掘削する。周溝埋土はAベルトでは地山・墳丘由来の土が堆積しており、比較的短期間のうちに土砂が流入したことを示す。Bベルトでは周溝埋土下層に黒褐色・褐色の腐食土層が、上層に地山・墳丘由来の褐色土が堆積しており、一定期間開放状況にあった可能性がある。Cベルト墳裾には比較的急斜面にあたることから、最上層の表土・流土のみが堆積する。また、B・Cトレンチ側では地山もしくは旧表土上に地山由来の土で薄く広がり、地山整形後の整地土と考えられる。

盛土 地山整形及び一部を整地した後、石室掘方の掘削及び埋め戻しを行い、石室構築と連動して墳丘盛土を行う。全体的に積土単位が細かく、斜面下方のCベルト側では特に丁寧に積土している。

標高41.8m付近で大きく2つの工程に分かれ、玄室腰石の上端レベルに一致する。Aベルトでは石室掘方埋め戻し後、薄く広範囲に積土する。その上には玄室中心から3mほどの範囲に、細かい



第15図 遺構配置図 (S=1/800)

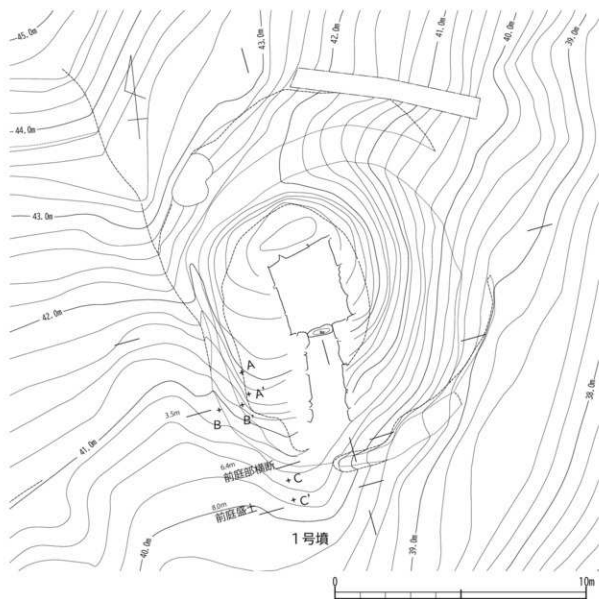


第16図 1号墳現況測量図 (S=1/150)

単位で石室側に内傾させるように土饅頭状に積土する。さらにその外側・上側を被覆するように粗い単位で填堀まで積土する。Bベルト側では地山直上をやや厚く整地後、掘方掘削・埋め戻しを行う。その上部には奥壁の2・3段目の石材を被覆するように積み、最後にやや粗い単位で積土する。Cベルトでは、石室側をわずかに整地し、掘方掘削・埋め戻しとともに地山由来の土で広範囲に薄く積土する。その上に腰石を被覆しながら全体に積土し、さらにその上部はおおむね水平方向にかなり細かい単位で積土し、この上面と腰石上面がほぼ等しくなる。最後に墳丘上部にやや細かい単位で積む。CベルトやI・IV区の土層では、黒褐色土の細かい単位の積土が特徴的で、意図的に使用したと考えられる。

墳丘遺物出土状況 (第21図・図版15～17)

I区墳丘内 墳丘上部で須恵器甕が2点出土した。それぞれは3mほど離れている。盛土内に埋納されたものか、墳丘上に露出したものかは不明である。1点(67)は1ヶ所にまとまっており、完



第17図 1号墳墳丘遺存状況図 (S=1/150)

形品に復元できる。甕内部から拳大・人頭大の礫が出土し、打ち欠きに使用した可能性がある。もう1点(66)は散在して小片の状態で出土し、68と同様に意図的に破砕したものと考えられる。

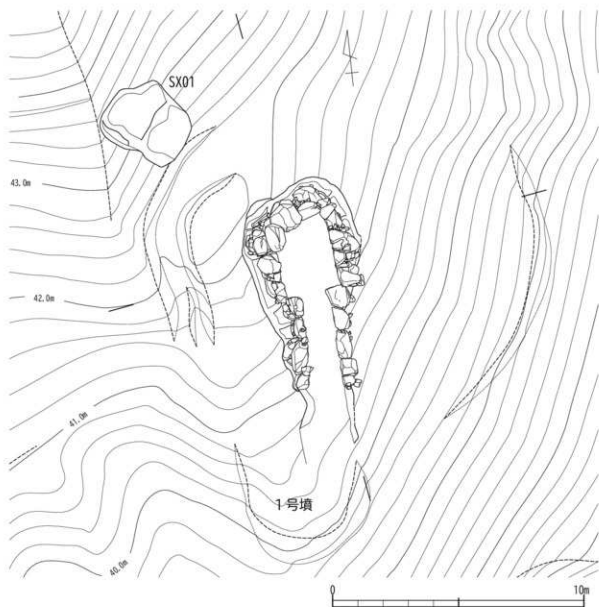
I区墳丘内出土遺物(第22図)

須恵器(66・67) いずれも甕である。66は体部下半から底部を欠く。体部外面は擬格子タタキ、体部内面は同心円文当て具痕で、頸部外面はカキメ、頸部内面はハケメ状の調整を施す。口縁端部外面は方形で、下端部が下方に突出する。67は完形品に復元できる。体部外面は擬格子タタキ、体部内面は同心円文当て具痕である。口縁部は三叉状を呈し、頸部上半に斜線文を施す。

I区墳裾 義道西側の墳裾で、完形品の須恵器小型甕1点(68)が正置した状態で出土した。現場の所見では墳丘内出土遺物として取り上げているが、位置関係から墳裾に置かれたものとする。

I区墳裾出土遺物(第22図・図版63)

須恵器(68) 小型の甕で、ほぼ完形品である。体部は肩が張り、口頸部はく字に屈曲し、口縁端



第18図 1号墳地山整形状況図 (S=1/150)

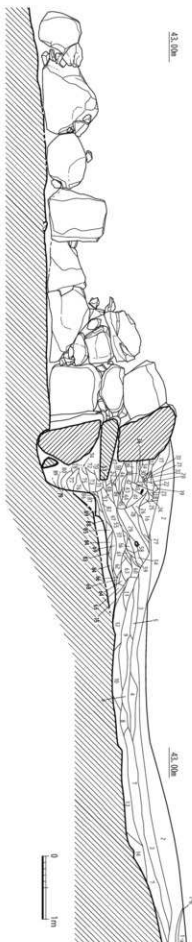
部は口唇状を呈する。体部外面は平行タタキ後カキメ、体部内面は当て具痕をナデ消す。口頸部は回転ナデである。体部外面にヘラ記号状の擦痕がある。口縁部が一部欠損し、破断面が摩擦することから、意図的な打ち欠きの可能性がある。

IV区墳丘内（第21図）

墳丘盛土最上部で、土師器甕が1点（70）出土した。一部は墳丘上面に露出していた可能性が高い。また、盛土下部で須恵器甕が1点（69）破片の状態で出土した。完全に盛土に被覆された状態であり、墳丘内に埋納した可能性がある。このほか、土製品・鉄製品などが出土したが、墳丘に伴うものかは不明である。

IV区墳丘出土遺物（第23図・図版63）

須恵器（69）甕の破片である。外面は擬格子タタキ後、一部ハケメ状の調整を施す。内面は目が

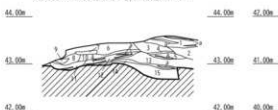


1. 明神土 (7.595.6)
 1. 明神土 (7.595.6)
 2. 明神土 (10.975.6)
 3. 明神土 (10.975.6)
 4. 明神土 (10.975.6)
 5. 明神土 (10.975.6)
 6. 明神土 (10.975.6)
 7. 明神土 (10.975.6)
 8. 明神土 (10.975.6)
 9. 明神土 (10.975.6)
 10. 明神土 (10.975.6)
 11. 明神土 (10.975.6)
 12. 明神土 (10.975.6)
 13. 明神土 (10.975.6)
 14. 明神土 (10.975.6)
 15. 明神土 (10.975.6)
 16. 明神土 (10.975.6)
 17. 明神土 (10.975.6)
 18. 明神土 (10.975.6)
 19. 明神土 (10.975.6)
 20. 明神土 (10.975.6)
 21. 明神土 (10.975.6)
 22. 明神土 (10.975.6)
 23. 明神土 (10.975.6)
 24. 明神土 (10.975.6)
 25. 明神土 (10.975.6)
 26. 明神土 (10.975.6)
 27. 明神土 (10.975.6)
 28. 明神土 (10.975.6)
 29. 明神土 (10.975.6)
 30. 明神土 (10.975.6)
 31. 明神土 (10.975.6)
 32. 明神土 (10.975.6)
 33. 明神土 (10.975.6)
 34. 明神土 (10.975.6)
 35. 明神土 (10.975.6)
 36. 明神土 (10.975.6)
 37. 明神土 (10.975.6)
 38. 明神土 (10.975.6)

40. 明神土 (10.975.6)
 41. 明神土 (10.975.6)
 42. 明神土 (10.975.6)
 43. 明神土 (10.975.6)
 44. 明神土 (10.975.6)
 45. 明神土 (10.975.6)
 46. 明神土 (10.975.6)
 47. 明神土 (10.975.6)
 48. 明神土 (10.975.6)
 49. 明神土 (10.975.6)
 50. 明神土 (10.975.6)
 51. 明神土 (10.975.6)
 52. 明神土 (10.975.6)
 53. 明神土 (10.975.6)
 54. 明神土 (10.975.6)
 55. 明神土 (10.975.6)
 56. 明神土 (10.975.6)
 57. 明神土 (10.975.6)
 58. 明神土 (10.975.6)
 59. 明神土 (10.975.6)
 60. 明神土 (10.975.6)
 61. 明神土 (10.975.6)
 62. 明神土 (10.975.6)
 63. 明神土 (10.975.6)
 64. 明神土 (10.975.6)
 65. 明神土 (10.975.6)
 66. 明神土 (10.975.6)
 67. 明神土 (10.975.6)
 68. 明神土 (10.975.6)
 69. 明神土 (10.975.6)
 70. 明神土 (10.975.6)
 71. 明神土 (10.975.6)
 72. 明神土 (10.975.6)
 73. 明神土 (10.975.6)
 74. 明神土 (10.975.6)
 75. 明神土 (10.975.6)
 76. 明神土 (10.975.6)
 77. 明神土 (10.975.6)

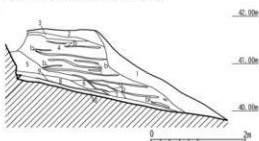
第20図 1号墳墳丘土層図② (S=1/60)

I 区墳丘土層断面図：前底部盛土 D-D'



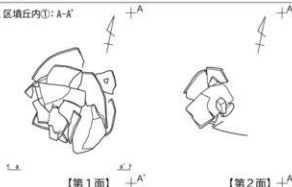
- 褐色土 (7.5184/6) 粘性なし しまりあり 2~3mmの細かい黄褐色土 (10786/3) しまりあり 粘性なし α 土を含む
- 黄褐色土 (10785/6) 粘性なし しまり弱い 炭化物を少し含む 1~5mmの砂粒を少し含む
- 細かい黄褐色土 (10785/4) 粘性ややあり しまりあり 1~5mmの砂粒を多く含む 褐色土 (7.5184/6) ブロックを少し含む
- 炭化物層 粘性あり しまりあり 細かい黄褐色土 (10785/4) 粘性あり しまりありが混ざる
- 褐色土 (7.5184/6) 粘性あり しまりあり 1~5mmの砂粒を含む α 土を含む
- 褐色土 (7.5184/6) 粘性弱い しまりあり 1~5mmの砂粒を多く含む α 土を1~5 cm程度のブロック状に含む
- 灰黄褐色土 (10784/2) 粘性なし しまりあり 炭化物を少量に含む
- 褐色土 (7.5184/6) 粘性弱い しまりあり 1~3mmの砂粒を少し含む
- 細かい黄褐色土 (10786/3) 粘性なし しまりあり 1~5mmの砂粒を少し含む
- 細かい黄褐色土 (10786/4) 粘性なし しまりあり 1~5mmの砂粒を含む
- 灰黄褐色土 (10785/2) 粘性ややあり しまりあり 炭化物を多く含む 褐色土 (7.5184/6) しまりありを挟む
- 褐色土 (7.5184/6) 粘性あり しまりあり 1~5mmの砂粒を含む α 土を挟む 層状 黄褐色土 (2~3mm) を含む
- 細かい黄褐色土 (10785/4) 粘性ややあり しまりあり 1~5mmの砂粒を多く含む 炭化物を少し含む
- 褐色土 (7.5184/6) 粘性あり しまりあり α 土を挟む
- 細かい黄褐色土 (10785/4) 粘性あり しまり強い 1~3mmの砂粒をわずかに含む (ペース土上?)

IV区墳丘土層断面図：前底部盛土 D-D'

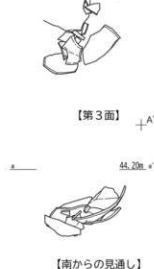
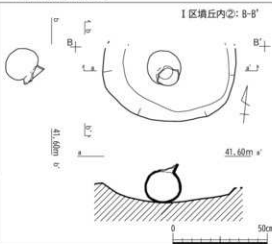


- 細かい黄褐色土 (10785/4) 粘性弱い しまりあり 2~5mmの砂粒を含む
- 層以下に比べしまり強い
- 細かい黄褐色土、細かい黄褐色土の互層 (7.5185/4, 10785/4) 粘性ややあり しまり強い 2~10mmの砂粒を多く含む
- 黄褐色土炭化物層 (10783/7) 厚さ2 cm程度の層状に含む
- 赤褐色砂質土 (5184/6) 粘性なし しまりあり 2~5mmの砂粒、白色砂粒を含む 炭化物層 (b) 互層 (10785/4, 5/6) 粘性あり しまり強い 2~5mmの砂粒、2~3 cmの礫を少し含む
- 互層：黄褐色土 (10783/7) しまり強い
- 細かい赤褐色砂質土、細かい黄褐色土互層 (5184/4, 4/6, 10785/4) 粘性黄褐色土より しまり強い 黄褐色土30% 2~5mmの砂粒を少し含む
- 黄褐色土 (10785/4) 粘性弱い しまりあり 炭化物を多く含む
- 細かい赤褐色砂質土 (5184/4) 粘性あり しまりあり 2~5mmの砂粒を多く含む
- 細かい赤褐色土 (5184/6) 粘性強い しまり強い
- 炭化物層 (10785/7) しまり強い
- 細かい黄褐色土 (10785/4) 粘性強い しまり強い 1~3mmの砂粒をわずかに含む

I 区墳丘内①: A-A'

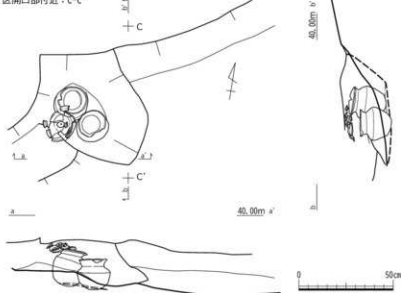


I 区墳丘内②: B-B'

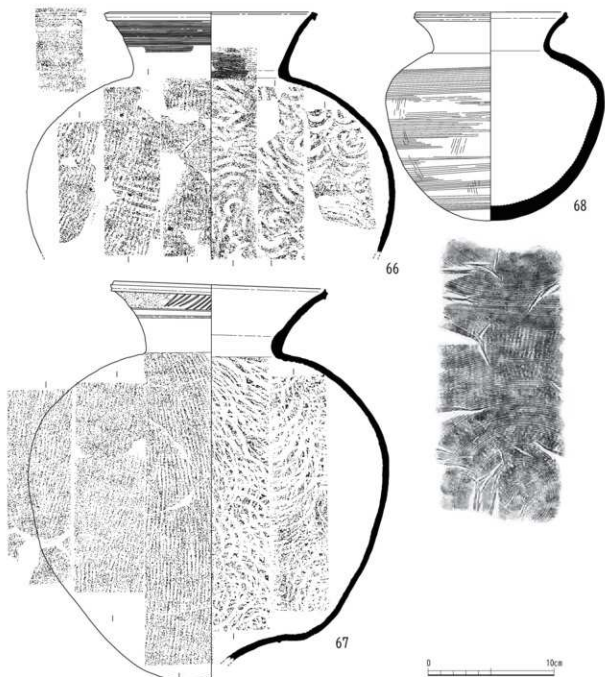


【南からの見通し】

I 区開口部付近: C-C'



第21図 1号墳 I・IV区墳丘土層図 (S=1/80)、墳丘遺物出土状況図 (S=1/20)



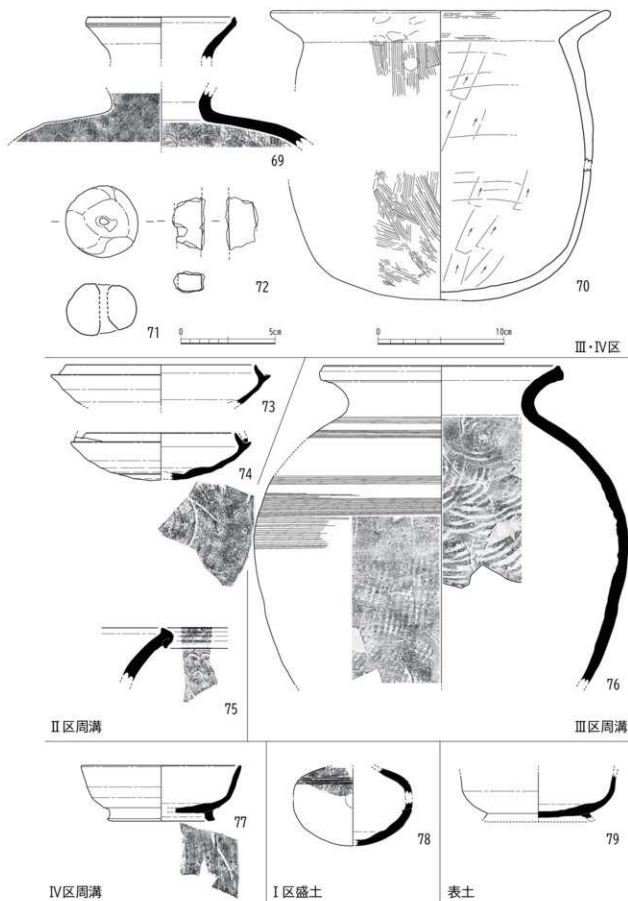
第22図 1号墳Ⅰ区墳丘内出土遺物実測図 (S=1/3)

細かい同心円文当て具痕で、一部放射状を呈する部分がある。

土師器(70) 甕である。底部はやや平底気味で、口縁部はく字に屈曲、付け根に明確な稜が生じる。体部外面はハケメ、体部内面はヘラケズリ、口縁部外面はナデ・ヨコナデ、口縁部内面はハケメである。残存部分で被熱の痕跡はない。

土製品(71) 扁球形を呈する酸化焰焼成の土玉で、直径3.7～3.8cm、厚さ2.7cmである。中央に穿孔があり、紡錘車の形態に近い。

鉄製品(72) 断面長方形を呈する鉄片である。刀子の茎であろうか。



第23図 1号墳Ⅲ・Ⅳ区墳丘盛土、周溝、その他の出土遺物実測図 (71・72は S=1/2、その他は S=1/3)

周溝出土遺物（第23図）

須恵器（73～76） 73・74は杯H身である。73は内外面回転ナデで、小片のため、反転復元は不安がある。74は底部回転ヘラケズリ、他は回転ナデである。口縁部に蓋の端部が融着し、底部外面にヘラ記号を有する。75は甕の口縁部片で、外面に櫛描波状文を施す。端部外面を肥厚し、端部内面は内側に突出する。76は甕である。体部外面は擬格子タタキ後カキメ、体部内面は同心円文当て具痕が残り、上半部は回転ナデによりナデ消す。口縁部は内外面回転ナデである。

墳丘周辺出土遺物（第23図）

須恵器（77～79） 77・79は杯Bである。77は高台端部がわずかに外側に突出する。底部外面は回転ヘラケズリ、底部内面は不定方向ナデ、他は回転ナデである。78は甕の体部片である。体部は扁球形で、肩部に2条の沈線、最大径の位置に櫛描波状文を施す。

iii) 主体部（第24・25図・図版18～22）

主軸をN-8°-Eにとる単室両袖型の横穴式石室である。ほぼ南に向かって開口する。主軸上の全長は残存部分で6.9mである。石室は基底部付近のみが残り、ほかは石材を失っている。石室内の遺物残存状況は不良だが、玄室で鉄器、開口部付近で土器類が出土した。

石室掘方 玄室部は幅4.5m、長さ5mほどの平面略方形の掘方で、開口部側は幅2m、長さは5mほどの羨道・墓道の掘り込みが連続する。奥壁側の最深部で1.0mである。

玄室 幅は中央部で2.46m（奥壁側：2.58m、玄門側：2.5m）、長さは主軸上で3.04m（東側壁長：3.28m、西側壁2.8m）、残存高2.0mである。平面は長方形で、主軸と奥壁が直交せずややいびつな形となる。奥壁基底部は方形気味の石材2石と縦長の石材1石を設置する。基底部は側壁との関係性から、東側壁を設置後に奥壁を設置し、最後に西側壁を設置したと考えられる。2段目は扁平縦長の小型石材の小口を石室側に向けるように積む。3段目はやや大型の不整形石材を積む。全体的に横目地の通りは不明瞭で、中央部に加重がかかるような積み方である。東側壁の基底部は、やや大型の石材を使用し、奥側に方形石材、玄門側に長方形石材2石を横方向に設置する。2・3段目は小型の長方形石材を横方向に積む。横目地は不明瞭で、玄門側では重箱積みが顕著である。西側壁の基底部も東側壁に類似し、やや大型の石材を使用し、奥側に方形石材、玄門側に長方形石材2石を横方向に設置する。奥壁側では重箱積みが顕著で、中央部の2・3段目は小型石材を基底部の隙間に落とし込むように積む。持ち送りは顕著ではないが、奥壁・西側壁はわずかに内傾する。玄門部は幅1.0～1.1mである。基底部のみの残存であるが、多段積みになるものと考えられ、東側は横方向、西側は縦方向に設置する。床面には長方形の扁平な石材を2石配置し、柵石とする。

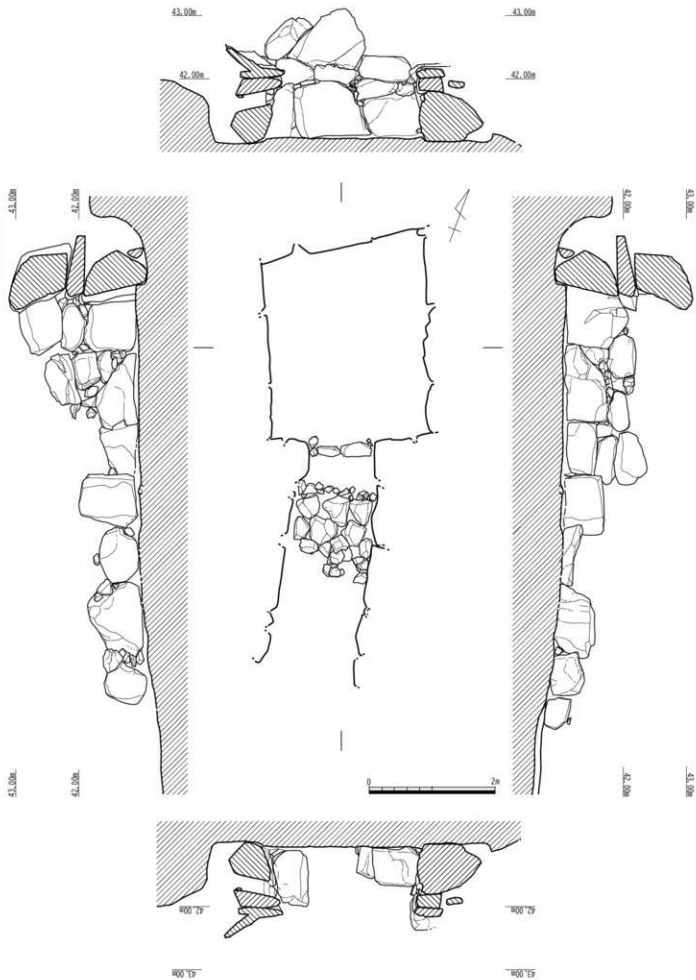
奥壁側の床面には、一辺0.2～0.3mほどの扁平な石材が置かれており、その周囲から複数の鉄釘が出たことから、棺台石の可能性がある。

玄室遺物出土状況 玄室南側では、床面に置かれた石材の周囲で6点の鉄釘が出土した。

玄室出土遺物（第26図・図版63）

須恵器（80） 杯G蓋もしくは杯B蓋である。天井部はヘラ切り後ナデ、他は回転ナデである。焼成は甘く、褐色を呈する。

鉄製品（81～86） いずれも鉄釘で、断面方形・長方形を呈する。83～86は一方の端部を折り曲げ



第24図 1号墳石室実測図 (S=1/60)

て頭部とする。81・83は長軸に平行、86は長軸に直交する木目が残る。

羨道 玄門楣石から南へ4.0mほどのびる。幅は玄門部1.0～1.1m、先端1.4mでわずかに開く。両側壁ともに基底部のみ遺存し、不整形石材を水平方向に設置する。

羨道遺物出土状況 羨道北端部～墓道にかけての床面付近で、須恵器を中心とした土器類が出土した。原位置は保っていないが完形品に近いものもあり、周囲から流れ込んだものではない。石室の年代観よりも時期的に新しく、初葬時以後に供献された土器群と考えられる。なお、この土器群と2号墳周囲に設置された大溝出土土器群は接合関係が認められる。大溝出土遺物の多くは、本来的には1号墳に伴うものが、流れ込んだものと考えられる。

羨道出土遺物（第26図・図版63）

須恵器（87・88） 87はほぼ完形品の短脚高杯で、床面直上で出土した。杯部は深く、体部から口縁部にかけて直立する。内外面ともに回転ナデで、脚部外面には複数の細かい条線があり、カキメの可能性ある。88は脚台付壺である。大きめの破片が床面直上で出土したほか、その他の破片が1号墳開口部から大溝中層で出土した。体部は球形で最大径が中位にあり、細く高い脚台がつく。

頸部は緩やかに外反しながら立ち上がり、頸部付け根が小さく隆起し、三角突帯状を呈する。口縁端部外面は肥厚のため、見かけ上は二重口縁のようにみえる。全体の器形は在地の須恵器ではなく、二重口縁風であることや頸部に突帯状の痕跡があることから、新羅土器の模倣品である可能性もあろう。体部外面の上位は強い回転ナデのため凹凸が顕著で、中位はカキメ、下位は回転ヘラケズリ、他は回転ナデである。体部外面下半と体部内面上半を除き降灰があり、蓋を伴わずに正置で焼成したことを示す。また、体部外面下半には別個体が付着した痕跡（直径7cm程度の円形）がある。脚裾部や体部には複数の剝離痕が認められ、意図的な打ち欠きの可能性がある。

土師器（89） 断面隅丸長方形を呈する棒状の土製品で、把手であろうか。把手であれば、小型の器種に伴うものであろう。

閉塞施設 羨道部では、現状で長さ3mの範囲に人頭大・拳大の石材が散布する。楣石から南へ0.5mほどの地点の床面上には、長さ1mの範囲で人頭大の石材を配置し、閉塞石の基底部となる。基底部以外は小型の石材を積み上げて閉塞部としたものと考えられる。

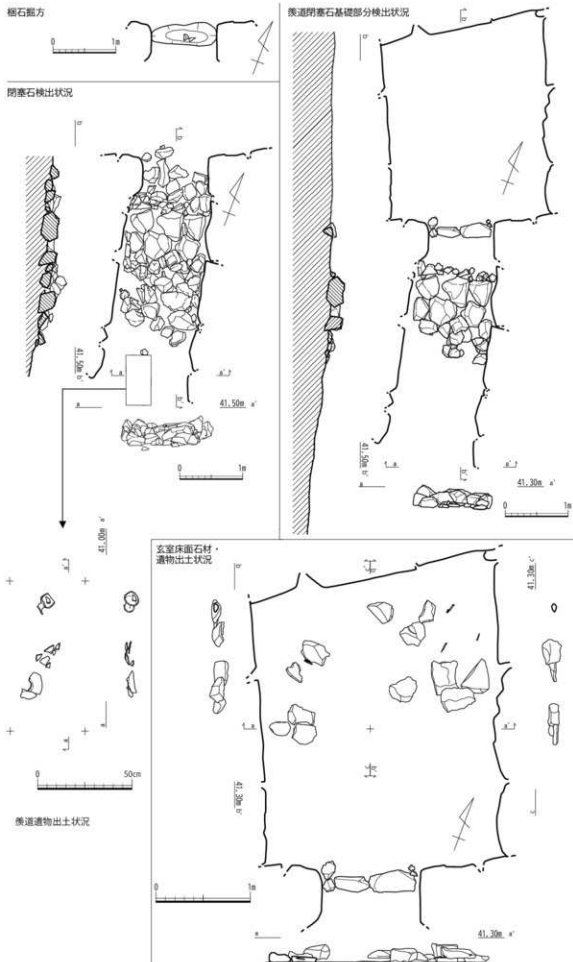
墓道・前底部 墓道の掘り込みは明確ではなく、羨道床面からほぼ水平に石室外へと連なる。横断土層でみると、断面逆台形の緩やかな掘り込みが確認できる。大きく上下2層に分層でき、下層はレンズ上堆積、上層は褐色土の単層である。追葬面は明らかではない。

墓道・前底部遺物出土状況（第21図・図版17）

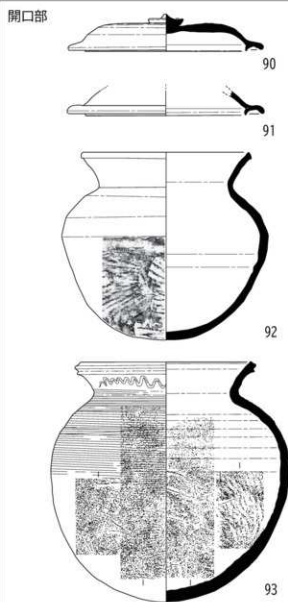
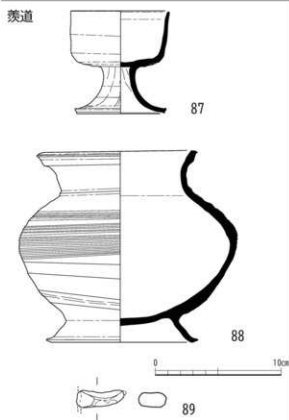
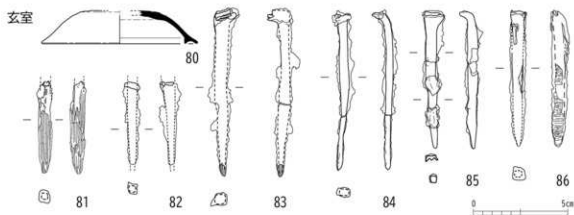
開口部の墳裾で、完形品の須恵器小型甕2点（92・93）と93からズレ落ちたような状態の須恵器蓋1点（90）が出土した。いずれも完形品で正置することから原位置を保っている。須恵器蓋は杯B蓋で、1号墳の築造時期とは時間差があることから、追葬などに伴う供献品と考えられる。なお、「大溝」の項でも触れるが、これら土器群と大溝出土の土器群の一部は接合関係にある。1号墳と大溝との位置関係からみても、大溝出土遺物の大半は1号墳墳裾から流入したと判断した。

墓道・前底部出土遺物（第26図・図版64）

須恵器（90～93） 90・91は杯B蓋である。90は天井部に擬宝珠形のツマミを有し、カエリ端部は



第25図 1号墳閉塞石検出状況図 (S=1/60)、遺物出土状況図 (散道部:S=1/20、玄室:S=1/40)



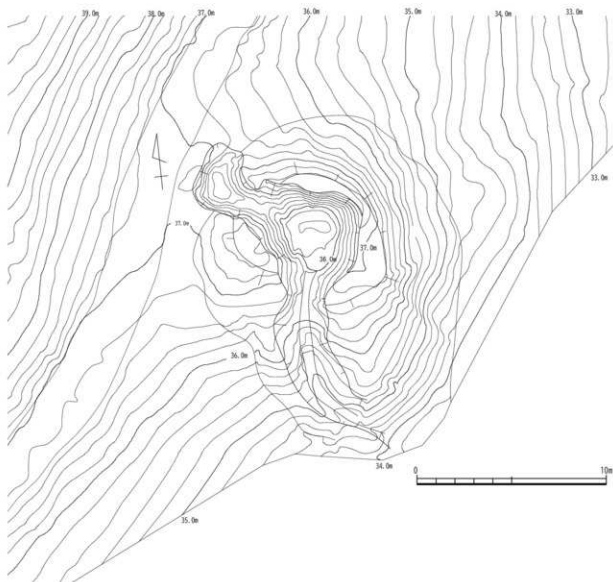
第26図 1号墳石室、開口部出土遺物実測図 (81~86はS=1/2、その他はS=1/3)

わずかに口縁端部より突出する。天井部外面は回転ヘラケズリ、天井部内面は不定方向ナデ、他は回転ナデである。91は内外面回転ナデで、カエリ端部が口縁端部より突出する。92・93は小型甕である。92は体部が球形で頸部はく字に屈曲する。体部外面下半は平行タタキ、体部内面下半は放射状の当て具痕が残り、ほかは回転ナデである。93は体部が倒卵形で頸部はく字に屈曲する。体部外面下半は平行タタキで、タタキ目の痕跡は92と似る。体部外面上半はカキメ、体部内面下半は同心円当て具痕が残る。頸部外面に部分的に波状沈線を施す。焼成はやや甘く褐色を呈する。

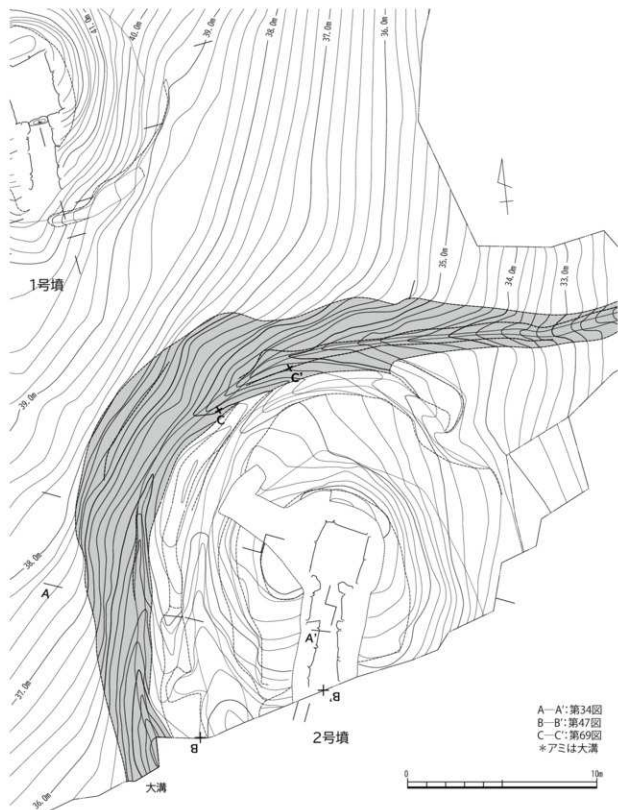
② 2号墳

i) 古墳の位置と現況 (第15・27・28図・図版23)

調査区中央南東部の丘陵南側斜面に立地する。標高34～37m付近にあたり、斜面北側上方に1号墳が位置する。調査前より墳丘の高まりが明瞭で、中央部に落ち込みがあったことから、横穴式石

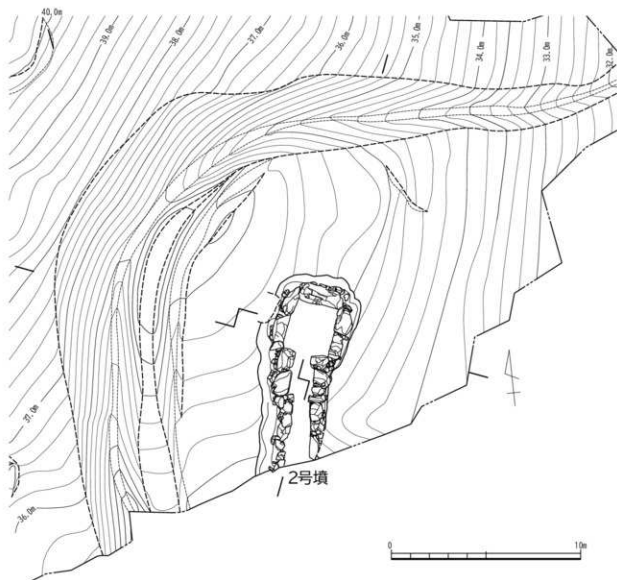


第27図 2号墳現況測量図 (S=1/200)



第28図 2号墳墳丘遺存状況図 (S=1/200)

室を主体部とする古墳であることが明確であった。墳丘の遺存状況は比較的良好であるが、石室は中世の改変や近現代のかく乱により遺存状況は悪い。



第29図 2号墳地山整形状況図 (5=1/200)

ii) 墳丘 (第28～34図・図版23・24)

周溝下端部で計測して東西14m、南端部が調査区外にあたるため明確ではないが、玄室中心からBトレンチの周溝下端部まで8.5m、14×17m前後の楕円形墳である。周溝は斜面上方のⅠ～Ⅲ区にかけて斜面を切断するように三日月状に巡る。現状の墳頂部は37.4mで、玄室床面との比高差は最大で3.4mである。

地山整形 丘陵斜面を造成して平坦面を造り墳丘基底面とする。旧表土は残っていない。中央部に石室掘方、Ⅰ～Ⅲ区にかけて浅く掘りくぼめ周溝外側の肩を形成する。周溝埋土は地山・墳丘由来の土がレンズ状に堆積し、腐食土層を形成しないことから比較的短期間のうちに土砂が流入したことを示す。

盛土 地山整形後、石室掘方の掘削及び埋め戻しを行い、石室構築と連動して墳丘盛土を行う。全体的に積土単位が厚いが、部分的に細かい単位の積土が認められる。盛土は標高36m付近で平坦面を形成し、奥壁基底石上端部のレベルとも合致することから、この付近を境に大きく2つの工程に

分かれることがわかる。

Aベルトでは石室掘方埋め戻し(65~72層)後、周溝側を粗い単位で積土(59~64層)し、さらに石室側はやや細かい単位で玄室側壁との間を充填する(49~58層)。これらの土層は比較的かたく締まる傾向があり、上面が平坦面を呈する。この上部の石室側は30~40cmほどの厚さで積み(48層)、周溝側はやや粗い単位で填形を整えるように積土する(34~46層)。さらに最上部の石室側は細かい単位で粗く積土し(8~33層)、周溝側をやや厚い単位で被覆する(1~7層)。Bベルト側では石室掘方埋め戻し(74~83層)後、厚い単位で広く積土する(54~58・60~73層)。これらの土層はかたく締まり、上面は平坦面を呈する。この上部の石室側は比較的細かい単位で丁寧に積土し(34~53層・59層)、さらに全体を被覆するように薄く広い範囲で積土する(14~33層)。Cベルトでは石室掘方埋め戻し(88~90層)後、地山整形面に薄く広く整地(82~87層)し、石室主軸から東へ4m付近を土手状の盛土(81層)を行い、その内外を充填するように厚く積土する(77~79層)。この上部は石室主軸から東へ3m付近と4m付近で土手状の盛土が顕著で、内側を充填するようにやや細かな単位で積土し、東側の土手状盛土から東側は非常に粗い単位で積土する。この上面は平坦面を形成し、玄室奥壁基底石の上端部とおおむね一致する。さらに、最上部は石室側を比較的細かい単位で積土し、これらを被覆するように全体を粗い単位で盛土する。

墳丘遺物出土状況

I区墳丘内 I区を中心に墳丘基底面・盛土中層・上層で須恵器・土師器、上層・中層で鉄鍬が出土したが、いずれも破片資料であり確実に墳丘に伴う可能性は低い。

I区墳丘内出土遺物(第35図・図版64)

94・95は盛土上層、96・97は盛土中層、98~100は墳丘基底部付近で出土した。

須恵器(94・98~100) 94は甕の口頸部片、口縁外部外面は肥厚し丸みを帯びる。内外面回転ナデで、頸部外面に平行タタキ痕が残る。99は甕の口縁部片である。内外面回転ナデで、内面に降灰がある。98は甕の口頸部から肩部の破片である。100は小型甕の体部片で、肩の張りが強く、底部は小さな平底状を呈する。体部外面下半は擬格子タタキ後ナデ、上半は回転ナデで、肩部を中心に複数の沈線が巡る。体部内面下半は同心円文当て具痕、上半は回転ナデで、頸部付け根のシボリ痕が残る。

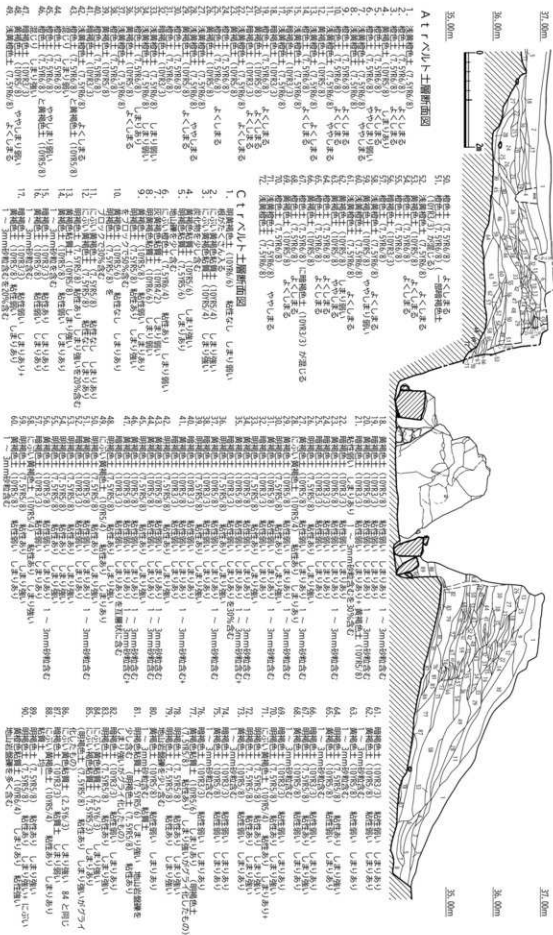
土師器(95) 甕の破片である。外面はハケ、内面はヘラケズリであろう。

鉄製品(96・97) いずれも鉄鍬である。96は平根方頭鍬、97は逆刺柳葉鍬である。

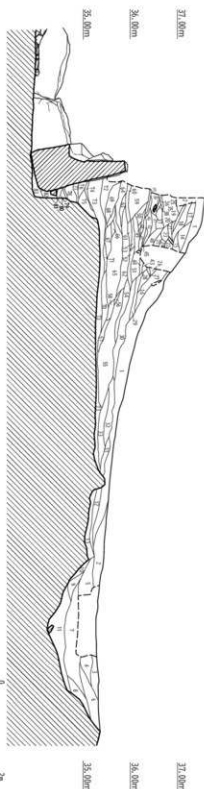
I区墳丘上面 I区墳丘・周溝および大溝を被覆する黒褐色・灰褐色の土層があり、この土層中から比較的多くの遺物が出土した。原位置を保つものはない。須恵器杯Hのほか須恵器杯Bも含む。一部は大溝の上面に堆積しており、古墳への営みが停止した後の再堆積土中の遺物である。

I区墳丘上面出土遺物(第36図)

須恵器(101~105) 101・102は杯H蓋、103・104は杯H身、105は杯G蓋である。101・102はいずれも天井部回転ヘラケズリ、他は回転ナデである。102は天井部外面にヘラ記号がある。101は104と胎土・焼成や全体の雰囲気か酷似する。103・104はいずれも底部外面回転ヘラケズリ、底部内面不定方向ナデ、他は回転ナデである。底部外面にヘラ記号がある。105はカエリが短く、口縁端部



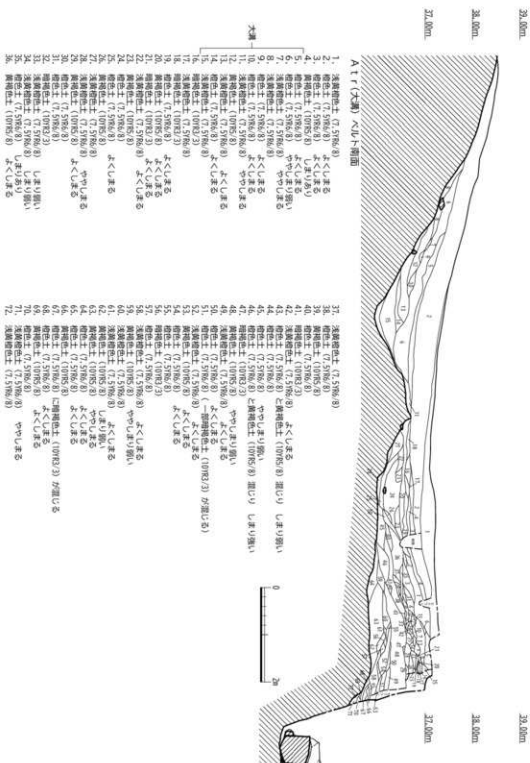
第31図 2号墳墳丘A・Cトレンチベルト南面土層断面図 (S=1/80)



B1 (大溝) ヘルム東面

- | | |
|---|---|
| <p>大溝</p> <p>1. にごい褐色土 (2.5Y6/4) しまりない 細砂が多い 黄土 湿土</p> <p>2. 黄褐色土 (10Y5/6) ややしまる 細砂が多い 湿土</p> <p>3. 黄褐色土 (10Y5/6) しまりない 細砂が多い 湿土</p> <p>4. 黄褐色土 (10Y5/6) しまりない 細砂が多い 湿土</p> <p>5. 黄褐色土 (7.5Y6/3) に褐色土 (7.5Y6/4) やや粘りあり 湿土</p> <p>6. にごい黄褐色土 (10Y5/4) 粘り強い 湿土</p> <p>7. 黄褐色土 (10Y5/6) しまりない 細砂が多い 湿土</p> <p>8. 黄褐色土 (10Y5/6) しまりない 細砂が多い 湿土</p> <p>9. 黄褐色土 (10Y5/6) しまりない 細砂が多い 湿土</p> <p>10. 黄褐色土 (7.5Y6/8) 粘り強い 湿土</p> <p>11. 黄褐色土 (7.5Y6/8) 粘り強い 湿土</p> <p>12. 黄褐色土 (7.5Y6/8) 粘り強い 湿土</p> <p>13. 黄褐色土 (7.5Y6/8) 粘り強い 湿土</p> <p>14. 黄褐色土 (10Y5/6) しまりない 細砂が多い 湿土</p> <p>15. 黄褐色土 (10Y5/6) しまりない 細砂が多い 湿土</p> <p>16. 黄褐色土 (10Y5/6) しまりない 細砂が多い 湿土</p> <p>17. 黄褐色土 (10Y5/6) しまりない 細砂が多い 湿土</p> <p>18. 黄褐色土 (10Y5/6) しまりない 細砂が多い 湿土</p> <p>19. 黄褐色土 (10Y5/6) しまりない 細砂が多い 湿土</p> <p>20. 黄褐色土 (10Y5/6) しまりない 細砂が多い 湿土</p> <p>21. 黄褐色土 (10Y5/6) しまりない 細砂が多い 湿土</p> <p>22. 黄褐色土 (2.5Y6/4) しまりない 細砂が多い 湿土</p> <p>23. 黄褐色土 (2.5Y6/4) しまりない 細砂が多い 湿土</p> <p>24. 黄褐色土 (2.5Y6/4) しまりない 細砂が多い 湿土</p> <p>25. にごい黄褐色土 (10Y5/4) しまりない 細砂が多い 湿土</p> <p>26. 黄褐色土 (10Y5/6) しまりない 細砂が多い 湿土</p> <p>27. 黄褐色土 (7.5Y6/8) しまりない 細砂が多い 湿土</p> <p>28. 黄褐色土 (7.5Y6/8) しまりない 細砂が多い 湿土</p> <p>29. 黄褐色土 (10Y5/6) しまりない 細砂が多い 湿土</p> <p>30. 黄褐色土 (7.5Y6/8) しまりない 細砂が多い 湿土</p> <p>31. 黄褐色土 (7.5Y6/8) しまりない 細砂が多い 湿土</p> | <p>32. 褐色土 (10Y5/4) しまりない 細砂が多い 湿土</p> <p>33. 黄褐色土 (10Y5/6) しまりない 細砂が多い 湿土</p> <p>34. 黄褐色土 (10Y5/6) しまりない 細砂が多い 湿土</p> <p>35. 黄褐色土 (10Y5/6) しまりない 細砂が多い 湿土</p> <p>36. 黄褐色土 (10Y5/6) しまりない 細砂が多い 湿土</p> <p>37. 黄褐色土 (10Y5/6) しまりない 細砂が多い 湿土</p> <p>38. 黄褐色土 (10Y5/6) しまりない 細砂が多い 湿土</p> <p>39. 黄褐色土 (10Y5/6) しまりない 細砂が多い 湿土</p> <p>40. 黄褐色土 (10Y5/6) しまりない 細砂が多い 湿土</p> <p>41. 黄褐色土 (10Y5/6) しまりない 細砂が多い 湿土</p> <p>42. 黄褐色土 (2.5Y6/4) しまりない 細砂が多い 湿土</p> <p>43. 黄褐色土 (2.5Y6/4) しまりない 細砂が多い 湿土</p> <p>44. 黄褐色土 (10Y5/6) しまりない 細砂が多い 湿土</p> <p>45. 黄褐色土 (7.5Y6/8) しまりない 細砂が多い 湿土</p> <p>46. 黄褐色土 (10Y5/6) しまりない 細砂が多い 湿土</p> <p>47. 黄褐色土 (10Y5/6) しまりない 細砂が多い 湿土</p> <p>48. 黄褐色土 (10Y5/6) しまりない 細砂が多い 湿土</p> <p>49. 黄褐色土 (10Y5/6) しまりない 細砂が多い 湿土</p> <p>50. 黄褐色土 (10Y5/6) しまりない 細砂が多い 湿土</p> <p>51. 黄褐色土 (10Y5/6) しまりない 細砂が多い 湿土</p> <p>52. 黄褐色土 (10Y5/6) しまりない 細砂が多い 湿土</p> <p>53. 黄褐色土 (10Y5/6) しまりない 細砂が多い 湿土</p> <p>54. 黄褐色土 (10Y5/6) しまりない 細砂が多い 湿土</p> <p>55. 黄褐色土 (10Y5/6) しまりない 細砂が多い 湿土</p> <p>56. 黄褐色土 (10Y5/6) しまりない 細砂が多い 湿土</p> <p>57. 黄褐色土 (10Y5/6) しまりない 細砂が多い 湿土</p> <p>58. 黄褐色土 (10Y5/6) しまりない 細砂が多い 湿土</p> <p>59. 黄褐色土 (10Y5/6) しまりない 細砂が多い 湿土</p> <p>60. 黄褐色土 (10Y5/6) しまりない 細砂が多い 湿土</p> <p>61. 黄褐色土 (10Y5/6) しまりない 細砂が多い 湿土</p> <p>62. 黄褐色土 (10Y5/6) しまりない 細砂が多い 湿土</p> |
|---|---|

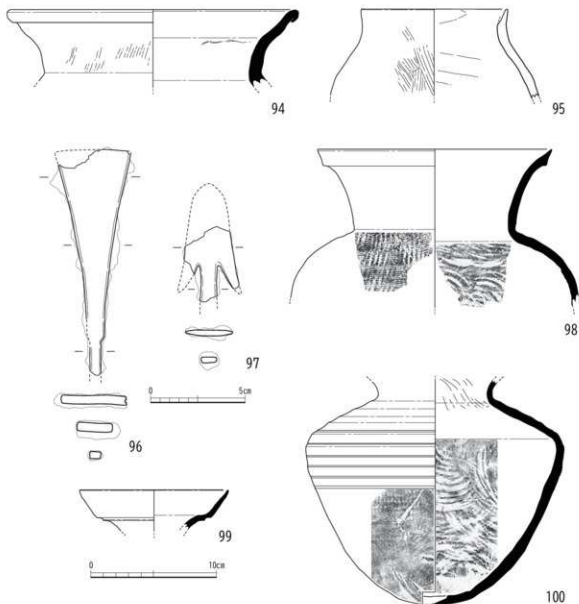
第32図 2号墳Bトレンチ (大溝) ヘルム東面土層断面図 (S=1/80)



第33図 2号墳Aトレンチ(大溝)ベルト南面土層断面図(S=1/80)



第2次調査



第35図 2号墳墳丘出土遺物実測図1 (96・97はS=1/2、その他はS=1/3)

から突出しない。天井部外面回転ヘラケズリ、他は回転ナデで、外面にヘラ記号がある。

I区開口部付近 開口部付近の墳丘で少量の須恵器が出土した。どの層位に伴うか不明であるが、いずれも細片であり、原位置を保つものではない。

I区開口部付近出土遺物(第36図)

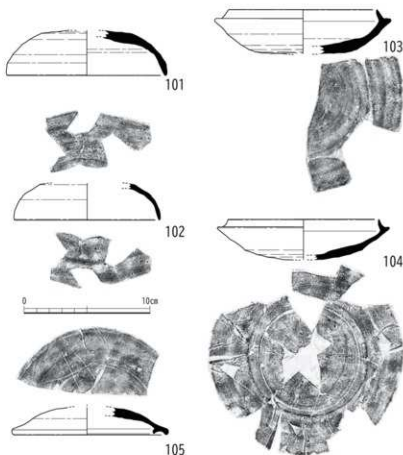
須恵器(106~108) 106は杯H身の細片で、内外面回転ナデである。107は無台杯であろう。非常に薄い。内外面回転ナデで、底部外面にヘラ記号がある。108は平瓶の頸部片である。内外面回転ナデで、外面全体に降灰がある。

I区周溝 埋土下層で須恵器の脚部片が出土した。原位置を保つものではない。

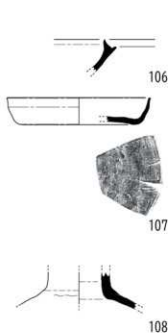
I区周溝出土遺物(第36図)

須恵器(109) 高杯の脚部片である。内外面回転ナデで、シボリ痕が明瞭に残る。

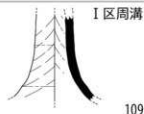
I 区墳丘上面



I 区開口部付近



I 区周溝



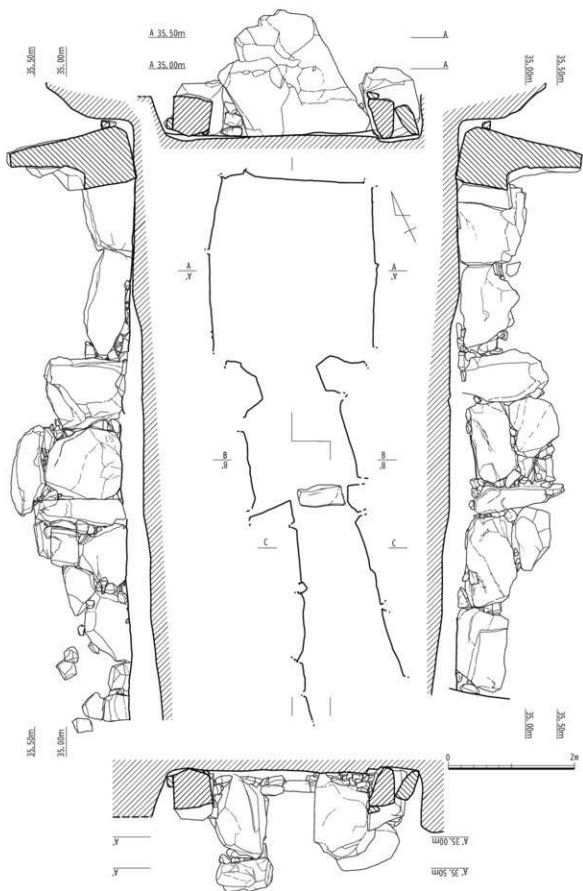
第36図 2号墳墳丘出土遺物実測図2 (S=1/3)

iii) 主体部 (第37~39・41・46・47図・図版25~39)

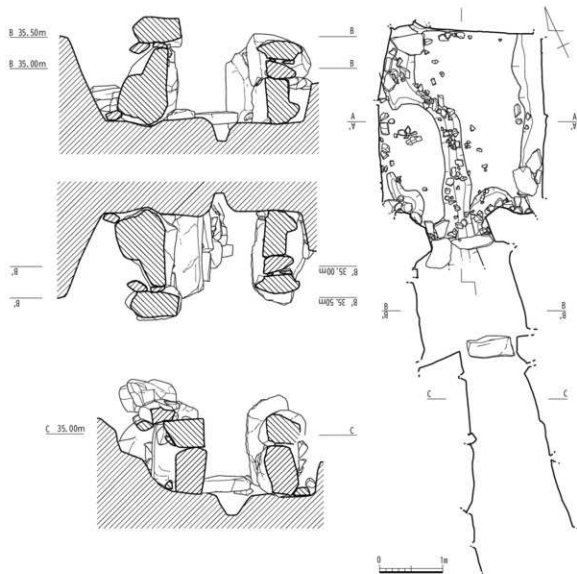
主体部は複室両袖型の横穴式石室である。玄室主軸は $N-25^{\circ}-E$ をとるが、石室は玄門部で東に振れ、前室から羨道にかけての主軸は $N-13^{\circ}-E$ となり、開口方向はほぼ南側を向く。石室の遺存状況は悪く、天井石は完全に失われる。壁体は玄室で基底石のみ、前室から羨道部にかけては基底石と一部2段目まで残っている。石室内には土砂が流入し、調査前は窪地の状態であった。石室全長は現状で8.52mである。また墓道は調査区外にのびるため未調査である。玄室内流入土（赤褐色土）で近代以降の鉄器が出土しており、防空壕などとして利用された可能性がある。

石室掘方 石室壁体の基底石上面がおさまるほどの深さ（0.6~1.4m）で掘り込まれており、旧地形との関係で東側が深く、西側が浅い。石室石材と掘方壁面との隙間は非常に狭い。掘方の立ち上がりは、両側壁側は急傾斜で玄室右側壁側は直立するが、奥壁側は上方が緩傾斜で中ほどから直立気味になる。掘方内には裏込土とともに石が埋め込まれており、床面には基底石を据えるための根石が詰まる。

玄室 平面はやや胴が張る長方形を呈する。奥幅2.38m、前幅2.5m、玄室中心幅2.64m、右側壁長2.8m、左側壁長2.9mである。奥壁は略三角形の大きな石（幅約1.9×高さ2.0m）を、立てて基底石とし、西側下部の隙間には小振りの石を充填する。奥壁の上半部は石材表面の風化が進行して



第37図 2号墳石室実測図 (S=1/60)

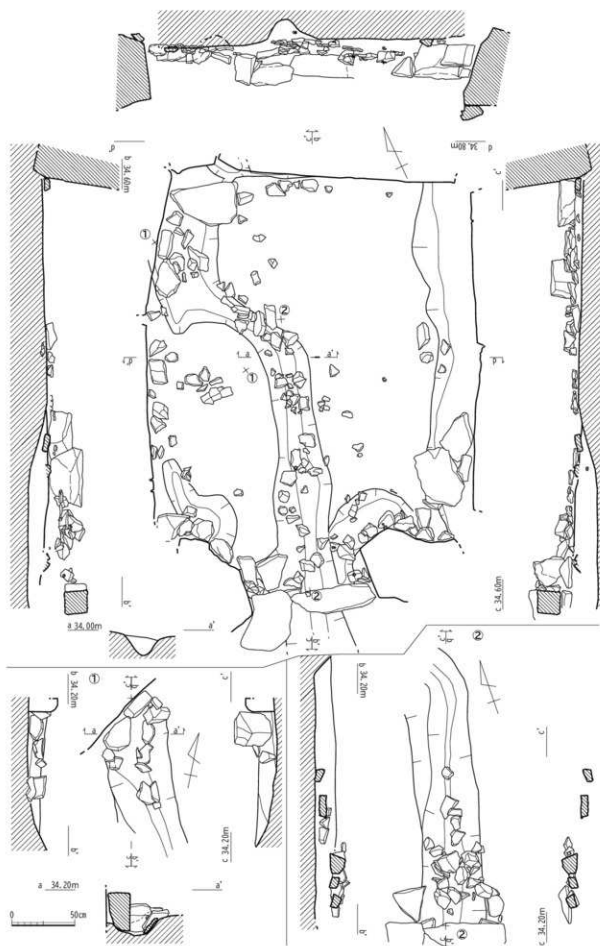


第38図 2号墳石室見通し断面図 (S=1/60)

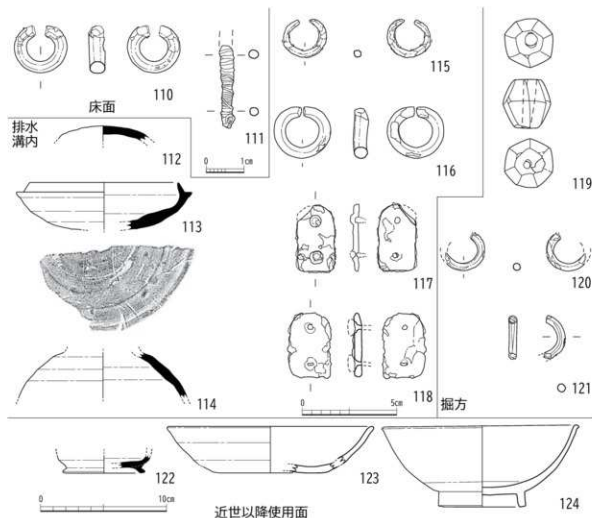
おらず、矢跡が残ることから、後世の石切により破壊されたと考えられる。右側壁は奥壁側から順に幅1.2m×高さ1.0m、幅1.3m×高さ1.0mほどの長方形の石を2石横位に配し基底石とし、玄門袖石との間には小振りの石を上方から落とし込むように充填する。左側壁は奥壁から順に幅1.2m×高さ0.8m、幅1.7m×高さ0.7mほどの長方形の石を2石横位に配し基底石とし、玄門袖石との間には小振りの石を充填する。両側壁とも基底石はわずかに内傾する。また両側壁は奥壁を挟み込むように配される。

玄門部は両袖で、略長方形の石材を立て袖部とする。両袖石ともに高さ1.3mほどで、上端はほぼ高さが揃う。袖石は両側壁と接しておらず、隙間には小振りの石を充填する。また玄門シキミ石に接する袖石の面は玄室主軸と平行にならず、前室・羨道の主軸と平行する。

玄室遺物出土状況 玄室内には土砂が流入しており、上層から赤褐色土・黒褐色土・黄褐色土が堆積する。腐植土層の黒褐色土上面では中世の陶磁器が出土しており、この段階にはすでに天井を消



第39図 2号墳石室内遺物出土状況実測図 (S=1/30)



第40図 2号墳玄室出土遺物実測図

(111・119はS=1/1、110・115～118・120・121はS=1/2、その他はS=1/3)

失っていた可能性が高く、羨道部では黒褐色土の最下面から中世陶磁器が出土していることから、石室内は中世以前に攪乱されたと考える。また最上層の赤褐色土からは近現代の遺物が出土した。

古墳に伴う遺物は耳環・馬具（飾金具）・水晶製切子玉・棒状金属製品？・土師器・須恵器の小片が出土した。床面付近からの出土であるが、いずれも原位置を留めていないと考える。このうち112～118は排水溝埋土中、119・120は東袖石の根石直上、121は北東隅の掘方内で出土した。

玄室床面出土遺物（第40図・図版64）

銅製品（110） 耳環である。銅芯で表層の金がよく残る。開口部が広い。

不明金属製品（111） 素材不明の棒状金属に糸を巻き付けている。青みを帯びており、金属は銅であろうか？

玄室排水溝内出土遺物（第40図・図版64）

須恵器（112～114） 112は明褐色を呈し、土師器の可能性もあるが、調整技法から須恵器とした。

杯Hもしくは杯Gであろうか。外面はヘラ切り、内面は回転ナデである。113は杯H身で、底部外面回転ヘラケズリ、底部内面不定方向ナデ、他は回転ナデである。114は壺であろうか。上半部は

回転ヘラケズリ、他は回転ナデである。天地逆の可能性もある。

銅製品(115・116) 耳環である。115は銅芯で表面が剥落するため表層の素材は不明である。116も銅芯で表面は鈍い銀色の光沢があるが、一部金色を呈する部分がある。

鉄製品(117・118) 117、118は帯飾金具で、鉄製の本体に鉄地銀張円頭鉤を使う。

玄室掘方出土遺物(第40図・図版64・67)

石製品(119) 水晶製切子玉である。無色透明で、鉄針による片面穿孔である。断面七角形を呈する。全長13mm、最大径13mmである。法量・穿孔方法から、山陰系玉類に該当すると考えられる(大賀2009)。

銅製品(120・121) 耳環である。いずれも銅芯で、表面は鈍い銀色の光沢があり銀の可能性はある。

玄室近世以降使用面出土遺物(第40図)

須恵器(122) 杯B身で、高台端部は外側に張り出す。

土師器(123) 丸底杯である。底部はヘラ切り、他は回転ナデである。

陶磁器(124) 白磁碗V-3a類である。

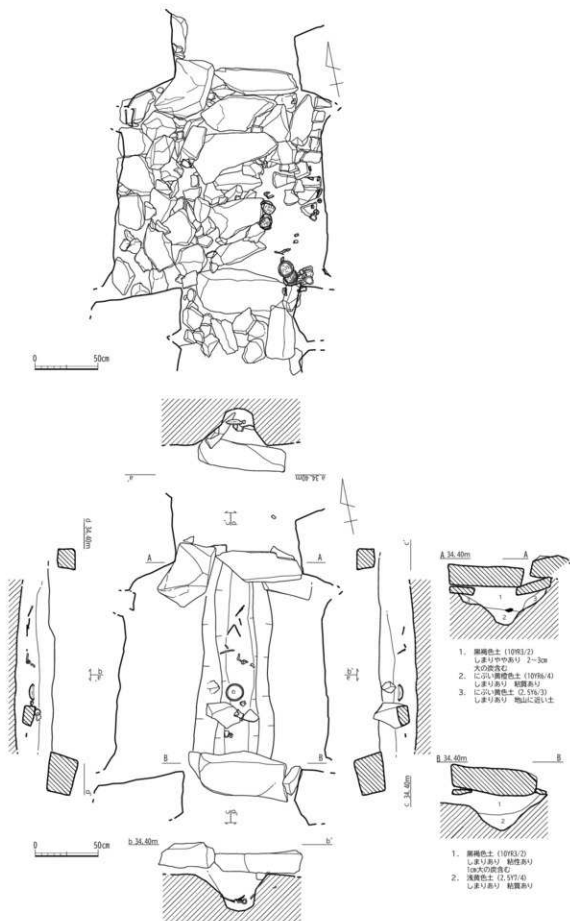
前室 玄門側幅1.56m、前門側幅1.66m、右側壁長1.44m、左側壁長1.54mで、ほぼ方形プランであるが、わずかに開口部側が開く。右側壁は高さ0.7mほどの長方形の石を横位に配し基底石とする。2段目の石は、玄門部側でやや大きな石(幅1.0m、高さ0.7m)を袖石に持たせかけるように積み、前門袖石との間には人頭大の石を落とし込む。左側壁は高さ1.2mほどの略台形の石をやや縦気味に用い基底石とし、玄門袖石との隙間に小振りの石を充填する。2段目は幅1.3m、高さ0.5mほどの長方形の石を横位に積む。右側壁はほぼ垂直気味に立ち上がるが、左側壁は2段目で急激に持ち送っている。また、基底石上端の高さは揃わないが、2段目の上端はほぼ高さを揃え、このレベルは玄室奥壁基底石の上面に一致する。前門部は板状の石材を縦位に配し、明確な袖を形成する。前室側壁より主軸側に、右袖部は0.1m、左袖部は0.5mほど迫り出す。

前室遺物出土状況 前室床面と排水溝内でまとまって遺物が出土した。

床面上の遺物の多くは前門東袖部付近の敷石が設置されていない部分で検出し、須恵器杯身3個体、杯蓋3個体、鉄刀子、馬具(轡、鞍金具、鎧金具、鉸具)がある。敷石上ないし床面直上からの出土である。須恵器は2群(前門袖石付近、主軸付近)あり、全て内面を上に向け入子の状態で出土した。主軸付近の須恵器のうち1個体は敷石上、2個体は排水溝蓋石の下に潜り込んだ状態であった。ほとんどが完形品や完形に近い状態であるが破片のものもある。馬具は東側壁に沿うように出土した。前門側のものは床面直上、玄門側のものは敷石上から出土した。この他、玄門西袖石付近では敷石下から鉄鏝・馬具が出土している。排水溝内の遺物は須恵器杯身1、須恵器長頸壺1、須恵器大甕破片、鉄鏝6、馬具、黒曜石の石核1がある。いずれも前室排水溝2層の上面から出土した。須恵器や鉄鏝は前室床面出土のものと型式差はなく、また馬具の鞍金具は接合資料があるため、同時に置かれたものといえる。したがって前室床面・排水溝内出土遺物は排水溝を掘削後、蓋石を設置するまでの時間内に置かれたものと考えられる。

前室床面出土遺物(第42～44図・図版64～66)

須恵器(125～131) 125～128は杯H蓋で、完形品もしくは完形品に近い。128は床面の破片資料と



第41図 2号墳前室遺物出土状況・土層図 (S=1/30)

暗渠内埋土の破片資料の接合資料で、他は床面出土である。いずれも天井部外面回転ヘラケズリ、他は回転ナデで、125～127は天井部内面不定方向ナデである。127はヘラ記号を記す前の粗い擦痕があり、これに切られるヘラ記号状の痕跡があることから、ヘラ記号を書き直した際の痕跡の可能性はある。いずれも天井部外面に同様のヘラ記号があり、125～127は法量・胎土・焼成・色調・調整が非常に似る。129～131は杯H身である。131は床面の破片資料と暗渠内埋土の破片資料の接合資料で、他は床面出土である。いずれも底部外面回転ヘラケズリ、底部内面不定方向ナデで、他は回転ナデである。129は127と同様に、ヘラ記号を記す前の粗い擦痕があり、これに切られるヘラ記号状の痕跡がある。130はヘラ記号を記す前にひび割れが生じたようで、内外面から粘土を充填し補修する。いずれも底部外面に同様のヘラ記号があり、129・130は法量・胎土・焼成・色調・調整が非常に似る。

鉄製品 (132～166) 132は鉸具造立間環状鏡板轡である。鏡板・引手は銜を介在する。鏡板（左）は残存長6.1cm、最大幅5.5cm、立間鉸具残存幅2.6cm、立間残存長1.5cm、鏡板（右）は残存長5.6cm、最大幅6.0cm、立間鉸具残存幅1.8cm、立間残存長0.6cmを測る。立間はいずれも欠損するが、鏡板（左）には刺金の一部が残る。銜は二連で、銜（左）長8.4cm、銜（右）長7.8cmを測る。引手是一条線、端部はく字で、引手（左）長14.1cm、引手（右）長15.0cmである。引手（右）には帯金具の鉾が錆着する。鉸具（145～147）が轡の上に重なって出土した。

133～139は鞍金具である。133～135は前輪の鞍鉸具で、後述する138より鉸具のサイズが小さいため前輪に伴うと判断した。133は長さ5.8cm、基部幅1.7cmを測る。鉸具の半分と座金具を欠く。134も同程度のサイズなので前輪の鞍鉸具の基部であろう。基部幅1.6cmを測る。135は曲線具合をふまえば、前輪鞍鉸具の輪金部になりうるが、133よりも細身で確証を欠く。138は後輪の鞍鉸具で、鉸具・座金具ともに鉄製である。鉸具は全長6.2cm、輪金部最大幅4.7cm、基部幅2.2cmを測る。座金具は円形鉢部に菱形脚部がつくものである。脚の一部が残存する箇所があるが、ほぼすべてを欠く。136・137が菱形脚部片で、いずれも鉄製である。菱部は全長1.2～1.4cm、最大幅1.4～1.5cmを測る。139は座金具付環状製品である。座金具・環状部ともに鉄製で、環状部は全長1.3cm、最大幅1.9cmを測る。

140～144は鍔金具である。140・142・143は幅狭、141・144は幅広で、2種類ある。いずれも本体、鉾ともに鉄製である。140は吊部付近、142・143は端部付近である。140と142の金具内面には木質痕跡が残る。

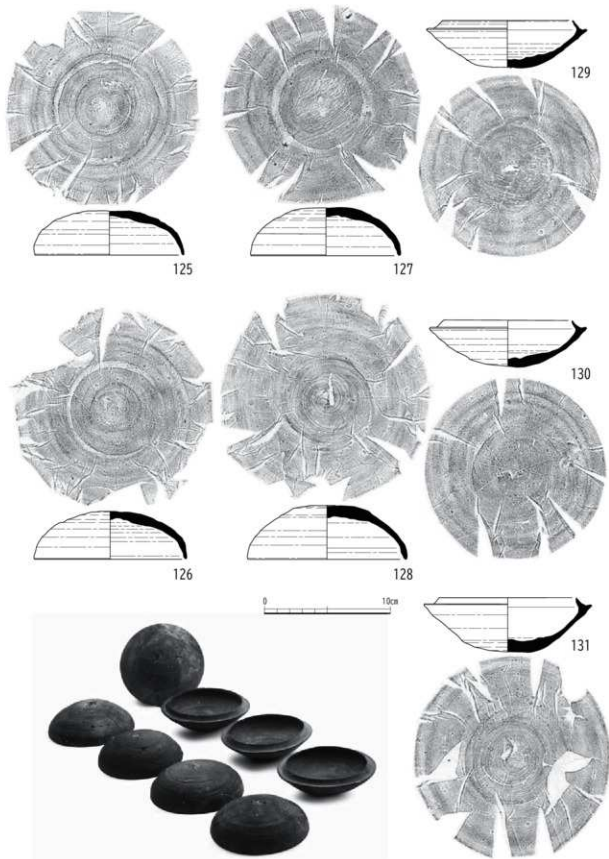
145～153は鉄製鉸具である。145～147は蕨手状刺金をもつ。148は台形状で一部を欠く。

154～165は帯飾金具である。いずれも本体は鉄製で、径5～6mmの鉄地銀張円頭鉾を打つ。

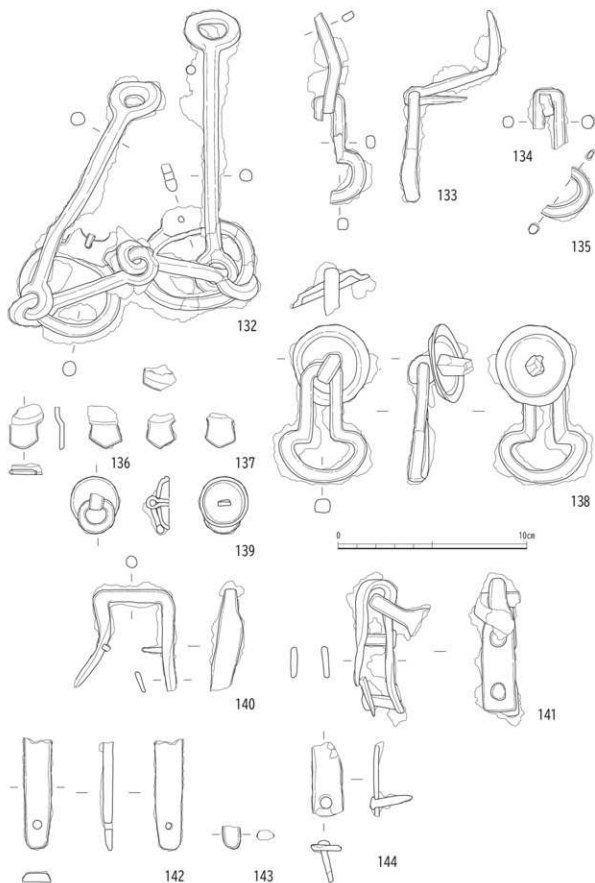
166は不明鉄製品で、幅1.1cm、長さ1.4cm、残存高1.1cmを測る。

前室排水溝内出土遺物（第45図・図版67）

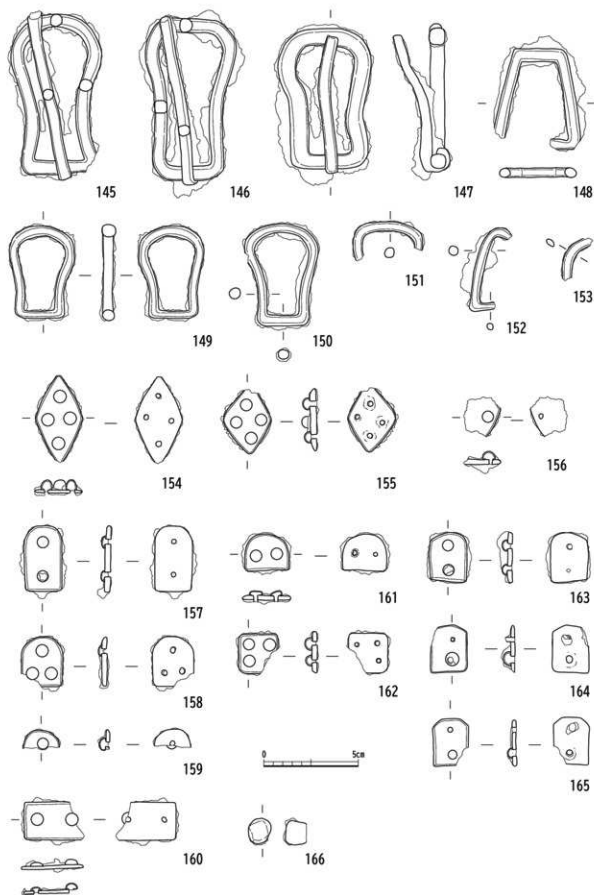
須恵器 (167～171) 167は杯H蓋である。内外面回転ナデで外面にヘラ記号がある。胎土・焼成・色調は125～127に近い。168・169は杯H身である。底部外面回転ヘラケズリ、底部内面不定方向ナデ、他は回転ナデである。底部外面に125～131と同じヘラ記号がある。170は甕の頸部片である。外面は沈線で区画し、ヘラ状工具による斜線文を施す。171は長頸壺の頸部から体部上半（前室排



第42図 2号墳前室出土遺物実測図1 (S=1/3)



第43図 2号墳前室出土遺物実測図2 (S=1/2)



第44図 2号墳前室出土遺物実測図3 (S=1/2)

水溝出土)と底部(羨道入口部埋土出土)の破片である。直接接合しないが、諸特徴から同一個体と考える。頸部はわずかに開きながら立ち上がり、上部にカキメ状の沈線が巡ることから口縁部に近い可能性がある。頸部上端の破断面は摩滅が顕著で、意図的な打ち欠きの可能性がある。体部は中位の張りが強く、凹線状の沈線が2条巡る。扁球形の形態になろうか。底部に八字に開く脚台状の高台がつく。体部下半は回転ヘラケズリ、底部内面は不定方向ナデ、他は回転ナデである。

鉄製品(172~185) 172は鞍金具である。後輪の鞍鉸具で座金具・鉸具ともに鉄製である。鉸具は全長6.2cm、輪金部最大幅4.4cm、基部幅2.5cmを測る。座金具は円形鉢部のみ残る。鉸具基部は別造の鉄棒を横に通すタイプで、前室出土の鞍鉸具と基部の接続方法が異なる。

173~175は帯飾金具で、鉄製の本体に鉄地銀張円頭鉸を打つ。

176は鍔吊金具で、残存長4.9cm、幅1.7cmを測る。端部付近に径0.8cmの鉄製鉸を打つ。

177~185はいずれも長頸鐵である。鐵身部は平造で扁平、莖部は断面方形である。

石製品(186) 黒曜石の石核である。暗渠内からの出土で、意図的に持ち込んだ可能性もあり、図示した。

前室埋土出土遺物(第45図)

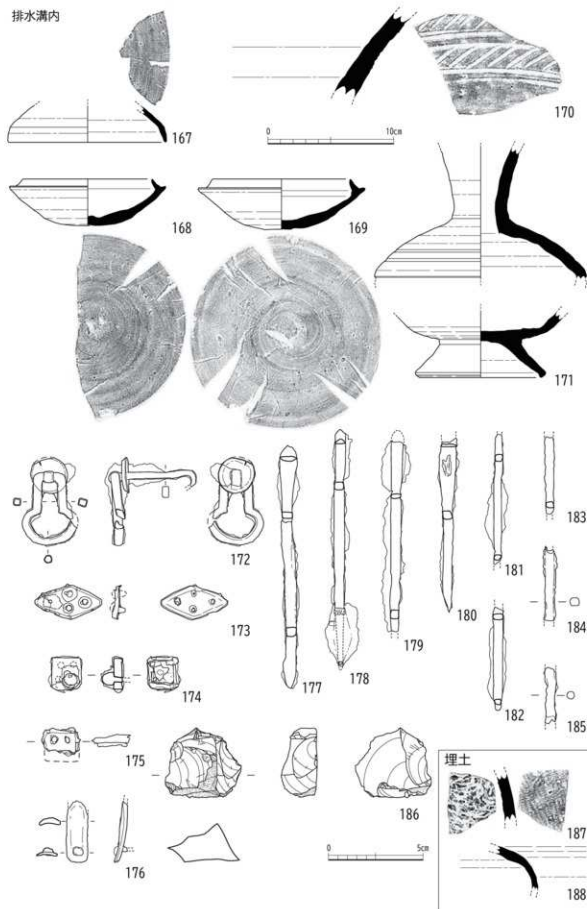
須恵器(187・188) 187は甕の体部片で、外面擬格子タタキ、内面同心円文当て具痕である。188は細片のため傾きに不明があるが、杯蓋であろうか。外面回転ヘラケズリである。

羨道 開口部側が調査区外であるため現状の数値であるが、前門側幅0.94m、開口部側幅1.58m以上、右側壁長2.65m、左側壁長3.1mで、開口部に向かって八字型に開く。またピンボールで確認したところ両側壁の石積みは現状より1石以上南側へ続く。右側壁は前室側から順に幅1.4m×高さ0.8m、幅1.2m×0.8mの長方形の石を配し基底石とし、前門袖石と基底石の隙間には小振りの石を充填する。前門袖石側の基底石の上には、基底石より一回り小さな石をほぼ垂直に横む。左側壁は幅1.0m×高さ0.7mほどの不整形の2石を配し基底石とし、この2石より南側は幅0.4m×高さ0.4mほどの方形の石を2石据える。前室袖石側の基底石の上には、基底石より一回り小さな石をほぼ垂直に横む。前室側の基底石と前室から2番目の基底石の間には略三角形の石材を落とし込むように積み、前門袖石と基底石の隙間には小振りの石を充填する。開口部側の2石は基底石としては小振りであり、縦横に目地が通ることから他の部位の石積みとは異なる点で違和感がある。前庭石積みの可能性もあるが、後述する開口部付近調査区壁面の土層観察の結果、追葬時の掘りこみ・積みなおしの可能性も考えられる。

羨道部遺物出土状況

羨道部は土砂が流入し、上から黄褐色土・黒褐色土・黄褐色土が堆積しており、黒褐色土中にはにぶい黄褐色土が薄く入り込んでいた。開口部付近の調査区壁面土層(以下、壁面土層第47図)8層中に貫入する9層上面で、須恵器蓋1・杯身1、土師器杯1がまとまって出土した。須恵器蓋杯・土師器杯はほぼ完形品であり、出土状況からみても流れ込んだものではなく、人為的に置いたものとする。遺物が出土した壁面土層9および10層は羨道側壁によって分断されているが、土の色調や土質は類似しており、また堆積状況からみても同一層と考えてよい。また9・10層は羨道側壁に切り込んでいることや、開口部側の羨道左側壁は石の大きさや石積の状況から、後世に掘り込

排水溝内



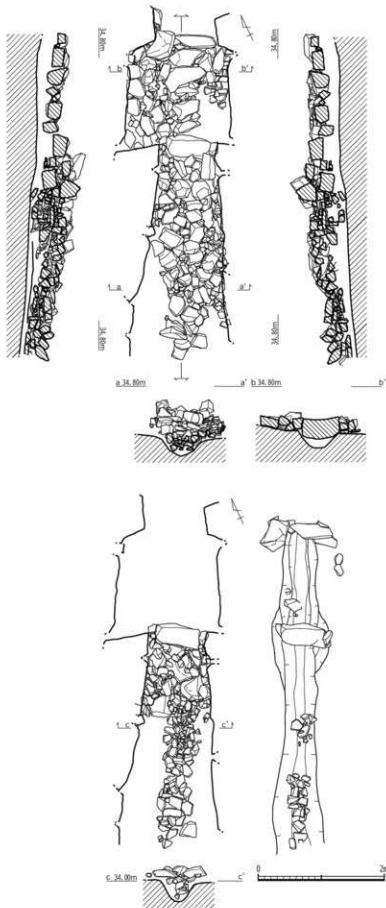
第45図 2号墳前室出土遺物実測図4 (177~186は S=1/2、その他は S=1/3)

み、石の積み直しを行ったと解釈できる。その時期は出土した須恵器からみて7世紀後半以降に位置づけられる。また9層の西側に伸びるラインは確認できなかったが、9層の堆積状況からみて、本来8層は2層に分層できるのであろう。したがって8層下部は7世紀後半前後には埋没していたと捉えることができ、この時点で石室は墓としての機能を停止していた可能性がある。

8層下の14層としたにぶい黄褐色土は玄室・前室には認められず、羨道部のみに堆積していた。14層はブロック状の土を多く含む層で、人為的に埋め戻されたような状態である。また14層上面と羨道部床面敷石の上端はほぼ同レベルとなる。以上のことから、羨道部はある段階で埋め戻した可能性がある。なおこの土層中から遺物は出土していない。このほか羨道部埋土中から勾玉が出土している。

羨道入口部黄褐色土上面出土遺物(第48図・図版67)

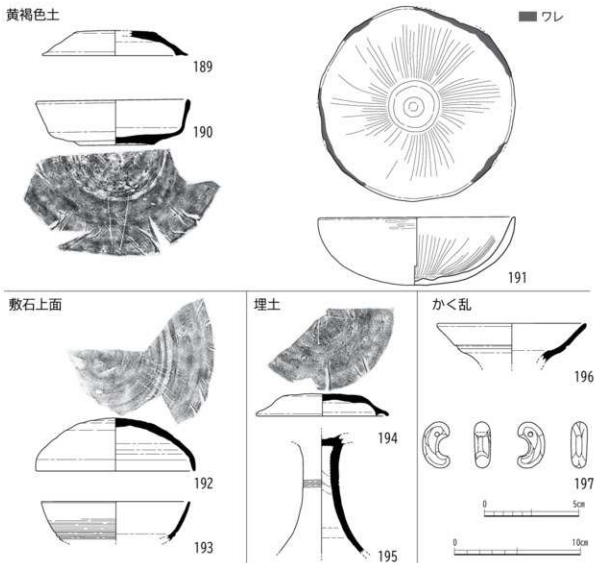
須恵器(189・190) 189は杯G蓋である。天井部外面回転ヘラケズリ、他は回転ナデである。焼成不良で、全体に摩滅する。190は杯Gもしくは杯Aである。底部外面はヘラ切り後ナデ、底部内面は不定方向ナデ、他は回転ナデである。口縁部から底部にかけての外面にヘラ記号がある。口縁部は焼け歪む。



第46図 2号墳羨道部床など実測図 (S=1/60)



第47図 2号墳横道開口部付近遺物出土状況図 (S=1/30)・壁面土層図 (S=1/60)

第48図 2号墳葬道出土遺物実測図（197は $S=1/2$ 、その他は $S=1/3$ ）

土師器（191） 暗文が施された杯である。底部から体部にかけて丸みを帯びた器形で、畿内における土師器杯Cに当たる。口径15.6cm、器高5.4cmを測る。口縁端部の形状は摩滅により不明瞭であるが、本来は面取りしている可能性がある。外面も器面の剥離が著しく、口縁付近にミガキが残る程度である。内面には一段の放射状暗文が施される。底部内面の中央に二重の円形くぼみが認められ、外側は幅5mmの浅いくぼみが直径4cm程の円を描く。内側は直径1.5cm程度のくぼみであり、断面をみると中央に向かってすり鉢状をなす。くぼみは暗文の施文後に、ナデにより付けられたものとみられる。

葬道敷石上出土遺物（第48図）

須恵器（192・193） 192は杯H蓋である。天井部外面回転ヘラケズリ、天井部内面不定方向ナデ、他は回転ナデである。天井部外面にヘラ記号がある。193は杯もしくは高杯であろう。外肩下半にカキメを施す。

羨道埋土出土遺物（第48図）

須恵器（194・195）194は杯G蓋である。天井部外面回転ヘラケズリ、天井部内面不定方向ナデ、他は回転ナデである。天井部外面にヘラ記号を有する。195は高杯の脚部片である。内外面回転ナデで、脚部中位に2条の沈線が巡る。

羨道かく乱出土遺物（第48図・図版67）

須恵器（196） 甕の口縁部片である。内外面回転ナデで、内面に降灰がある。

石製品（197） 翡翠製勾玉である。白みを帯びた緑色で、両面穿孔である。外形は、端正なC字形で、全長24.5mm、幅14mm、厚さ8.5mmである。

床面構造と閉塞施設 玄室床面は攪乱されており、石材が散在した状態で出土した。ただし右袖部付近と左側壁奥側に0.3～0.5mほどのやや厚い平石があり、前室の床面状況から判断して玄室床面の敷石と考える。他は排水溝内の石材や、壁体からの転石と考えられる。また袖部付近に分布する石材は玄室基底石の根石で、本来は敷石によって見えない状態であったと考える。また玄門部には、やや前室よりの地点に2石でシキミ石を設ける。

前室床面は0.1～0.3mほどの平石をほぼ全面に敷石するが、遺物が集中して出土した前門右袖部付近には認められない。また後述する排水溝の上にはやや厚い横長の石を蓋石状に設置する。前室敷石と玄室敷石の高さは概ね一致し、玄門・前門シキミ石よりも一段低い。また、前門部は前室よりに、長さ0.7m、幅0.35mほどのやや大きめな石を据え、シキミ石とする。

羨道部は内部に堆積した黒色土およびその下層の黄褐色土を除去したところ、羨道内のほぼ全面に乱雑に置かれた人頭大の角礫を検出した。0.2～0.3mほどのものが多く、その間に0.05～0.1mの小振りの石が詰まった状態（石材A群）で、前門付近の石は前門シキミ石や他の石よりも一段高い状態であった（石材B群）。検出当初、これらの石材は壁体が崩落したものの可能性や、後世に改変を受けた可能性を考えたが、床面に一部溝状の落ち込みを確認しており排水溝の存在に注意していたことや、石と石が密着していること、排水溝上に位置すること、石の間からは新しい時代の遺物が出土しないことなどから、古墳に伴う施設であると考えた。石材B群は他の石よりも一段高いこと、後述する羨道敷石の上にあることや出土位置などから閉塞石と判断した。閉塞石は前門シキミ石南端から南に0.8mほどあり、基底部の一部のみが遺存するものとする。0.3mほどの人頭大の石を横一列に配置し、その前後に0.15～0.3mの石を集積している。基底部の石は羨道敷石より0.05～0.1mほど浮いた状態であり、その間には硬くしまった黄褐色土が詰まる。また石材A群は排水溝上にある。次に石材A群・B群を除去したところ、石材B群の下でやや大きな平石（石材C群）、石材A群の下で0.05～0.2mほどの小振りの石（石材D群）を検出した。石材C群は羨道部敷石であり、前門シキミ石南端より南側1.6mほどまで設置する。玄室・前室の敷石よりもやや大きめな石を使用している。また石材D群は褐色土とともに、排水溝内に詰まった状態で検出した。

排水溝は石室床面の全面に設置されている。玄室奥壁側の左側壁を基点とし、玄室中心のやや東よりでく字に折れる。玄室中心から前室・羨道まではほぼ直線的であり、調査区外まで展開する。幅は玄室・前室・羨道部分ともに0.5mほどであるが、開口部付近でやや広がり0.7mほどとなる。深さは玄室奥壁側が最も浅く0.15m、前室～羨道部では0.3mほどの深さで、断面は逆台形・U字

形を呈す。排水溝床面は玄室から前室に向かって緩やかに低くなり、玄室奥壁側の底面と前門シキミ石付近の比高差は0.1mほどであるが、羨道部前門付近で急激に落ちており、前門から開口部までは急勾配となる。玄室奥壁側の底面と開口部側では0.35mほどの比高差がある。排水溝内の埋土は玄室・前室で上層の黒褐色土、下層の黄褐色土かなり、羨道部は褐色土と小石の土石混合層である。羨道部の小石は水の通りをよくするためのものであろう。また前室排水溝内埋土で鉄器・須恵器がまとめて出土し、玄室排水溝埋土では溝に流れ込んだ状態で耳環や玉類が出土した。排水溝に伴う施設として、先述した前室の蓋石がある。横長の石材を主軸に直行するように設置しており、他の敷石とは大きさや形態からみて明確に区別できる。また玄門・前門シキミ石も蓋石の機能を有している。蓋石の直下では須恵器が出土しており、古墳築造時期と蓋石設置時期が異なる可能性がある。羨道部排水溝の上にある石は、前室蓋石ほど整然ではなく乱雑ではあるが、排水溝を覆い隠すという点では、蓋石と同様の機能を考えてよい。また、排水溝の基点である玄室奥壁側の排水溝内では、溝の壁面に扁平な石を貼ったような状態であった。

③3号墳

i) 古墳の位置と現況 (第15・49図・図版40)

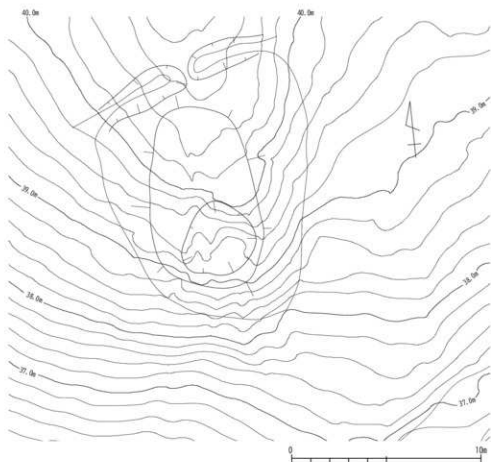
調査区中央やや西側の丘陵尾根先端部付近、標高37～40mの地点に立地する。小さな谷を挟んで北東側30mの地点に1号墳が位置する。また、南東側に隣接して5号墳があり、5号墳の周溝埋没後に3号墳を築造する。墳丘・石室とも、後世の破壊を受け遺存状態は悪い。調査前の段階では、羨道側壁腰石の一部が地表に露出し、羨道部に明確な落ち込みがあったことから、横穴式石室を主体部とする古墳であることが想定された。

ii) 墳丘 (第50～53図・図版40～43)

墳丘は大半が流出していたこともあり、流土・盛土の判別が困難であったことから、IV区の一部を掘り過ぎている。土層断面で確認したところ、Aトレンチで玄室中心から4.5m、Bトレンチで4.04m、Cトレンチで5.28mに地形変換点があり、これを墳裾ととらえた。したがって、直径8～10m前後の円墳である。I・IV区墳丘中では内護列石とみられる列石を、IV区で墳丘外側に外護列石を確認した。

地山整形 3号墳築造に伴う地山整形は、尾根線を挟んだ東西の周溝の掘削と、その内側の墳丘基底面の削り出し、および石室掘方の掘削である。東西の基底面は標高40m付近となる。東側は地山が東に向かって緩やかに下っており、明赤褐色の土を水平に積んで整地する (Cトレンチ34・35層)。墳丘北側 (背面) では明確な周溝はなく、墳丘の東西に弧状の溝が巡る。Aトレンチで幅1.88m、深さ約0.2m、Cトレンチで幅1.07m、深さ約0.2mである。Cトレンチの埋土下層は黒褐色土 (9層)、埋土上層は赤褐色の墳丘流土 (4層) が堆積し、Aトレンチでは墳丘由来の流土のみが堆積しており、比較的短期間で埋没したと考えられる。

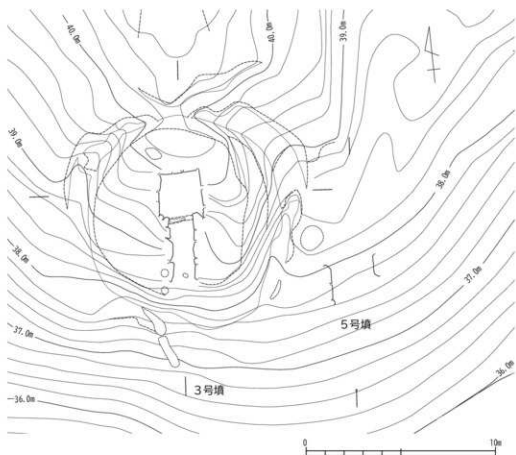
盛土 IV区を除いて残りは悪い。各トレンチの現状での基底面からの高さは、Aトレンチで0.3m、Bトレンチで0.2m、Cトレンチで最も残りがよく0.6mである。積土には主に地山由来の黄褐色もしくは赤褐色の土を用い互層状に積むが、積土の単位は比較的厚い。石室基底石を据えらるとともに



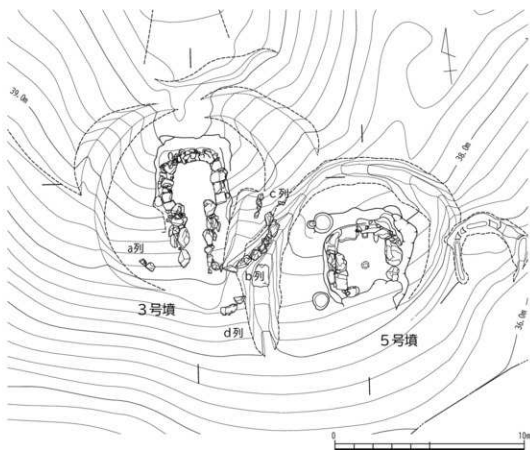
第49図 3号墳現況測量図 (S=1/200)

石室側壁と掘方の間を水平に積土する。側壁二段目の石材を設置後、これらを覆うように水平方向・斜め方向に積土し墳丘を形成する。また、墳丘盛土中で列石（内護列石）を検出したが、墳丘の土層断面中で捉えることはできなかった。

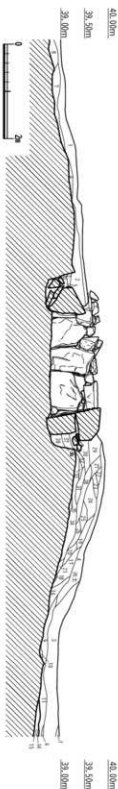
列石 I・IV区で、墳丘内または外で列石を検出した。I区では墳丘内に1列（a列）、IV区では墳丘内に2列（b・c列）、墳丘外に1列（d列）を確認した。a列は2石のみである。幅0.4×0.25m・厚さ0.2m、幅0.5×0.4m・厚さ0.15mの石材が墳丘外側に向けて面を揃えて並ぶ。底面の標高は約38.30mである。b列は羨道右側壁の端部から接続して石室の周りをおよそ1/6周する。石材底面の高さは標高38.20～38.50mである。羨道脇の3石はほぼ地山直上だが、石室から離れたところでは積土した上に石が据えられる。とくに、5号墳周溝を埋める箇所（玄室中心から3m南、石室主軸から4m東のあたり）では最も厚く、列石の下に0.3～0.4mの積土があった。この積土は細かく、固くしまっていた。列石の上端は標高38.60～38.70mで、一部は二段に積まれる。板石状の石材を盛土・列石に外側から貼りつけたようなものもある。石材の大きさ・形に統一性は見られない。c列はb列の内側のやや高い位置に検出した。0.2～0.4m大、厚さ約0.1～0.15mの扁平な石が、4石弧状に並ぶ。底面はほぼ水平で標高約39.00～39.20m、開口側の石が低く奥が最も高い。d列は墳裾墓道寄りに3石を検出した。墓道脇にやや大振りの石2石が据えられる。0.8mほど間隔を空けて、幅1.2m、高さ1.3m（推定）、厚さ0.5～0.9mの石が盛土に立てかけるように据えら



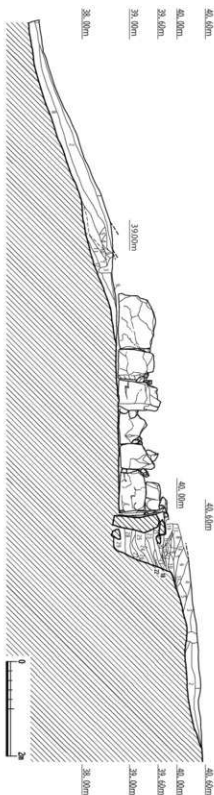
第50図 3号墳丘陵遺存状況図 (S=1/200)



第51図 3・5号墳地山整形状況図 (S=1/200)



第52図 3号墳土層断面図①(A・Cトレンチ南面土層)(S=1/80)



第53図 3号墳土層断面図② (S=1/80)

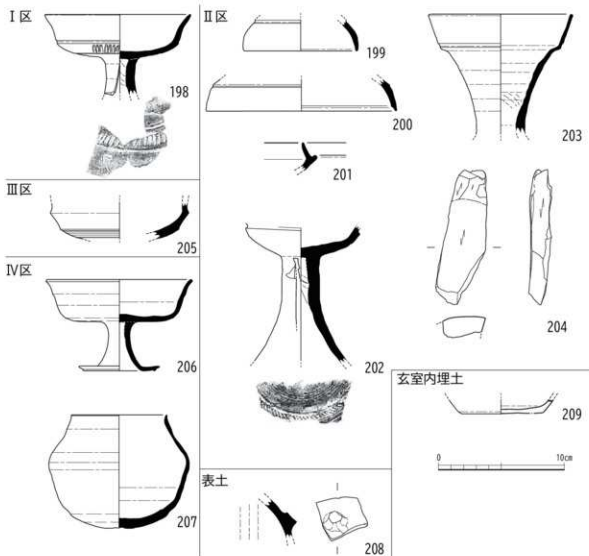
【築造土層断面図】

1. 黄褐色土 (5YR3/7) 硬土
2. 黄褐色土 (2.5Y5/4) しまりなし 2~3mmの砂粒を含む サラサラした土層
3. 木の根跡
4. 黄褐色土 (2.5Y5/6) わずかにしまる 2層と仮定しているがやや明るい 2~3mmの砂粒を含む
5. にがい黄褐色土 (10YR5/4) ややしまりあり 2~3mmの砂粒を含む
6. にがい黄褐色土 (10YR5/4) 5層とよく似ている
7. 明黄褐色土 (10YR6/8) しまりあり 砂粒を少し含む 砂層
8. 褐色土 (10YR4/4) 粘りあり やしまりあり 2~3mmの砂粒を少し含む
9. 黄褐色土 (2.5Y5/6) 非常によくしまる

【3号墳土層断面図】

1. 明褐色土 (7.5YR5/8) しまりなし 1~5mmの砂粒を多く含む (硬土・流土)
2. 明黄褐色土 (10YR6/8) しまりなし 1~5mmの砂粒を多く含む
3. 明黄褐色土 (5YR5/8) 粘りあり やしまりあり
4. にがい黄褐色土 (10YR6/4) 硬土、細砂粒を少し含む
5. 明黄褐色土 (10YR6/8) よくしまる
6. 黄褐色土 (10YR6/8) よくしまる 腐敗、細砂粒を少し含む
7. 明黄褐色土 (10YR6/8) よくしまる 硬い パイラン土の層
8. にがい黄褐色土 (10YR7/4) よくしまる 硬い パイラン土主体の層

9. にがい黄褐色土 (10YR7/4) しまり甘い パイラン土主体の層
10. 浅黄褐色土 (7.5YR8/6) よくしまる 硬い
11. にがい黄褐色土 (2.5Y6/4) よくしまる 密
12. 明黄褐色土 (10YR6/6) よくしまる 硬い
13. にがい黄褐色土 (2.5Y6/4) よくしまる 硬い
14. 明黄褐色土 (7.5YR5/8) よくしまる 硬い
15. 明黄褐色土 (5YR5/8) よくしまる 硬い
16. 明黄褐色土 (5YR4/8) よくしまる 硬い
17. 明黄褐色土 (7.5YR5/6) よくしまる 硬い
18. 明黄褐色土 (5YR4/8) よくしまる
19. 明黄褐色土 (10YR6/8) よくしまる
20. にがい黄褐色土 (2.5Y6/4) よくしまる
21. 黄褐色土 (10YR5/6) 非常によくしまる
22. 明黄褐色土 (7.5YR5/6) 非常によくしまる
23. 明黄褐色土 (10YR6/6) よくしまる
24. にがい黄褐色土 (2.5Y6/4) よくしまる 硬い
25. 明黄褐色土 (10YR6/6) よくしまる
26. 明黄褐色土 (10YR6/6) よくしまる
27. 明黄褐色土 (10YR5/6) よくしまる
28. 褐色土 (10YR4/6) しまりなくもろい



第54図 3号墳出土遺物実測図 (S=1/3)

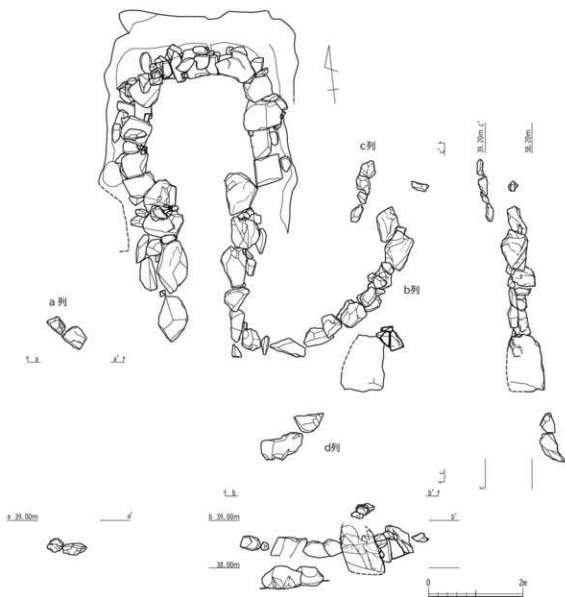
れる。この石材のみ表面が平滑である。

墳丘遺物出土状況

I区～IV区流土中やII区周溝を中心に須恵器を主体とした遺物が出土した。いずれも破片の状態で、確実に3号墳に伴う遺物はない。墳丘後背面のII・III区出土遺物は4号墳から流れ込みの可能性もある。なお、2号墳で報告した須恵器甕(98)は3号墳I区墳丘盛土出土の破片との接合資料である。

I区出土遺物(第54図・図版7)

須恵器(198) 高杯である。杯部下半に連続刺突文を施し、脚部に三方向の貫通する透かしがある。内外面回転ナデで、杯底部内面は不定方向ナデ、脚部内面にシボリ痕がある。杯部外面下半に連続刺突文を施し、脚部に三方向の貫通する透かしがある。



第55図 3号墳列石検出状況図 (S=1/80)

Ⅱ区出土遺物 (第54図・図版67)

須恵器 (199~203) 199は杯H蓋として図示したが、口径が小さく別の器種の可能性もある。内外面回転ナデで、体部に沈線が巡る。200は杯H蓋で、細片のため復元径に不安がある。内外面回転ナデで、口縁端部に凹線状の段、体部外面に沈線が巡る。内外面ともに降灰が顕著である。201は杯H身の細片で、内外面回転ナデである。202は高杯で、口縁部と脚端部を欠く。杯部下半は連続刺突文を施し、脚部に三方向の貫通する透かしがある。杯部下半から脚部上半にかけてカキメを施し、他は回転ナデで、杯底部内面は不定方向ナデである。全体的に降灰がある。203は甕の口頸部片である。頸部上位で緩やかに外反し、口縁部は直立気味に立ち上がる。内外面回転ナデで、シボリ痕が残る。

石製品 (204) 砥石の破片で、2面の砥面を確認できる。砂岩であろうか。

Ⅲ区出土遺物（第54図）

須恵器（205） 高杯の杯部片である。下半にカキメを施し、他は回転ナデである。

Ⅳ区出土遺物（第54図）

須恵器（206・207） 206は高杯である。杯部は杯Aのような形態で、脚部は裾部が水平に開き端部が口唇状を呈する。杯底部外面回転ヘラケズリ、杯底部内面不定方向ナデ、他は回転ナデである。207は壺である。体部は球形で、口縁部は小さく直立し、底部は平底気味である。底部外面ヘラ切り後ナデ、底部内面不定方向ナデ、他は回転ナデである。外面の口縁部付近と内面の体部下半から底部にかけて降灰がある。

表土出土遺物（第54図）

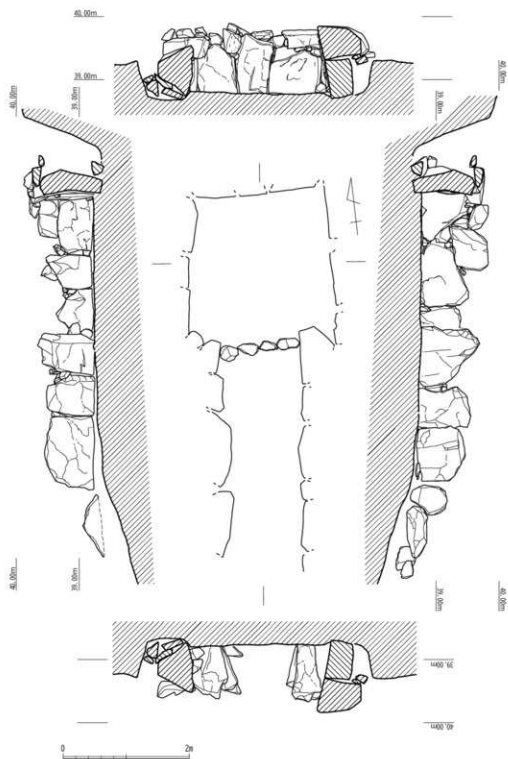
須恵器（208） 提瓶の把手付近の破片であろう。

iii）石室（第50～53、55～57図・図版44～48）

玄室主軸は等高線に直交し、 $N-6.5^{\circ}-E$ をとる。南側に開口する単室両袖の横穴式石室である。石室全長は5.71m。後世の破壊等により壁体の二段目以上の石材はほとんど残存しない。

石室掘方 尾根の等高線に直行して長軸をとる。羨道左側壁裏では樹根の攪乱があり確認できなかったが、全長約5.0m×幅約4.0mの隅丸長方形プランを呈する。奥壁裏側が広く掘られており、石材と掘方壁面との間隔は0.7～0.8m、立ち上がりの傾斜は急である。側壁裏側では0.2～0.3m間隔があり、立ち上がりはほぼ垂直に近い。掘方下端のレベルは標高38.60～38.70mでほぼ水平である。掘り込み面からの深さは、Bトレンチで1.4m、A・Cトレンチで共に0.6mで、基底石が納まる程度の深さである。西側壁の裏側では、基底石を支える根石が顕著であったが、他の箇所ではあまり見られなかった。

玄室 主軸長2.12m、西側壁長2.12m、東側壁長2.40m、奥幅2.08m、中位幅2.25m、前幅2.30mである。開口側がやや開く正方形プランである。基底石はいずれの壁面も3石で、西側壁の奥壁寄り、奥壁の東側、東側壁の玄門側の石材は方形で、ほかは大きさ・形が不整形である。奥壁基底石は、最大幅0.6m、高さ約1.0mの石材を中央に立て、西側に幅0.6m、高さ約0.8m、東側に幅・高さ約0.8mの石材を据える。東西の石材の上にはやや扁平な石材を積み、中央基底石との高さが揃う。西側壁は奥から順に幅0.85m・高さ0.55mの横広な長方形、幅0.5m・高さ0.7mの台形、幅0.7m・高さ0.6mの略三角形の石材を据え基底石とする。上端のレベルは不統一で、横目地は通らない。奥壁側の石材の上には、長方形石材を横位に積む。玄門側の基底石と玄門袖石は接さず、その間に0.2mほどの石材を充填する。東側壁は奥壁側から幅0.8m・高さ0.7mの略三角形、幅1.2m、高さ0.8mの略台形、幅0.5m、高さ0.7mの長方形の石材を据え基底石とする。奥壁側の二つの石材の間に落とし込むように方形の石材を積む。奥壁側隅角部は、奥壁東の基底石が東側壁基底石に突き当たり、その上の石材が東側壁基底石にのる。西側壁奥側の基底石は奥壁基底石に突き当たり、その上の石材が奥壁基底石にのる。玄室の高さは、現状で東側壁二段目の石の上端が最も高く標高39.84m、床面からの高さは約1mである。床面に敷石・貼り床等は認められない。玄門部の幅は1.24～1.4mである。西袖石は、幅約0.5m、厚さ最大約0.65m、高さ現状約0.9m、上部は後世の破壊を受け欠損する。東袖石は幅約0.9m、厚さ約0.65m、高さ約0.9mの略三角形である。床には

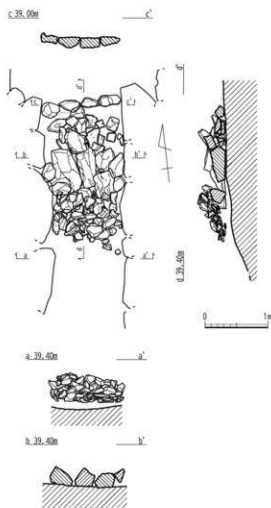


第56図 3号墳石室実測図 (S=1/60)

幅0.3m前後、厚さ0.1m前後の扁平な石4石を横位に据え、シキミ石とする。

玄室遺物出土状況

床面直上には赤みのある黄褐色のやわらかい土が0.16～0.2m程堆積し、床面からやや浮いて須



第57図 3号墳閉塞石実測図 (S=1/60)

ら、複数回の追葬が考えられる。

閉塞施設 玄門の中ほど（玄室中心点から1.4m）から開口部に向かって約2mの範囲で閉塞石の一部を検出した。床面直上に底面が平らな厚さ0.2～0.3m、0.3～0.7mほどの石材を羨道の幅を埋めるように据え、閉塞の基底石となる。基底石の前後には0.2m前後の石材が散在し、閉塞石が崩落したものと考えられる。

玄室遺物出土状況

埋土中で土師器小皿が出土したほかは、出土遺物はない。

玄室出土遺物（第54図）

土師器（209） 小皿で、全体に摩滅するが、底部は回転糸切りである。

④4号墳

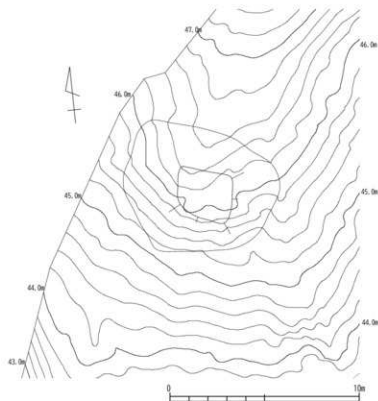
i) 古墳の位置と現況（第15・58図・図版49）

調査区最高所、標高46.0m付近の丘陵尾根上に位置する。3号墳の北40m、1号墳の北西20mの地点である。調査前から直径6～7mほどの低い高まりが認められ、石材がわずかに露出していた

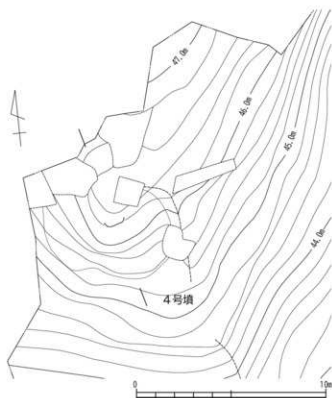
恵器の甕片が出土した。また、その上に部分的に硬くしまった暗い白灰色の土がのり、糸切り痕のある土師器小皿が出土した。

羨道 壁体が残る範囲は長さ2.78m、幅1.08～1.14mである。側壁は二段目以上がすべて失われる。両側壁は玄室主軸に対し平行である。玄門袖石に接する部分では両側壁ともに形が整った長方形石材（幅0.6～1.1m、高さ0.75～0.8m）を縦位に据え、上端が標高39.5mに揃う。それより南側は、東側壁では小型で不整形な石材を数石、西側壁では大型の石材を横位に2石据え基底石とする。

羨道・墓道盛土 羨道の表土を掘り下げていくと地山に達する前に硬化面（第53図：9層、以下同様に同図中層位を示す）があった。これを羨道床面と捉え、玄室主軸上にベルトを設定して土層を確認した。玄室中心から約5.8mの部分まで、地山直上に斜面にそって盛土（10～12層）する。その上に、古墳築造からほどなく褐色の土（8層）、次いで明黄褐色の土（7層）が堆積する。8層及び盛土（10・11層）には数回の掘り込み（4～6層）が認められることから、



第58図 4号墳現況測量図 (S=1/200)



第59図 4号墳墳丘遺存状況図 (S=1/200)



第60図 4号墳地山整形状況図 (S=1/200)

ため、古墳の存在が推測された。

ii) 墳丘 (第59～61図・図版49)

明確な周溝はないが、主体部から半径2～3mの範囲で地形変換点があり、この範囲を削り出した可能性がある。主体部付近は約3m四方の平坦面を造り出しており、平坦面上には主体部基底石を据えたと考えられる複数の落ち込みが連続する。盛土は確認できなかったが、主体部との関係から本来は盛土が存在したものとする。崩壊・流出したのであろう。周溝・墳丘がないため正確ではないが、地形変換ラインから想定すると、南北5m、東西7mの楕円形墳に復元できる。

iii) 主体部 (第62図・図版49～52)

主体部は地山整形により造り出された平坦面上に位置する。遺存状態は悪く、基底石が1石残るのみで、構造は不明である。遺存している石材は平坦面の北側にあり、長さ1.8m、高さ1.0m、石材の掘方は北側で1.0mほどの深さで、直立気味に掘削する。この石材を中心に、東西には楕円形の掘り込みが連続しており、基底石を据えるための掘方と考えられる。石材や基底石掘方の位置から判断して、主体部の規模は東西2m、南北3m以上の長方形の石室を想定できる。主体部床面直上の一部には0.1～0.3mほどの扁平な石材があり、敷石と考える。敷石とほぼ同レベルで、玉類がまとも出土した。

iv) 遺物出土状況 (第62図・図版50・51)

石室床面直上で0.05～0.1m大の石材とともに検出した。主軸より東側に集中し、西側からはガラス丸玉1点のみ検出した。内訳は翡翠製勾玉(1)、碧玉製管玉(2)、ガラス小玉(11)、ガラス丸玉(17)の計31点と、他にガラス玉破片5点がある。なお、このうちガラス小玉2点、ガラス丸

玉2点は掘り下げた土を金篩でふるって確認したものである。石室の遺存状態より、これら玉類の出土状況は大きく攪乱を受けた結果と考えられる。しかし、勾玉の位置や、ガラス丸玉が帯状に分布する点から、本来の状況を少なからず反映している可能性はある。

このほか、須恵器や陶磁器が出土したが、古墳に伴うものではない。

出土遺物（第63・64図・図版67）

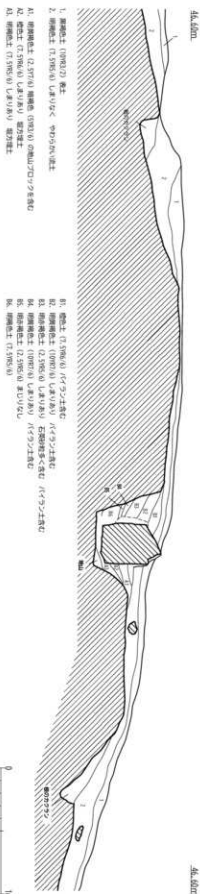
石製品（210～212） 4号墳からは、石室内から翡翠製勾玉1点、碧玉製管玉2点が出土した。

翡翠製勾玉（210） 4号墳で出土した翡翠製勾玉は、白緑色不透明な石材で、鉄針で片面穿孔されている。全長4.1mm、幅2.5mm、厚さ1.7mmである。大賀克彦氏による分類でNn型にあたると考えられ、古墳時代前期末から製作される。白色不透明な石材を使用し、鉄針による片面穿孔で、断面D字形であることが特徴である（大賀2012）。

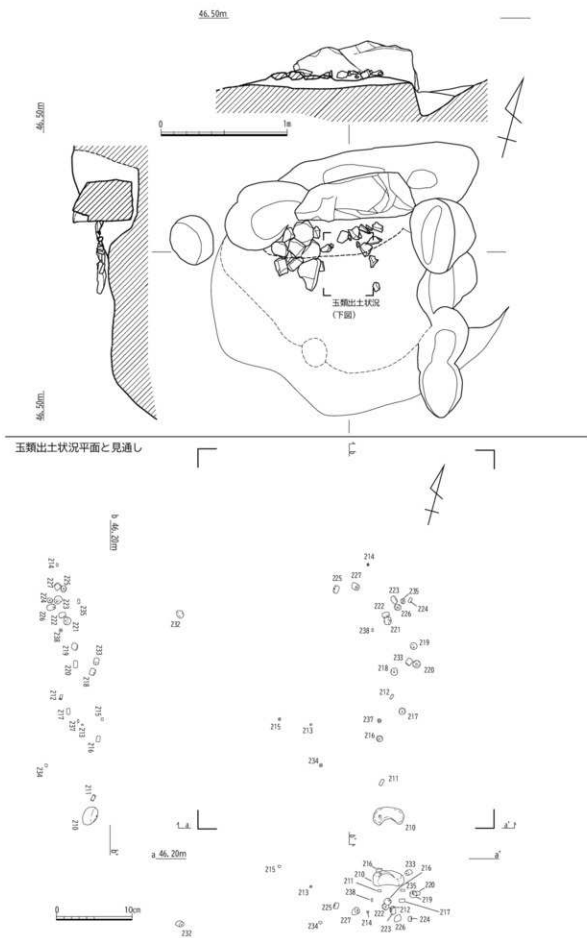
碧玉製管玉（211・212） 碧玉製管玉2点は、色調は青みのある淡緑色（211）、灰緑色（212）を呈し、縞が入る。法量は、全長5.7～7.0mm、直径2.7～3.9mmで、212は211と比較してやや小さい。いずれも、孔内に穿孔時の回転痕がみられ、石針による両面穿孔と考えられる。石材は、国内においては産地不明とされる一群の「未定C群」と考えられる。

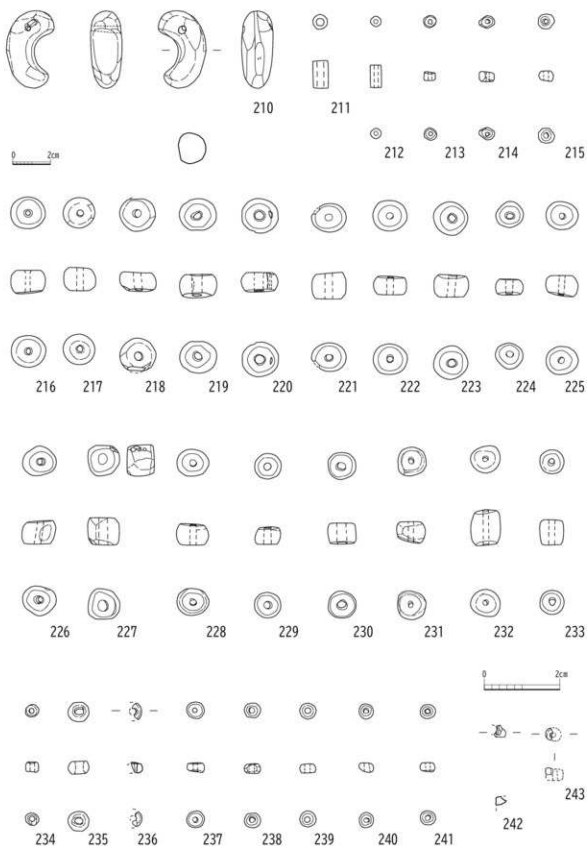
以上から、半島から搬入された舶載品である、「半島系」の管玉と考えられる（薬科1997；大賀2005；谷澤2020）。弥生時代後期後半から古墳時代前期にかけて多く流通するものである（大賀2005；谷澤2020）。

ガラス製品（213～243） 石室内からガラス製丸玉18点（216～233）、ガラス製小玉11点（213～215、234～241）、ガラス小玉破片が5点出土した。ガラス製小玉とガラス製丸玉の法量は、直径3.0～5.5mm、6.3～9.8mmの大きく2群に分かれる。色調は、大半は紺色～濃青色透明を呈すが、赤褐色不透明（213・214）、黄色半透明（215）を呈すものがある。大型のものは紺色透明、小型のものは赤褐色不透明、黄色半透明、濃青色透明と色調に富む。

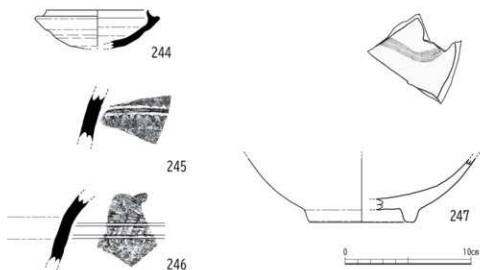


第61図 4号墳土層断面図 (S=1/30)





第63図 4号墳出土遺物実測図1 (210はS=1/2、その他はS=1/1)



第64図 4号墳出土遺物実測図2 (S=1/3)

すべて両端面ともに研磨されており、特に紺色透明の大型品は、両端が平坦に研磨されている。製作技法は、孔と平行方向に伸びる気泡筋がみられること、孔と平行に入る縞が確認できることから、全て引き伸ばし技法であると考えられる。ガラスの材質や着色剤については、理化学的分析の結果をふまえて検討する必要がある。

以上述べた翡翠製勾玉1点(210)、碧玉製管玉2点(211、212)、ガラス丸玉(216～227、232・233)・小玉(213～215、234・235・237・238)は、奥壁に向かって右奥に集中して出土している。これらは、埋葬時のセットの可能性が考えられるが、石室内の遺存状態が悪く、原位置をとどめていない可能性がある。

須恵器(244～246) 244は杯H身で、復元口径8.1cmと著しく小さい。底部外面は回転ヘラケズリ、他は回転ナデである。245・246は甕の頸部細片である。いずれも外面を沈線で区画し、上下に櫛描波状文を施す。内面は回転ナデである。

陶磁器(247) 龍泉窯系青磁碗IV類であろうか。高台疊付きのみ軸はぎする。内外面に櫛目により施文する。

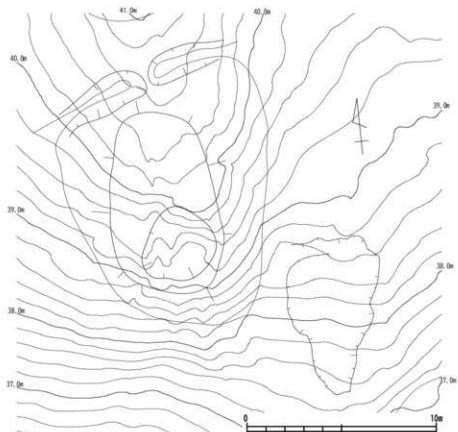
⑤5号墳

i) 古墳の位置と現況(第15・65図・図版40・41)

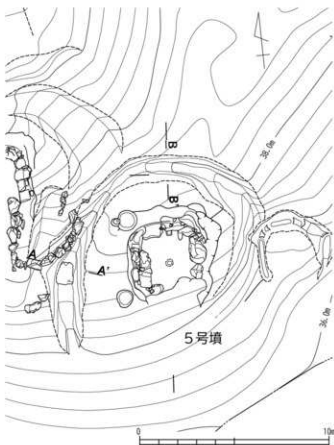
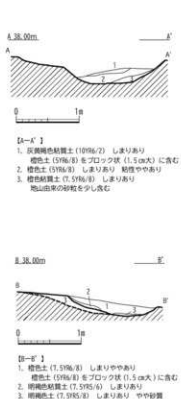
調査区中央やや西側の丘陵根先端部付近、標高37～38mの地点に立地する。西側に接して4号墳があり、一部は3号墳築造時に破壊されている。墳丘盛土はほぼ残っておらず、石室も破壊が著しい。調査前には古墳の存在は認識していなかったが、3号墳周辺を精査する過程で石材を検出した。石室の存在を想定して精査した結果、横穴式石室を主体部とする古墳であることを確認した。なお、5号墳東側には直径3m程度の周溝状の遺構があるが、性格は不明である。

ii) 墳丘(第65図・図版53・55)

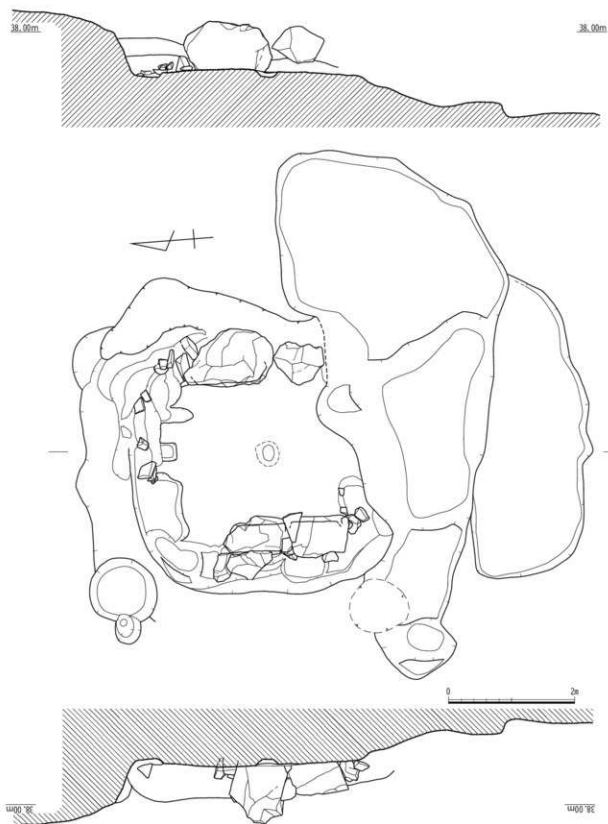
盛土は全く残っていないが、周溝の規模・形状から判断して、直径10m前後の円墳である。周溝



第65図 5号墳現況測量図 (S=1/200)



第66図 5号墳地山整形状況図 (S=1/200) と周溝土層図 (S=1/60)

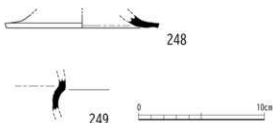


第67図 5号墳石室展開図 (S=1/60)

断面は緩やかな逆台形で、地山・墳丘由来と考えられる橙色土を主体とした土層が堆積する。I区周溝で須恵器の細片が出土した。

出土遺物(第68図)

須恵器(248・249) 248は高杯の脚裾部細片で、内外面ともに回転ナデである。249は器種不明の細片で、傾きに不安がある。内外面回転ナデで、外面に降灰がある。



第68図 5号墳出土遺物実測図(S=1/3)

iii) 主体部(第67図)

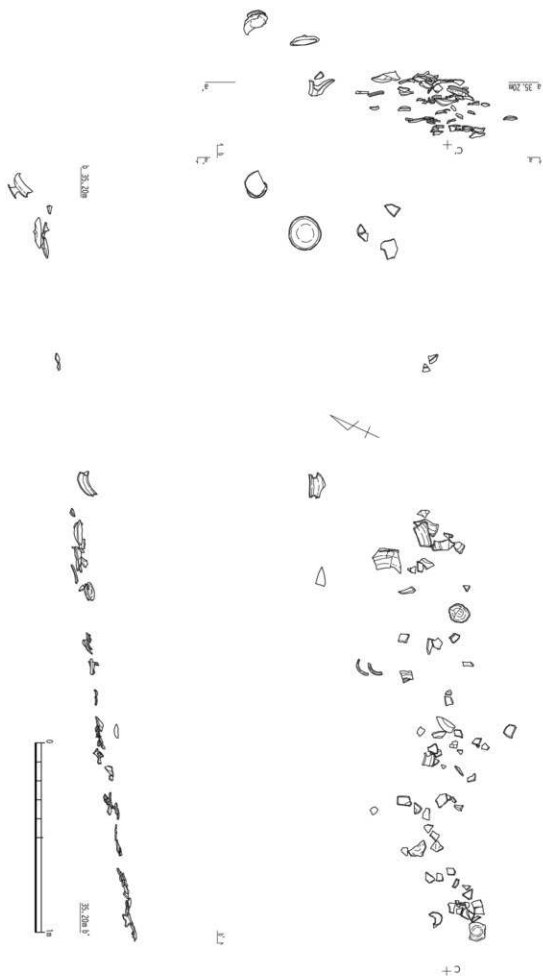
遺存状態は悪く、一部に基底石と掘方が残るのみである。掘方の痕跡から開口部を南に向けた横穴式石室と考えられ、幅2m前後・長さ2.0~2.3m前後の平面方形気味のプランと推測できる。義道部にあたる部分は石室掘方を切るテラス状遺構(SX02)があるが、古墳との関係は不明である。石室掘方は遺存範囲で東西・南北ともに5m程度の平面方形を呈し、西側・北側で0.8m程度、東側で0.4m程度である。

奥壁はわずかに根石が残るのみであるが、基底部は掘方の痕跡から2石と考えられる。西側壁は基底部の石材が2石残るが、掘方の痕跡から本来は3石と考えられる。比較的大型の石材で、玄門側は横位、もう1石は縦位に据える。東側壁の基底石も3石の可能性があり、奥壁側の石材を欠き、玄門側の石材は2次的に動いている。原位置を保つ真ん中の石材は大型の石材を横位に据える。玄門は両側とも石材を欠くが、掘方の痕跡から玄門幅は1m前後と考えられる。床面に敷石等の施設はなく、出土遺物もない。

(2) 大溝(第15・28・69図・図版56~59)

調査区中央南側に位置し、2号墳の墳裾を巡る大きな溝である。表土を除去する過程で黒色土の広がりを確認し、2号墳との位置関係から当初は2号墳の周溝と認識して調査を進めた。そのため、大溝の出土遺物の多くは「2号墳〇区周溝」として取り上げている。2号墳の各トレンチ土層を精査した結果、本来の2号墳周溝を把握し大溝に切られることが判明したことから、2号墳とは別の遺構と捉え「大溝」とした。

南側と東側が調査区外にのびるが、現状で総延長40mほどが円弧状に巡る。上端幅は、2号墳Ⅱ区にあたる地点が最大(約8m)で、東側・南側で幅を減じ東端部で1.3m、南端部幅2.8mである。下端の幅は0.2~0.8m、おおむね0.4m前後で、2号墳Ⅱ区付近が下端最高所(標高36m)となり、東側と南側に向かって低くなる。断面は緩やかなV字状もしくは逆台形で、上端と下端の比高差は最大で2.0mである。埋土は大きく3層にわかれる。下層は地山由来の明褐色土(赤茶土層として遺物取り上げ)を主体とした土層が0.3~0.5mほど堆積し、大溝掘削後、短期間で埋没したことを示す。中層は褐色土・にぶい黄褐色土(灰茶土層として遺物取り上げ)を主体とした土層が0.3m程度堆積する。上層は暗褐色土・黒褐色土(黒褐色土層として遺物取り上げ)が0.2~0.3mほど堆積し、さらにこの上部に周囲から流れ込んだ流入土と表土を形成する。下層が急速に埋没したのち、



第69図 2号墳大溝遺物出土状況図 (S=1/20)

周囲が土壌化しながら順次自然に埋没していった過程を示す。

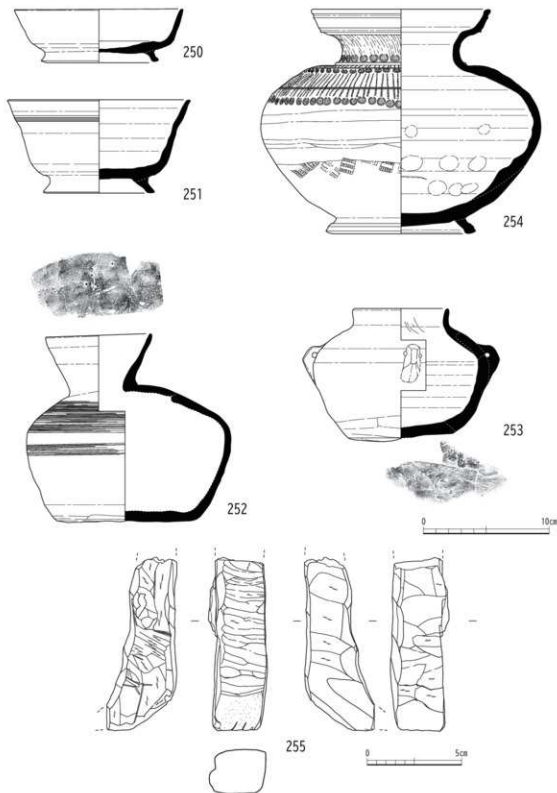
遺物出土状況

上層から下層にかけて完形品に近い土器群は比較的多く出土した。下層では須恵器無台杯、中層では須恵器杯B・杯H・無台杯・高杯、土師器椀・甕、軟質系土器甕、上層では須恵器杯B・四耳壺・平瓶、新羅土器、各層にわたり須恵器杯B・小型甕・短頸壺が出土した。大溝の北西側上方にある1号墳羨道・墳裾の土器と接合関係にあるものが多く、本来は1号墳に伴う土器群と考えられる。大半が中層～上層にかけての自然堆積の過程で流れ込んだものであり、大溝内に人為的に投棄したものではなく、1号墳に供献した土器群が流れ込んだ可能性が高い。ただし、新羅土器など細片化したものが多く、1号墳供献時に意図的に破砕した可能性もある。

上層出土遺物（第70図・図版68）

須恵器（250～253） 250は杯Bで、高台端部は外側に張り出す。底部外面はヘラ切り後回転ヘラケズリ、底部内面は不定方向のナデで、他は回転ナデである。251は形態的には杯Bであるが、一般的な杯Bと異なる特徴がある。器高が高く、体部は直線的の外方に開き、口縁部へと立ち上がる。高台も高く、端部は外側に張り出す。口縁部直下に3条1単位の沈線が巡り、上段の1条は明瞭、中段・下段の2条は一部不明瞭である。底部外面はヘラ切り後回転ヘラケズリ、底部内面は不定方向のナデである。体部から口縁部は強い回転ナデで、内面は凹凸が顕著である。焼成は全体的に甘い。1号墳羨道床面直上の破片との接合資料である。252は平瓶である。口頸部は直線的に立ち上がり、肩が張り、底部は平底である。円盤閉塞後、口頸部を貼り付ける。底部外面はナデ、底部側面は手持ちヘラケズリ、他は回転ナデで、肩部にカキメを施す。外面の口頸部から肩部にかけてヘラ記号を有する。外面は底部を除く広範囲に降灰が認められる。253は肩部に把手を有する短頸壺である。体部は扁球形で肩部がやや張り、口縁部は短く直立する。底部は抹角平底である。底部外面は不定方向の工具ナデ、底部側面は手持ちヘラケズリ、体部から口縁部は内外面回転ナデで、底部内面は不定方向のナデである。内面の頸部付け根から口縁部にかけてシボリ痕が残る。肩部の4ヶ所に縦方向の把手を張り付け、棒状の工具を突き刺し、直径3mm程度の円孔を穿つ。外面は肩部を中心に降灰が認められるが、口頸部外面から内面にかけては降灰がないことから、本来は蓋を伴い焼成した可能性がある。

新羅土器（254） ほぼ完形の壺である。厚さは平均的に1cm前後と厚く、ずっしりと重い。体部は扁球形で、最大径は中位のやや上にある。頸部はしまりが弱く、直立して短く立ち上がる。口縁部は受口状で、外傾してやや内湾気味に立ち上がる。底部は八字形のやや高い高台を張り付け、高台端部の内面はわずかに内側に突出する。体部はタタキ成形で、外面下半部に木目直交の平行タタキ目が残る。現状で確認できるタタキ目の単位は1cm四方で、非常に小さな原体を使用したと推測される。内面の当て具痕は不明瞭だが、直径1cm程度の円形のくぼみが連続しており、タタキ目に対応する可能性がある。体部タタキ後、全体に回転ナデを施し、さらに乾燥が進行した段階で体部外面の中心付近を中心に工具ナデを施し、ヘラミガキのような雰囲気となる。体部内面はロクロ目が顕著で、頸部外面にはシボリ痕跡が明瞭に残る。高台付近の外面は回転ヘラケズリで、高台貼り付け部には貼り付けのための沈線が数条ある。底部外面は回転ヘラケズリ後ナデで、最終調整後に直



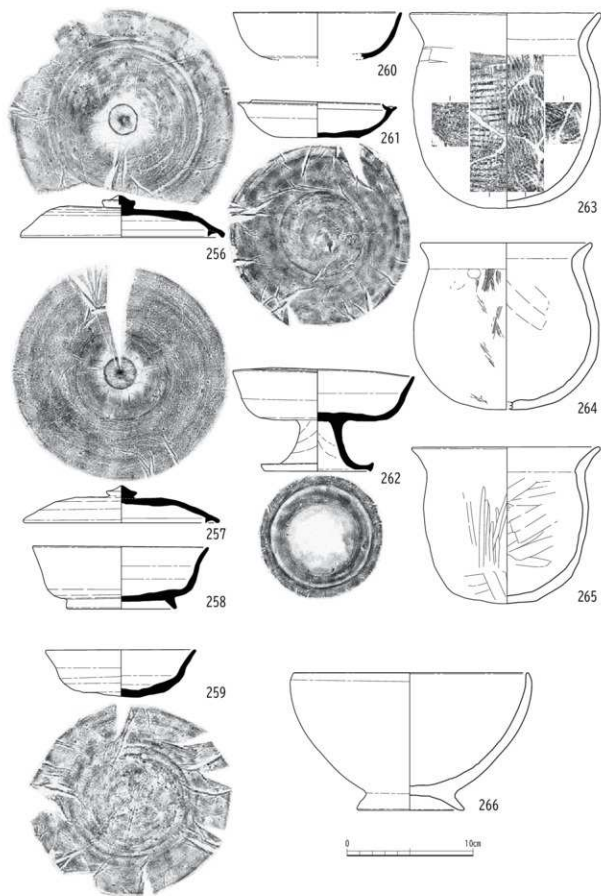
第70図 大溝上層出土遺物実測図（255はS=1/2、その他はS=1/3）

径3mm程度のC字状の圧痕が無数にあるが、その要因は不明である。口縁部外面の上下端に沈線を施し、頸部付根に断面三角形の小さな突帯を貼り付け、突帯に接する頸部にはスタンプによる二重円点文（真ん中が「・」、その外側が「○」、最も外側が「C」字状：以下「スタンプA1」）が一周めぐる。肩部には3条一単位の沈線を上下二段に施し、頸部付け根から体部中位にかけて、スタンプにより縦長連続C列点文（「スタンプB1」）・二重円点文（「スタンプA2」）・縦長連続C列点文（「スタンプB2」）・二重円点文（「スタンプA3」）を施文する。スタンプA1はほかの部位と比べて深くはっきりしており、素地の乾燥が進んでいない段階で施文したと考えられる。スタンプB1もA1と同様に深くはっきりした施文である。両隣の施文との重複はなく、施文時の粘土の動きから右から左へ施文していった可能性がある。スタンプA2は沈線を切り、スタンプB2に切られる。スタンプA2同士の重複関係では、左が切り、右から左へと施文したことを示す。スタンプB2は沈線とA2を切る。一つの単位が2列になったブラシ手法と考えられる施文箇所もあり、この部分では右側が左側を切る。なお、2列一単位のものは下半部のみズレた部分が確認できることから、施文具の上端部を起点に下端部のみをブラシしたものと考えられる。スタンプA3はスタンプA1・A2と比べやや浅く不明瞭であり、素地の乾燥が進んだ段階で施文した可能性が高い。左右の重複関係では大半が左が切ることから、右から左へと施文したことを示すが、2ヶ所のみ右が切るように見える部分がある。以上から、施文順序はスタンプA1→B1→A2→B2→A3と復元でき、それぞれの部位では右から左へと施文したと推測できる。なお、B1・B2とA1・A2・A3はそれぞれ同一の原体を使用した可能性が高い。底部を除く外面全体と口縁部内面・底部内面に降灰があり、蓋を伴わず正置状態で焼成したことがわかる。焼成は非常に良好で、胎土中に1～3mm程度の白色砂粒を多く含む。断面の色調はサンドウィッチ状で、内部の色調はあずき色を呈する。なお、一部に敲打痕のような痕跡があり、割れ口が風化していることから、意図的な打ち欠きの可能性がある。

石製品(255) 砥石である。方柱状を呈し、一方を欠損する。四面を砥面として使用し、長軸方向に対し直交方向の擦痕が顕著である。石材は砂岩と考えられる。遺構に伴うものかは不明である。

中層出土遺物（第71図・図版68～70）

須恵器（256～262） 256・257は杯B蓋で、内面にカエリを有する。外面に直径2.5cm前後、高さ1.0cmに高くしっかりとした擬宝珠状のツマミを貼り付ける。いずれも口縁端部とカエリ端部の高さがほぼ等しい。天井部外面は回転ヘラケズリ、天井部内面は不定方向のナデ、他は回転ナデである。外面に同一意匠のヘラ記号を施す。256は胎土に1～3mm程度の白色砂粒を多量に含み、257は胎土精良である。256は1号墳開口部出土の破片との接合資料、257は全く欠損がない完形品である。258は杯Bで、高台はわずかに外方に踏ん張る。底部外面はヘラ切り後回転ヘラケズリ、底部内面は回転ヘラケズリで、他は回転ナデである。259は無台杯で、底部はやや丸みを帯び、体部は外反して立ち上がる。底部外面はヘラ切り後ナデ、底部内面は一定方向のナデ、他は回転ナデである。全体に焼け具合にムラがあり、内外面の一部に降灰がある。全体にやや歪む。口縁部がわずかに欠損するが、ほぼ完形品である。260は杯Bと考えられるが、底部を欠損する。内外面回転ナデで、底部付近の外面のみ回転ヘラケズリが確認できる。261は杯Hで、全体的にシャープなつくり



第71図 大溝中層出土遺物実測図 (S=1/3)

である。カエリの立ち上がりは4mm程度で著しく低い。底部は平底である。底部外面はヘラ切り後ナデ、底部内面は不定方向のナデ、他は回転ヘラケズリである。口縁部の一部に調査時に受けた欠損がある以外は完形品である。262は高杯で、脚部は短脚で、裾部は水平気味に開き端部は上下に肥厚する。杯底部外面は回転ヘラケズリ、杯底部内面は不定方向のナデ、他は回転ナデである。脚裾部の内面にヘラ記号がある。

軟質系土器(263) タタキ成形の小型甕である。体部は倒卵形を呈し、口縁部はゆるやかに屈曲する。外面は木目直交の平行タタキ目、内面は平行当て具痕が残る。口縁部は回転ナデである。

土師器(264~266) 264・265は小型の甕である。264は体部最大径が下位にあり、口縁部付け根がしまり、口縁部はく字に屈曲する。外面はハケ後ナデ、内面はヘラケズリで、口縁部はヨコナデである。265は体部最大径が上位にあり、口縁部付け根は締まらずに、口縁部はく字に屈曲する。底部は平底気味である。外面はナデ後粗い縦方向のヘラミガキ、内面はヘラケズリで、口縁部はヨコナデである。264と比べ器壁が薄い。264・265ともに被熱の痕跡はない。266は台付鉢である。体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部は内側に巻き込むように内湾する。八字に開く高台が付く。内外面ともに器面が剥落するが、内面は砂粒の動きがありケズリ状の調整と考えられる。外面は非常に平滑で光沢があることから、ヘラミガキの可能性が高い。

上層~中層出土遺物(第72図)

須恵器(267~270) 267~269は杯B蓋である。267は口縁部にカエリがなく、口縁部は断面三角形状に小さく直立する。天井部に擬宝珠状の高くしっかりしたツマミを有する。天井部外面は回転ヘラケズリ、天井部内面は不定方向ナデ、他は回転ナデである。268・269は口縁部にカエリ、天井部にツマミを有する。いずれも口縁端部とカエリ端部の高さが等しく、天井部外面回転ヘラケズリ、天井部内面不定方向ナデ、他は回転ナデである。269は天井部外面にヘラ記号がある。270は小型の甕である。体部は球形で、口縁部はく字に屈曲し、口縁部直下に沈線が巡る。外面の下半部はタタキ目(平行タタキ目?)をナデ消し、上半部にカキメを施す。内面の下半部は当て具痕(原体不明瞭、一部格子状)、上半は回転ナデである。内外面の一部に降灰がある。

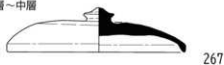
上層~下層出土遺物(第72図・図版70)

須恵器(271・272) 271は杯B蓋で、天井部外面に擬宝珠状のツマミがある。口縁部にカエリがなく、口縁部は断面三角形状に小さく直立する。天井部外面は回転ヘラケズリ、天井部内面は不定方向ナデ、他は回転ナデである。272は短頸壺である。体部は肩が張る扁球形で、口縁部は直立して立ち上がる。高台はやや高く、端部が外側に張り出す。外面は体部下半の大半と肩部に回転ヘラケズリを施す。内面は回転ナデ後体部下半はナデである。口縁部から肩部にかけての外面と底部内面に降灰があり、蓋を伴わないことがわかる。底部外面にヘラ記号があり、体部外面に別個体が融着する。

中層~下層出土遺物(第72図)

須恵器(273) 杯B蓋で、天井部外面に扁平な擬宝珠状ツマミがあり、口縁部にカエリを有する。口縁部とカエリの高さは等しい。天井部外面回転ヘラケズリ、天井部内面不定方向ナデ、他は回転ナデである。

上層～中層



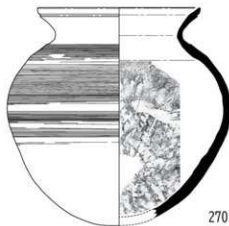
267



268



269



270

かく乱



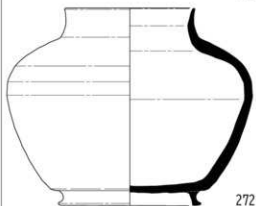
275



上層～下層



271



272



中層～下層



273

下層



274



第72図 大溝上層～下層出土遺物実測図 (S=1/3)

下層出土遺物（第72図・図版70）

須恵器（274） 無台杯で、口縁端部をわずかに欠損するほかは完形品である。底部外面はヘラ切りで、底部内面は不定方向ナデ、他は回転ナデである。底部外面にヘラ記号がある。中層出土の190と胎土・調整・色調やヘラ記号が類似する。

かく乱出土遺物（第72図）

須恵器（275） 杯H身の口縁部片で、内外面回転ナデである。

（3）その他の遺物

1号墳周辺出土遺物（第73図・図版70）

石製品（276～279） 276～278は石鏃で、276は安山岩製、277・278は黒曜石製である。279は磨石で、凝灰岩製と考えられる。

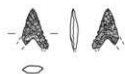
2号墳周辺出土遺物（第73図・図版70）

石製品（280～284） 280は玄武岩製大形蛤刃石斧の破片である。281は安山岩製の石匙である。282・283は安山岩製の二次加工剥片である。284は姫島産黒曜石製の石鏃である。

1号墳周辺



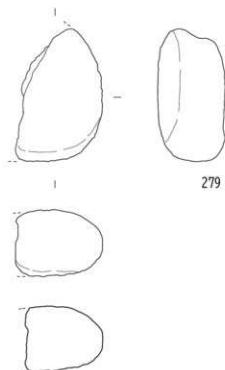
276



277

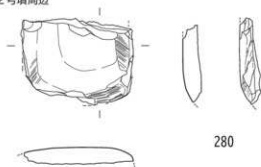


278

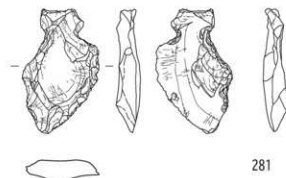


279

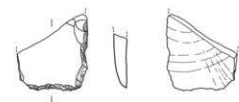
2号墳周辺



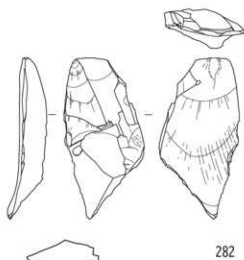
280



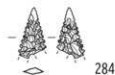
281



283



282



284



第73図 その他の遺構出土遺物実測図 (S=1/2)

表1 唐山遺跡第1次調査出土遺物観察表①

遺物 番号	種類	器種	出土地点	法量 (cm・g) ①口縁②底縁③底径 ④高⑤最大径 ※(表・底面) (残存部)	形態・技法・文様の特徴	A: 胎土 B: 焼成 C: 色調	備考
1	須恵系	甕	周溝埋土	② (4.75)	胴部外面カキメ・内面同心円文当て具板 他は回転ナデ	A: 2mm 以下の白色砂粒。微細な黒色粒を含む B: やや良 C: 内外2.5T7/灰白色	
2	須恵系	甕	周溝埋土	② (7.05)	外面腰子叩き。一部カキメ 内面同心円 文当て具板	A: 微細な白色砂粒を少し含む B: やや良 C: 内外5.5T6/2 灰褐色 外5T6/1灰色	60と同一個体の可能性
3	須恵系	杯蓋	石室内埋土	① (13.2) ②3.4	天井部外面回転ヘラ削り 他は回転ナデ 天井部外面ヘラ記号	A: 2mm 以下の白色砂粒を含む B: 良好 C: 内外5.4T 灰褐色 外5.4T/1黄灰色～5T/暗灰色	外面火傷
4	須恵系	杯蓋	石室内	①12.6 ②3.5	天井部外面回転ヘラ削り 他は回転ナデ 天井部外面ヘラ記号	A: 微細な白色砂粒。長石を含む B: 良好 C: 内外5/ 灰褐色 外10T5/1褐色～10T5/1黒色	外面全面に火傷
5	須恵系	甕	石室内埋土	② (10.8)	外面腰子叩き。一部カキメ 内面同心円 文当て具板	A: 1mm 程度の白色砂粒。長石を含む B: 良好 C: 内外5/ 灰褐色 外5T/灰白色～5T/暗灰色	
6	ガラス 製品	丸玉	石室内北角付近	径1.05 孔径0.32 厚0.67 重1.6	—	C: 半透明青緑色 (部分的に白濁する)	
7	銅製品	耳環	石室内北限付近	外径2.83 内径1.48 厚0.82 重15.9	—	—	銅芯に金箔を貼り 付ける
8	銅製品	耳環	石室内埋土	外径2.89 内径1.54 厚0.83 重16.7	—	—	銅芯に金箔を貼り 付ける
9	鉄製品	刀子	石室内	残存長9.15 最大幅2.0 厚0.5 重18.1	—	—	基部に木質の跡?
10	須恵系	杯蓋	周溝埋土	② (3.1)	天井部外面回転ヘラ削り。他は回転ナデ 外面ヘラ記号?	A: 微細な白色砂粒を含む B: 良好 C: 内外3T/暗灰色 外5.4T/灰色～5T/暗灰色	3と同一個体の可能性
11	須恵系	杯蓋	溝内	①9.0 ②2.2 受部径10.8	天井部外面ヘラ切り未調整 天井部内面多 方向のナデ 他は回転ナデ	A: 微細な白色砂粒を含む B: やや良 C: 内外5.2T6/褐色 外5T5/2灰褐色～5T6/1褐色	
12	須恵系	杯蓋	溝内	①9.1 ②2.85 受部径11.1	天井部外面ヘラ切り未調整 天井部内面多 方向のナデ 他は回転ナデ	A: 3mm 以下の白色砂粒を含む B: やや良 C: 内外5.5T6/3 に3T/灰色 外10T7/3に3T/黄褐色	
13	須恵系	杯身	周溝埋土	① (10.7) ②3.75 受部径 (12.6)	底部外面回転ヘラ削り 他は回転ナデ 底 部外面ヘラ記号	A: 微細な白色砂粒を少し含む B: 良好 C: 内外5.3T 灰褐色 外5T6/1灰色	重ね焼き痕跡 外面腐食
14	須恵系	杯身	溝内	①10.15 ②3.4 ③6.75	底部外面ヘラ切り未調整 底部内面多方向 のナデ 他は回転ナデ	A: 微細な白色砂粒を含む B: 良好 C: 内外5.5T5/1黄 灰色～5.4T/灰色	歪みあり
15	須恵系	杯身	溝内	①9.95 ②3.35 ③6.9	底部外面ヘラ切り後ナデ 底部内面多方向 のナデ 他は回転ナデ	A: 微細な白色砂粒を含む B: 良好 C: 内外5.4T/灰色 外 5T6/1灰色～5T/暗灰色	外面腐食
16	須恵系	甕	溝内	② (8.4)	外面腰子叩き。一部カキメ 内面同心円 文当て具板	A: 2mm 以下の白色砂粒を含む B: やや良 C: 内外5T5/1 褐色 外5T5/2灰褐色	
17	須恵系	甕	炭道敷石間	② (9.15)	外面腰子叩き。一部カキメ 内面同心円 文当て具板	A: 10mm 程度の長石・2mm 以下の白色砂粒・長石。石灰を 含む B: やや良 C: 内外5.5T6/1灰褐色	
18	土師系	杯身	溝内	①11.7 ②3.75	底部外面平持ちヘラ削り痕跡 内外面厚 減により断面変れるがナデの痕跡。ミガキ調 整の可能性?	A: 微細な砂粒をごく少量。金雲母微粒を含む B: 良好 C: 内外5T7/暗褐色	
19	土師系	杯身	溝内	①10.9 ②4.4	底部外面平持ちヘラ削り痕跡 内外面厚 減により断面変れるがナデの痕跡。ミガキ調 整の可能性?	A: 微細な砂粒をごく少量。金雲母微粒を含む B: 良好 C: 内外5T7/暗褐色	
20	銅製品	耳環	溝内	外径2.51 内径1.47 厚0.78 重13.6	—	—	銅芯に金箔を貼り 付ける
21	鉄製品	鉄鍬	溝内	残存部長5.1 鍬身部幅2.25 基部残存長1.95 基部幅0.8 厚0.25 重11.9	—	—	別個体が積層する
22	鉄製品	鉄鍬	溝内	残存部長4.95 鍬身部幅2.85 基部残存長4.25 基部幅0.75 厚0.45 重16.5	—	—	複数の別個体が積 層する
23	鉄製品	鉄鍬	炭道敷石間	残存長13.3 鍬身部幅0.9 鍬部幅0.5 厚0.4 重12.9	—	—	
24	鉄製品	鉄鍬	溝内	残存長8.3 最大幅0.75 厚0.7 重14.9	—	—	
25	鉄製品	鉄鍬	炭道敷石間	残存長4.65 鍬身部幅0.8 鍬部幅0.45 厚0.35 重2.6	—	—	
26	鉄製品	鉄鍬	炭道敷石間	残存長5.3 鍬身部幅0.9 厚0.7 重6.1	—	—	
27	鉄製品	鉄鍬	溝内	残存長8.4+ 最大幅0.5 厚0.4 重7.1	—	—	別個体が積層する
28	鉄製品	鉄鍬	炭道敷石間	残存長2.15 最大幅0.4 厚0.35 重0.9	—	—	
29	鉄製品	鉄鍬	炭道出入口付近	残存長5.6 最大幅0.5 厚0.4 重4.9	—	—	別個体が積層して いた痕跡
30	鉄製品	鉄鍬	炭道敷石間	残存長8.2+ 最大幅0.5 厚0.4 重4.8	—	—	別個体の破片が積 層する
31	鉄製品	鉄鍬	炭道敷石間	残存長8.7 最大幅0.6 厚0.35 重7.5	—	—	
32	鉄製品	刀子	不明	残存長5.8 刀部残存幅1.8 基部幅1.05 厚0.35 重5.0	—	—	
33	須恵系	杯蓋	周溝埋土	② (1.2)	天井部外面回転ヘラ削り 他は回転ナデ	A: 2mm 以下の白色砂粒を含む B: 良好 C: 内外5T6/1 灰褐色	

表2 唐山遺跡第1次調査出土遺物観察表②

遺物番号	種類	器種	出土地点	法量 (cm・g) ①口径②底径③底径 ④高⑤最大径 ※(重量) (残存率)	形態・技法・文様の特徴	A:胎土 B:焼成 C:色調	備考
34	須臾器	杯蓋	墓道埋土	② (2.3)	内外面回転ナデ	A: 微細な白色砂粒を含む B: 良好 C: 内外2.5/3/1黄灰色	口縁部小片
35	須臾器	杯蓋	墓道埋土	① (12.4) ② (2.3)	内外面回転ナデ	A: 微細な白色砂粒。長石を含む B: 良好 C: 内3/3/1黄灰色 外5/14/1灰色	微白として使用された可能性?
36	須臾器	杯蓋	墓道埋土	①12.05 ② (4.5)	天井部外面へう切り痕ナデ。回転へう割り 天井部内部多方向のナデ 他は回転ナデ 天井部外面へう記号	A: 3mm以下の白色砂粒。微細な黒色粒を含む B: 良好 C: 内36/1灰色 外10/16/1黄褐色 外5/15/1灰色 外5/17/1灰色	
37	須臾器	杯蓋	墓道埋土	① (12.0) ②0.15	天井部外面回転へう割り 他は回転ナデ 天井部外面へう記号	A: 微細な白色砂粒。黒色粒を含む B: 良好 C: 内34/1灰色 外2.5/15/1黄灰色 外3/16/1灰色	外面欠損
38	須臾器	杯蓋	墓道埋土	① (12.8) ② (3.1)	内外面回転ナデ	A: 微細な白色砂粒。黒色粒を含む B: やや良 C: 内外7.5/16/1黄褐色 外2.5/15/3/1黄褐色	口縁部へ体部中位まで残存
39	須臾器	杯蓋	墓道埋土	①11.6 ②4.45	天上部外面へう切り痕ナデ 天井部内部ナデ 他は回転ナデ 天井部外面へう記号	A: 2mm程度の白色砂粒 B: 不良 C: 内10/17/1灰白色 外10/18/3/1黄褐色 外2.5/17/1灰白色 外2.5/17/2灰黄色	
40	須臾器	杯蓋	墓道埋土	① (11.65) ②4.3	天井部外面へう切り痕ナデ。へう記号 天井部内部ナデ 他は回転ナデ	A: 3mm以下の白色砂粒。長石を含む B: やや良 C: 内外7.5/15/2灰褐色	
41	須臾器	杯身	墓道埋土	② (1.8)	内外面回転ナデ	A: 微細な白色砂粒を含む B: 良好 C: 内外7.5/16/1灰色	口縁部小片
42	須臾器	杯身	墓道埋土	② (2.4)	内外面回転ナデ	A: 微細な白色砂粒を含む B: 良 C: 内外2.5/15/2黄褐色	口縁部小片
43	須臾器	杯身	墓道埋土	② (2.8)	内外面回転ナデ	A: 微細な白色砂粒を含む B: 良 C: 内外2.5/16/2灰黄色	口縁部小片
44	須臾器	杯身	墓道埋土	① (10.8) ②0.5 ③ (7.6) 受部径 (12.6)	底部外面回転へう割り。底部内部ナデ は回転ナデ 底部内部へう記号	A: 3mm以下の白色砂粒。長石を含む B: 良好 C: 内36/1灰色 外7.5/14/1灰白色 外5/16/1灰色	煮ねぎりの痕跡
45	須臾器	杯身	墓道埋土	① (10.95) ②0.2 ③ (6.65) 受部径 (12.6)	底部外面回転へう割り 底部内部ナデ は回転ナデ 底部外面へう記号	A: 2mm以下の白色砂粒。長石を含む B: 良好 C: 内35/1灰色 外5/16/1灰色	口縁部端は打ち欠く
46	須臾器	杯身	墓道埋土	①10.05 ②0.7 ③6.4 受部径12.3	底部外面回転へう割り 他は回転ナデ 底部外面へう記号	A: 4mm以下の白色砂粒。長石をやや多く含む B: 良 C: 内外5/15/1灰色 外2.5/16/1黄灰色	
47	須臾器	杯身	墓道埋土	①9.65 ②3.65 受部径11.4	底部外面回転へう割り。へう記号 底部内部ナデ 他は回転ナデ	A: 3mm以下の白色砂粒。長石を含む B: 良好 C: 内外10/15/1灰色 外4/16/1灰色	
48	須臾器	杯身	墓道埋土	①10.7 ②3.65 ③6.35 受部径12.8	底部外面回転へう割り 他は回転ナデ 底部外面へう記号一部残存	A: 3mm以下の白色砂粒。長石を含む B: 良好 C: 内33/1黄褐色 外3/12/1灰白色 外3/13/1黄褐色	
49	須臾器	杯身	墓道埋土	① (11.7) ②0.4 受部径 (13.8)	底部外面回転へう割り 他は回転ナデ 底部外面へう記号	A: 微細な白色砂粒を少し含む B: 良好 C: 内34/1灰色 外3/13/1黄褐色 外5/17/1灰白色	外面隆反 口縁部に一部蓋の口縁が着着
50	須臾器	杯身	墓道埋土	① (12.0) ②2.8 ③ (9.0) 受部径 (13.8)	底部外面手持ちへう割り 底部内部ナデ 他は回転ナデ	A: 4mm程度の微細な白色砂粒を含む B: 良好 C: 内外5/17/1灰白色 外3/15/1灰色	外面微いへう状工具による調整あり
51	須臾器	高杯	墓道埋土	② (2.6)	内外面白色砂粒を含む B: 良好 C: 内10/17/2/1黄褐色 外2.5/13/1黄褐色	内面隆反 焼け歪みあり	
52	須臾器	高杯	墓道埋土	① (11.4) ② (3.15)	内外面回転ナデ 杯部中位に1条の沈線が走る	A: 微細な白色砂粒を含む B: 良 C: 内外2.5/16/2灰黄色	
53	須臾器	高杯	墓道埋土	② (3.6)	脚部外面回転ナデ。シボリ模 内面シボリ模ナデ	A: 微細な白色砂粒を少し含む B: 良好 C: 内34/1灰色 外2.5/16/1黄灰色 外5/14/1灰色	底部のみ残存
54	須臾器	高杯	墓道埋土	② (1.65)	内外面回転ナデ	A: 微細な黒色粒をごく少量含む B: 不良 C: 内外7.5/17/1黄褐色	脚部破片
55	須臾器	罐	墓道埋土	② (11.7) ⑤8.1 頸部径2.9	外面回転へう割り。シボリ模。回転ナデ。 連続刻文。2条の沈線 内面回転ナデ。 シボリ模 体部穿孔あり 頸部外面へう記号	A: 2mm以下の白色砂粒を含む B: 良好 C: 内5/16/1灰色	
56	須臾器	平瓶	墓道埋土	① (7.9) ② (4.75)	内外面回転ナデ	A: 微細な白色砂粒。長石を含む B: 良好 C: 内35/1灰色 外3/16/1黄褐色 外5/16/1灰色	口縁部のみ残存
57	須臾器	平瓶	墓道埋土	① (6.8) ② (14.2) 頸部径 (4.3)	底部外面手持ちへう割り 肩部へ部中位 外部キメ 他は回転ナデ 底部外面へう 記号一部残存	A: 微細な白色砂粒を含む B: 1/4や良 C: 内5/17/4/1黄褐色 外7.5/17/4/1黄褐色 外2.5/17/4/1黄褐色	
58	須臾器	甕?	墓道埋土	② (3.4)	外面直状文。2条の凹線 内面隆反・厚線 により調整不明	A: 微細な白色砂粒を含む B: 良好 C: 内2.5/14/1黄褐色 外2.5/16/1黄褐色 外5/14/1灰色	内面隆反 直状文小片
59	須臾器	甕	墓道埋土	② (2.8)	肩部外面コナデ。縦格子叩き 頸部へ部 内部ナデ。同心円状刻文	A: 2mm以下の白色砂粒を含む B: 良 C: 内10/18/2/1黄褐色 外10/15/1黄褐色	頸部隆反部叩き又は筋み?
60	須臾器	甕	墓道埋土	② (9.4)	外面縦格子叩き。一部キメ 内面同心円 状刻文	A: 2mm以下の白色砂粒を少し含む B: やや良 C: 内7.5/18/2/1黄褐色 外7.5/17/3/1黄褐色	
61	須臾器	甕	墓道埋土	② (7.4)	外面縦格子叩き。一部キメ 内面同心円 状刻文	A: 微細な白色砂粒を含む B: 良好 C: 内35/1灰色 外5/17/1灰白色 外5/17/1黄褐色	
62	須臾器	甕	墓道埋土	② (12.0)	外面縦格子叩き 内面平行直状刻文	A: 3mm以下の白色砂粒。長石を含む B: 良 C: 内10/18/2/1黄褐色 外10/18/2/1黄褐色 外5/17/2/1黄褐色	
63	土師器	甕	墓道埋土	② (4.3)	内外面磨面はれていてが研磨痕が見られる 3条の沈線あり	A: 微細な砂粒。長石を少し含む B: 良好 C: 内7.5/17/4/1黄褐色 外5/17/2/1黄褐色	
64	土師器	高杯	墓道埋土	② (1.2)	杯部外面微いキメ 杯部内部ナデ	A: 微細な黒色・褐色粒を含む B: 良好 C: 内外5/17/1黄褐色	
65	土師器	高杯	墓道埋土	② (2.3) 脚部径 (12.8)	内外面ナデ	A: 微細な白色砂粒。褐色粒を含む B: 良 C: 内外7.5/17/6/1黄褐色 外7.5/13/1黄褐色	脚部部一部黒腐

表3 唐山遺跡第2次調査出土遺物観察表①

遺物 番号	種類	器種	出土地点	法量 (cm・g) ①口径②底径③底径 ④高⑤口径大径 ※(底径)・残存径	形態・技法・文様の特徴	A: 胎土 B: 焼成 C: 色調	備考
66	須恵器	甕	1号墳1区墳内土	①(33.8) ②(38.6) ⑤(58.4)	底部外面磨き目付 底部内面カキメ 頸部内面ヨコハテ 体内内面同心円文当り 当り具現	A: 密 1mm 程度の長石、石英を含む B: 良好 C: 内 5P85/1灰白色～5P85/1青灰色 外5P85/1青灰色、一部 5P82/1暗黄灰色	
67	須恵器	甕	1号墳1区墳内土 地上層	①(33.5) ②63.3 ⑤(54.2) 頸部径(21.7)	口頸部外面へラ磨き斜線文、2条の沈線 底部外面磨き目付 体内内面同心円文 当り具現	A: 1～5mm の長石、石英を含む B: 良好 C: 内5P85/1 青灰色 外5P85/1青灰色～5P83/1暗黄灰色	外面磨灰 底部外面に別個体付着 新緑色模様の可能性
68	須恵器	甕	1号墳1区墳内土 地上層	①(11.8) ②16.55 ③17.3	頸部外面平行印付、カキメ 頸部内面当り 具現 他は回転ナデ 外面へラ記号?	A: 2mm 以下の白色砂粒を多く含む B: 良好 C: 内 5P7/ 灰白色～5P5/灰白色 外5P8/灰白色～5P6/灰白色	
69	須恵器	甕	1号墳4区墳内土 虎部道外側盛土	①(11.8) ②口縁部(3.4) 底部(4.6)	外面磨き目付後一帯ハケメ状調整 内面 同心円文当り具現 一部放射状を呈す	A: 1mm 以下の長石、石英を含む B: 良好 C: 内 5P7/ 灰白色～5P87/1明黄灰色 外5P3/暗灰色～5P6/灰白色	
70	土師器	甕	1号墳4区 墳内盛土1層	①(21.0) ②23.0+α	底部外面ハケメ、指ササエ 底部内面へ ラ削り、ヨコナデ 口縁部外面磨き・内 面ハケメ後ナデ	A: 微細～3mm の褐色粒、長石、石英、雲母を含む B: 良 好 C: 内外10P87/4Cにのみ黄褐色～10P88/4浅黄褐色	口縁部～底部外面 に黒泥
71	土製品	土玉	1号墳4区・4区 墳内盛土	底径3.8 厚2.7 孔径0.5 底40.1	ナデ成形	A: 2mm 以下の長石、石英を少し含む B: 良好 C: 10P83/1 浅黄褐色～10P87/2Cにのみ黄褐色、10P72/1黒色	結核部の形態に近い
72	鉄製品	刀子?	1号墳4区 墳内盛土2・3層	残存長2.8 残存幅1.7 厚1.1 重7.7			刀子の茎の可能性
73	須恵器	杯身	1号墳墳内土 周溝盛土	①(15.1) ②(3.3) 受部径(17.4)	内外面回転ナデ	A: 微細な白色砂粒を含む B: 良好 C: 内10P6/灰白色 ～10P5/1灰白色 外10P5/灰白色～5P2/灰白色	
74	須恵器	杯身	1号墳墳内土 周溝(赤褐色土)	①(9.8) ②0.75 受部径(14.3)	底部外面回転ナデ削り 他は回転ナデ 外面へラ記号	A: 1mm 以下の長石、石英を少し含む B: 良好 C: 内 5P5/灰白色～5P4/灰白色 外5.5P6/2灰白色、10P6/1灰白色～ 5P6/灰白色	受部に別個体の口 縁部付着
75	須恵器	甕	1号墳墳内土 周溝(黒褐色土)	②(4.4)	口縁部外面磨灰状 他は回転ナデ	A: 2mm 以下の石英を少し含む B: 良好 C: 内外10P6/1 灰白色～5P6/灰白色	
76	須恵器	甕	1号墳4区周溝盛土 (黒褐色土)	①(18.6) ②口縁～肩部 (5.6) 体部(16.6) ⑤(25.8)	底部外面磨き目付、一部カキメ 体内 内面同心円文当り具現 他は回転ナデ	A: 2mm 以下の長石、石英を多く含む B: 良好 C: 内 2.5P88/2灰白色 外2.5P6/1黄灰色～5P5/灰白色	
77	須恵器	杯身	1号墳4区周溝	①(12.7) ②(4.4) ⑤(8.6)	底部外面回転ナデ削り 底部内面不定方 向ナデ 他は回転ナデ 外面へラ記号	A: 微細な白色砂粒をわずかに含む B: 良好 C: 内外 10P6/1灰白色～10P5/1灰白色、5P5/灰白色	
78	須恵器	盃	1号墳1区溝側 地上土層	②(6.2) ③(9.4)	体部は球形 肩部に2条の沈線 最大 径の位置に磨灰状文	A: 微細な白色砂粒をわずかに含む B: 良好 C: 内 10P7/1灰白色～5P5/灰白色 外10P6/1灰白色～5P4/灰白色	内面磨灰、自然 剥離
79	須恵器	杯身	1号墳東側谷 表剥き土	③(3.7)	底部外面回転ナデ削り 底部内面ナデ 他は回転ナデ	A: 微細～3mm の長石、石英を含む B: 良 好 C: 内外10P6/1灰白色、5P6/灰白色～5P5/灰白色	裏面わずかに残 存
80	須恵器	杯蓋	1号墳石室東壁 中央部埋土	①(16.4) ②(2.6) 受部径(12.2)	天井部外面へラ削り後ナデ 他は回転ナ デ	A: 微細～2mm の長石、石英を含む B: 甘い C: 内 5P86/4Cにのみ黄褐色 外5P86/6暗褐色～5P85/4Cにのみ黄褐色	長軸に平行な木質 が残存
81	鉄製品	鉄釘	1号墳土室初層床面	長4.9 幅0.7 厚0.6 重4.1	断面方形・長方形		
82	鉄製品	鉄釘	1号墳土室初層床面	長4.3 幅0.4 厚0.35 重3.3	断面方形・長方形		
83	鉄製品	鉄釘	1号墳土室初層床面	長8.9 幅0.6 厚0.5 重10.1	断面方形・長方形 一方の端部を折り曲 げて頭部とする		長軸に平行な木質 が残存
84	鉄製品	鉄釘	1号墳土室初層床面	長8.5 幅0.45 厚0.35 重5.6	断面方形・長方形 一方の端部を折り曲 げて頭部とする		
85	鉄製品	鉄釘	1号墳土室初層床面	長7.3 幅0.55 厚0.55 重4.9	断面方形・長方形 一方の端部を折り曲 げて頭部とする		
86	鉄製品	鉄釘	1号墳土室初層床面	長7.1 幅0.5 厚0.45 重9.0	断面方形・長方形 一方の端部を折り曲 げて頭部とする		一部長軸に直行す る木質が残存
87	須恵器	高杯	1号墳西溝 床面盛土 No.3	①7.85 ②8.2 脚部径7.0	頸部～胴部内面少り痕 他は回転ナデ 胴 部外面磨灰の跡のみ条線	A: 微細～3mm の長石、石英を含む B: 良好 C: 内外 5P6/灰白色～5P83/1暗黄灰色	器のみ
88	須恵器	甕白付台	1号墳西溝床面盛土 No.1 No.2	①12.8 ②15.2 ③12.1 脚部径12.1	頸部～胴部中央位外三角交差、カキメ 胴部下外面回転ナデ削り 底部内面不 定方向ナデ 他は回転ナデ	A: 密 1～2mm の白色砂粒を多く含む B: 良好 C: 内 外10P82/1黒色、10P85/1黄灰色、7.5P85/3Cにのみ黄褐色	内外面磨灰 外周一部別個体付着 新緑色模様の可能性
89	土師器	棒状土製品	1号墳東溝部 (前庭部)床面盛土	残存長3.8 幅2.2 厚1.2	ナデ成形	A: 1mm 以下の白色砂粒、長石、金雲母を多く含む B: 良 好 C: 10P87/6明黄灰色～10P86/4浅黄褐色	把持の可能性
90	須恵器	杯蓋	1号墳4区 前庭部東溝盛土	①12.7 ②0.9 つまみ径2.8 つまみ重0.9	天井部外面回転ナデ削り、天井部内面不 定方向ナデ 他は回転ナデ	A: 1～3mm の長石、石英を多く含む B: 良好 C: 内外 5P5/灰白色～5P85/1青灰色	外や焼き型
91	須恵器	杯蓋	1号墳4区 前庭部東溝盛土	①(12.6) ②(2.0) 受部径(15.7)	内外面回転ナデ	A: 微細～3mm の白色砂粒、石英をわずかに含む B: 良 好 C: 内10P6/1灰白色～5P5/灰白色 外10P6/1灰白色	
92	須恵器	小型甕	1号墳4区 前庭部東溝盛土	①13.1 ②14.9 ③16.4	頸部外面平行印付ナデ 体内内面下平 放射状当り具現 他は回転ナデ	A: 1～3mm の白色砂粒を多く含む B: 良好 C: 内外 5P4/灰白色	
93	須恵器	小型甕	1号墳4区 前庭部東溝盛土	①(14.4) ②19.0 ③18.9 頸部径11.4	頸部外面磨灰状調整 体部上へ中心力カ キメ、下平は平行印付 体内内面同心円文 当り具現 他は回転ナデ	A: 微細な白色砂粒、黒色粒を含む B: やや甘い C: 内 10P86/2灰白色 外7.5P85/2灰白色～10P85/1黄灰色	
94	須恵器	甕	2号墳1区 墳内盛土上層	①(22.6) ②(6.0)	頸部外面磨き目付 他は回転ナデ	A: 3mm 以下の長石を少し含む B: 良好 C: 内 5P7/灰 白色～7.5P6/2灰白色 外5P7/1灰白色～10P73/1オ リーブ黒色	内面磨灰
95	土師器	甕	2号墳1区 北墳内盛土中層	①(11.6) ②(7.0)	外面ハケメ 内面へラ削り?摩滅の為に 不明瞭	A: 2mm 以下の白色砂粒を多く含む B: 良 C: 内 5.5P86/4暗褐色～5.5P83/1黒褐色 外5.5P83/1黒褐色～ 5P73/1黒褐色	

表4 唐山遺跡第2次調査出土遺物観察表②

遺物番号	種類	器種	出土地点	法量 (cm・g) ①口径②器高③底径 ④高台径⑤最大径 ※(底径) <残存径>	形態・技法・文様の特徴	A:胎土 B:焼成 C:色調	備考
96	鉄製品	鉄線	2号墳Ⅰ区北墳丘 盛土上層	残存長11.9 幅3.7 基幅0.6 重38.8			
97	鉄製品	鉄線	2号墳Ⅰ区北墳丘 盛土中層	残存長4.0 幅2.6 基幅0.6 重5.5			
98	須恵器	甕	2号墳Ⅰ区 墳丘内	① (11.8) ② (11.5)	胴部外面平行引き後方キレ。内面同心円 文当て具痕。他は回転ナデ	A:密 濃緑~2.5mmの長石や多く含む B:良 C:内 SP85/青灰色 外SP86/青灰色	内外面より自然釉
99	須恵器	甕	2号墳Ⅰ区南墳丘 盛土基底部付近	① (11.8) ② (3.2)	口頸部内外面回転ナデ	A:濃緑な石をわずかに含む B:良好 C:内外SP 灰色~SP85/青灰色	底面あり
100	須恵器	小型甕	2号墳Ⅰ区墳丘内	① (16.7) ② (20.5)	体部外面磨き切。沈線が流る。回転 ナデ 体部内面同心円文当て具痕。回転 ナデ 外面へう記号か?	A:濃緑~4mm以下の白色砂粒。石を含み B:良好 C:内外10/15/灰色~SP85/青灰色。N/暗灰色	底面は穿孔する?
101	須恵器	杯蓋	2号墳Ⅰ区墳丘寄り 黒褐色土・灰褐色土	① (12.4) ② (3.6)	天井部外面回転へう削り。天井部内面ナ デ 他は回転ナデ	A:濃緑な長石。石を少し含む B:良好 C:内外 10/17/4C:黄褐色~10/18/1暗灰色	
102	須恵器	杯蓋	2号墳Ⅰ区墳丘寄り 黒褐色土・灰褐色土	① (11.6) ② (2.9)	天井部外面回転へう削り 天井部外面に へう記号 他は回転ナデ	A:2mm以下の長石。石を少し含む B:良好 C:内 2.5/5/1/灰褐色~5/14/1/黄灰色 外14/1/黄褐色/暗 褐色	
103	須恵器	杯蓋	2号墳Ⅰ区墳丘寄り 黒褐色土・灰褐色土	① (11.4) ② 3.6 受部径 (14.4)	底部外面回転へう削り 他は回転ナデ 底部外面へう記号	A:濃緑な長石。石を含み B:やや不良 C:内外 7.5/17/1/灰褐色~7.5/18/1/黄褐色。10/18/2/灰褐色	
104	須恵器	杯蓋	2号墳Ⅰ区 黒褐色土・灰褐色土	① (12.6) ② 3.2 受部径 (13.4)	底部外面回転へう削り 底部内面不定方 向ナデ 他は回転ナデ 外面へう記号	A:3mm以下の長石。石を少し含む B:やや不良 C: 内10/18/2/灰褐色 外7.5/17/1/灰褐色~15/1/暗 褐色	
105	須恵器	杯蓋	2号墳Ⅰ区平部部 (黒褐色土)	① (10.4) ② (2.2) 受部径 (11.8)	天井部外面回転へう削り後ナデ 他は回 転ナデ 外面へう記号	A:2mm以下の長石。石を少し含む B:良好 C:内 外15/1/灰色~5/15/1/黄灰色。N/暗灰色	
106	須恵器	杯蓋	2号墳Ⅰ区 南開口部付近	② C.4	内外面回転ナデ	A:濃緑な長石を多く含む B:良好 C:内10/15/1/灰 褐色~14/1/灰色 外10/16/1/灰色~14/1/灰色	
107	須恵器	杯蓋	2号墳Ⅰ区 南開口部付近	① (11.4) ② 2.2	天井部外面へう切り後回転ナデ 他は回 転ナデ 天井部外面へう記号	A:濃緑な石をわずかに含む B:良好 C:内外16/ 1/灰色~13/1/灰色。SP/4/暗褐色	
108	須恵器	平瓶	2号墳Ⅰ区 南開口部付近	② C.0 頸部径 (5.0)	頸部~胴部外面磨減の為調整不明 内面 回転ナデ	A:濃緑な長石を少し含む B:良好 C:内7.5/14/2/灰 褐色 外SP87/暗褐色。7.5/17/1/オレンジ褐色	胴部~頸部のみ
109	須恵器	高杯	2号墳Ⅰ区 8センチ 黒褐色土下層	② (6.9)	胴部外面回転ナデ 内面シボり痕。回転 ナデ	A:密 濃緑な石を含む B:良好 C:内SP87/暗青灰 色 外SP83/暗青灰色。N/灰白色	胴部のみ残存
110	銅製品	耳環	2号墳Ⅰ区床面	外径2.78 内径2.5 厚0.79 重15.8			銅芯部管状銅金 %。116とセットか
111	金製品	不明	2号墳Ⅰ区床面	長2.15 幅0.3 厚0.3 重0.5	芯材が見えないくらい密閉なく赤が透か れる		銅製品の可能性?
112	須恵器	杯蓋	2号墳Ⅰ区床 排水溝内土	② (1.25)	外面へう切り 内面回転ナデ	A:やや密 濃緑~2mmの長石。石を含む B:不良 C:内外5/16/暗褐色	
113	須恵器	杯蓋	2号墳Ⅰ区床 排水溝内土	① (11.8) ② (3.8) 受部径 (14.8)	底部外面回転へう削り 他は回転ナデ 底部外面へう記号	A:密 濃緑~2mmの長石。石を含む B:良好 C:内 部SP83/暗褐色 外SP86/1/黄灰色~5/15/1/黄灰色	
114	須恵器	甕	2号墳Ⅰ区床 排水溝内土	② C.7	胴部外面回転へう削り。回転ナデ 内面 回転ナデ	A:密 1mm以下の長石。石を含む B:良好 C:内 部SP83/暗褐色 外SP83/青灰色	
115	銅製品	耳環	2号墳Ⅰ区排水溝内	外径 (2.35) 内径 (1.55) 厚0.35 重1.1			銅芯部管状銅金 %。118とセットか
116	銅製品	耳環	2号墳Ⅰ区排水溝内	外径2.39 内径1.9 厚0.64 重10.1			銅芯部管状銅金 %。118とセットか
117	鉄製品	帯鈿具	2号墳Ⅰ区排水溝内	長3.5 幅1.35 厚0.25 重6.7			鉄地銀張り銀線 を打つ
118	鉄製品	帯鈿具	2号墳Ⅰ区床 排水溝 (前方部)	長3.4 幅2.2 厚0.35 重6.3			鉄地銀張り銀線 を打つ
119	石製品	切子玉	2号墳Ⅰ区前方	最大径1.3 長1.3 重2.8 孔径0.3		C:透明	水晶磨 山形水晶玉
120	銅製品	耳環	2号墳Ⅰ区前方	外径 (2.3) 内径 (1.6) 厚0.37 重1.6			銅芯部管状銅金 %。115とセットか
121	銅製品	耳環 (破片)	2号墳Ⅰ区前方北東 角奥込め土下層	残存長2.3 厚0.4 重1.6			銅芯部管状銅金
122	須恵器	高台付杯	2号墳Ⅰ区近所以降 使用面下層土	② (1.4) ③ (6.5)	内外面回転ナデ	A:密 1mm以下の長石。石を含む B:良 C:内 SP85/1/青灰色~SP84/暗褐色 外SP83/1/青灰色~SP83/ 暗褐色	
123	土師器	杯	2号墳Ⅰ区近所以降 使用面下層土	① (16.4) ② 3.0+α ③ (3.2)	底部外面へう切り後ナデ 底部内面ナ デ 他は回転ナデ	A:濃緑~2mmの長石。石。炭。雲母を含む B:良 C: 内10/18/4/黄褐色 外10/17/4C:黄褐色	
124	磁器	白磁瓶	2号墳Ⅰ区近所以降 使用面下層土	① (15.3) ② 8.5 ③ 6.9	内面~底台付近まで施釉 見込みに磨 削り出し高台	A:焼良 B:良 C:施SP8/1/灰白色~10/17/1/暗緑灰 色施2.5/18/2/灰白色 胎土SP/1/灰白色	太宰府分館白磁瓶 V-3a類
125	須恵器	杯蓋	2号墳Ⅰ区床面	① 11.8 ② 3.5	天井部外面回転へう削り。内面不定方 向ナデ 他は回転ナデ 天井部外面へう 記号	A:1~2mmの白色砂粒を多く含む B:良好 C:内外 14/1/灰色	
126	須恵器	杯蓋	2号墳Ⅰ区床面	① 12.2 ② 3.8	天井部外面回転へう削り 天井部内面ナ デ 他は回転ナデ 外面へう記号	A:1~3mmの白色砂粒を多く含む B:良好 C:内外 14/1/灰色 一部17.5/14/4褐色	
127	須恵器	杯蓋	2号墳Ⅰ区床面	① 11.9 ② 3.8	天井部外面回転へう削り 天井部内面不 定方向ナデ 他は回転ナデ 外面へう 記号	A:1~4mmの白色砂粒を多く含む B:良好 C:内外14/ 1/灰色 外14/1/灰色 一部SP85/6/明褐色	外面鉄サビ付着

表5 唐山遺跡第2次調査出土遺物観察表③

遺物番号	種類	器種	出土地点	質量 (g・cm) ①口径②幅③底径 ④高台径⑤最大径 ※(縦長)・横長・横径	形態・技法・文様の特徴	A: 胎土 B: 焼成 C: 色調	備考
128	須恵系	杯蓋	2号墳前室床面	①12.7 ②4.3	天井部外面回転ヘリ有り 他は回転ナデ外面ヘリ記号	A: 1~4mmの白色砂粒を多く含む B: 良好 C: 内外 95/1灰色	
129	須恵系	杯身	2号墳前室床面	①10.4 ②3.8 受部径12.7	底部外面回転ヘリ有り・内面不方向ナデ 他は回転ナデ 外面ヘリ記号	A: 1~2mmの白色砂粒を多く含む B: 良好 C: 内外 94/1灰色 外 95/1灰色	
130	須恵系	杯身	2号墳前室床面	①10.2 ②3.8 受部径12.6	底部外面回転ヘリ有り 底部内面不方向ナデ 外面ヘリ記号	A: 1~3mmの白色砂粒を多く含む B: 良好 C: 内外 94/1灰色 外 95/1灰色	
131	須恵系	杯身	2号墳前室床面	①10.8 ②4.3 受部径13.3	底部外面回転ヘリ有り 底部内面不方向ナデ 他は回転ナデ 外面ヘリ記号	A: 1~3mmの白色砂粒を多く含む B: 良好 C: 内外 94/1灰色 外 94/1暗緑灰色	
132	鉄製品	鉄具造 立脚環状 腰板	2号墳前室	腰板(左) 残存長6.1 最大幅5.5 腰板(右) 残存長5.6 最大幅4.9 重228.7			腰板・引手は銑を 含在 腰板には刺金の一部 が残存
133	鉄製品	鉄金具	2号墳前室床面	残存長5.8 基部幅(1.7) 厚0.6 重30.2			前輪の鞍鉄具
134	鉄製品	鉄金具	2号墳前室床面 敷石上	長3.1 基部幅1.6 厚0.6 重9.5			前輪の鞍鉄具基部
135	鉄製品	鉄金具	2号墳前室	残存長2.7 残存幅2.9 厚0.5 重4.1			前輪の鞍鉄具輪金 部か?
136	鉄製品	鉄金具	2号墳前室床面	残存長2.35 残存幅1.8 厚0.25 重2.3			金具の鞍形部部 片
137	鉄製品	鉄金具	2号墳前室床面	①残存長1.8 幅1.5 厚0.25 重1.2 ②残存長1.8 幅1.45 厚0.3 重1.5 ③残存長1.35 幅1.7 厚0.3 重0.9			金具の鞍形部部 片
138	鉄製品	鉄金具	2号墳前室床面	鞍鉄具長6.2 基部幅2.2 輪金具最大幅4.7 厚0.7 重59.2			後輪の鞍鉄具 円形部部に鞍の一部 が残存する
139	鉄製品	鉄金具	2号墳前室床面	環状部長1.8 環状部最大幅1.9 厚0.4 重3.2			金具の鞍形部部 片
140	鉄製品	鉄金具	2号墳前室床面	長5.65 幅5.45 厚1.7 重25.7			所部付近の鉄金具 内面に木質痕跡あり
141	鉄製品	鉄金具	2号墳前室床面	長7.3 幅1.9 厚0.4 重48.1			幅広の鉄金具
142	鉄製品	鉄金具	2号墳前室床面	残存長5.9 幅1.55 厚0.55 重11.6			腰部付近の幅狭金 具 内面に木質痕 跡あり
143	鉄製品	鉄金具	2号墳前室	残存長1.1 幅1.1 厚0.5 重6.5			幅狭の鉄金具
144	鉄製品	鉄金具	2号墳前室床面	残存長3.9 幅1.65 厚0.4 重6.2			幅広の鉄金具
145	鉄製品	鉄具	2号墳前室	長8.45 幅4.6 厚0.7 重57.0			継手状鉄金を有す
146	鉄製品	鉄具	2号墳前室	長8.8 幅4.8 厚0.45 重55.2			継手状鉄金を有す
147	鉄製品	鉄具	2号墳前室	長7.6 幅5.0 厚0.9 重70.3			継手状鉄金を有す
148	鉄製品	鉄具	2号墳前室床面	長5.3 残存幅4.6 厚0.5 重24.2			台形状で一部を欠 く
149	鉄製品	鉄具	2号墳前室床面	長5.1 幅3.55 厚0.5 重10.9			
150	鉄製品	鉄具	2号墳前室	長5.6 幅4.0 厚0.6 重13.8			
151	鉄製品	鉄具	2号墳前室床面 敷石上	残存長2.0 幅3.7 厚0.5 重3.7			
152	鉄製品	鉄具	2号墳前室	長4.4 残存幅2.1 厚0.5 重6.6			
153	鉄製品	鉄具	2号墳前室	残存長2.5 残存幅0.9 厚0.3 重0.9			
154	鉄製品	帯鉄金具	2号墳前室床面	長4.65 幅2.5 厚0.3 重9.7			鉄地盤内面鉄金を 打つ
155	鉄製品	帯鉄金具	2号墳前室	長2.6 残存幅3.4 厚0.35 重7.4			鉄地盤内面鉄金を 打つ
156	鉄製品	帯鉄金具	2号墳前室	残存長1.8 残存幅2.0 厚0.25 重3.1			鉄地盤内面鉄金を 打つ
157	鉄製品	帯鉄金具	2号墳前室床面	長3.4 幅2.0 厚0.3 重6.8			鉄地盤内面鉄金を 打つ
158	鉄製品	帯鉄金具	2号墳前室	長2.65 幅2.2 厚0.35 重4.2			鉄地盤内面鉄金を 打つ
159	鉄製品	帯鉄金具	2号墳前室床面	残存長1.1 幅2.0 厚0.2 重1.0			鉄地盤内面鉄金を 打つ

表6 唐山遺跡第2次調査出土遺物観察表④

遺物番号	種類	器種	出土地点	法量 (cm・g) ①口径②器高③底径 ④高さ⑤最大径 ※(重量) <残存量>	形態・技法・文様の特徴	A:胎土 B:焼成 C:色調	備考
160	鉄製品	帯鉤金具	2号墳前室 床面	長3.2 幅2.0 厚0.2 重6.6			鉄地銀張内面銀を 打つ
161	鉄製品	帯鉤金具	2号墳前室 床面	長2.6 幅2.2 厚0.25 重4.2			鉄地銀張内面銀を 打つ
162	鉄製品	帯鉤金具	2号墳前室 床面	長2.1 幅2.1 厚0.3 重5.1			鉄地銀張内面銀を 打つ
163	鉄製品	帯鉤金具	2号墳前室	長2.65 幅2.3 厚0.35 重5.9			鉄地銀張内面銀を 打つ
164	鉄製品	帯鉤金具	2号墳前室	長2.55 幅1.95 厚0.5 重2.2			鉄地銀張内面銀を 打つ
165	鉄製品	帯鉤金具	2号墳前室	長2.5 幅1.9 厚0.45 重1.7			鉄地銀張内面銀を 打つ
166	鉄製品	不明	2号墳前室 敷石下	長1.4 幅1.1 残存高1.1 重3.7			
167	灰意器	杯蓋	2号墳前室 しきみ石下 排水溝内埋土	① (12.4) ② (2.9)	内外面回転ナデ 外面へう記号	A: 1~2mmの白色砂粒を多く含む B: 良好 C: 内外 S5/灰色	
168	灰意器	杯身	2号墳前室 排水溝内	① (10.2) ② 3.7 受部径 (12.4)	底部外面回転へう削り 底部内面不定 方向ナデ 他は回転ナデ 外面へう記号	A: 1~2mmの白色砂粒を含む B: 良好 C: 内 S4/灰色 外 S15/灰白色	
169	灰意器	杯身	2号墳前室 排水溝内	① 11.0 ② 4.0 受部径 (13.4)	底部外面回転へう削り 底部内面不定 方向ナデ 他は回転ナデ 外面へう記号	A: 1~4mmの白色砂粒を多く含む B: 良好 C: 内 S4/ 灰色 外 S15/灰白色	
170	灰意器	蓋	2号墳前室 排水溝内埋土	② (6.8)	外面へう掻き割線文 (左下がり)、沈線、 回転ナデ 内面回転ナデ	A: 密 1~4mmの白色砂粒。石炭を少し含む B: 良好 C: 内 S5/2青灰色 外 S7/灰白色	内面沈線
171	灰意器	長頸瓶	2号墳前室 排水溝内埋土 農道入口埋土	②頸部~体部 (10.3) 底部~脚部 (5.3) 脚部径 (10.4)	頸部外面目の粗いカメシの調整 胴部 ~体部中位外面回転へう削り・内面シボ り肌 底部外面回転へう削り・内面不定 方向ナデ 他は回転ナデ	A: 1~2mmの白色砂粒。長石、角閃石を含む B: 良好 C: 内 S5/2灰オレンジ色 外 S15/灰白色	頸部上端打ち欠きの 可能性
172	鉄製品	附金具	2号墳前室排水溝	鉄具長6.2 基部幅2.5 輪金具最大幅4.4 厚0.65 重55.7			体輪の附設具 由 金具は内形基部の み残存
173	鉄製品	帯鉤金具	2号墳前室 排水溝埋土	長5.3 幅2.7 厚0.4 重8.9			本体に鉄地銀張内 面銀を打つ
174	鉄製品	帯鉤金具	2号墳前室排水溝	長2.55 幅2.35 厚0.8 重16.7			鉄地銀張内面銀を 打つ
175	鉄製品	帯鉤金具	2号墳前室 排水溝埋土	長1.7 幅2.75 厚0.95 重9.9			
176	鉄製品	帯鉤金具	2号墳前室 排水溝	残存長4.9 幅1.7 厚0.45 重7.5			埋土層内に鉄製品 が残存
177	鉄製品	鉄線	2号墳前室 排水溝	長12.85 幅0.5 厚0.3 重10.3			長頸瓶
178	鉄製品	鉄線	2号墳前室 排水溝	残存長12.5 幅0.55 厚0.45 重12.9			長頸瓶 一部木炭が残る
179	鉄製品	鉄線	2号墳前室 排水溝	残存長10.1 幅0.6 厚0.45 重10.3			長頸瓶
180	鉄製品	鉄線	2号墳前室 排水溝	残存長9.2 幅0.9 厚0.45 重6.2			長頸瓶
181	鉄製品	鉄線	2号墳前室 排水溝	残存長6.9 幅0.4 厚0.35 重4.5			長頸瓶蓋部
182	鉄製品	鉄線	2号墳前室 排水溝	残存長5.5 幅0.5 厚0.3 重3.9			長頸瓶
183	鉄製品	鉄線	2号墳前室 排水溝	残存長4.05 幅0.4 厚0.4 重1.8			長頸瓶蓋部
184	鉄製品	鉄線	2号墳前室 排水溝埋土	残存長3.9 幅0.5 厚0.4 重2.1			
185	鉄製品	鉄線	2号墳前室 排水溝埋土	残存長3.0 幅0.6 厚0.4 重1.5			
186	石製品	石核	2号墳前室 排水溝内	長3.7 幅4.0 厚1.9 重26.7			黒曜石
187	灰意器	蓋	2号墳前室埋土	② (1.5)	体部外面縦格子状 体部内面同心円文 当て具痕	A: 密 1mm程度の石炭を少し含む B: 良好 C: 内 S18/3 黄灰色 外 S16/1青灰色 外 S15/1青灰色	
188	灰意器	杯蓋	2号墳前室埋土	② (1.6)	天井部外面回転へう削り 他は回転ナデ	A: 密 微細な白色砂粒。長石を少し含む B: 良好 C: 内 S7/灰白色 外 S7/灰白色 外 S4/灰白色	
189	灰意器	杯蓋	2号墳前室埋土入口 (黄褐色土) 上面	① (9.8) ② 0.8 受部径 (11.6)	天井部外面回転へう削り 他は回転ナデ	A: 密 微細な白色砂粒。長石を多く含む B: やや不 良 C: 内 S17/3黄褐色 外 S17/2灰白色 外 S16/1青灰色	
190	灰意器	杯	2号墳前室埋土入口 (黄褐色土) 上面	① (12.0) ② 3.6 ③ (6.8)	底部外面へう切り後ナデ 他は回転ナデ 外面へう記号	A: 密 1~2mmの白色砂粒。石炭を少し含む B: 良好 C: 内 S15/1青灰色 外 S14/1黄褐色	口縁部に鉄地銀を 打つ
191	土師器	杯	2号墳前室埋土入口 (黄褐色土) 上面 土層 36.3	① 15.6 ② 5.4	外面面割線縦割 口縁付近にミガキ残る 内面放射状文様 底部中央に二重の 内形堀み	A: 密 1mm程度の長石、金雲母をわずかに含む B: 良 好 C: 内 S19/24C、いり褐色 外 S16/3褐色 外 S18/5明赤褐色	境内における土師 杯とに相当

表7 唐山遺跡第2次調査出土遺物観察表⑤

遺物 番号	種類	器種	出土地点	法量 (cm・g) ①口径②底径③底径 ④高⑤最大径 ※(覆文線)・残存線	形態・技法・文様の特徴	A: 胎土 B: 焼成 C: 色調	備考
192	須恵器	杯蓋	2号墳後遺 直土直土	① (12.6) ② 4.2	天井部外面回転へう附り 他は回転ナデ 外面へう記号	A: 密 濃紺～2mmの長石、石英を多く含む B: 良好 C: 内SP85/青灰色 外SP84/暗青灰色	
193	須恵器	高杯	2号墳前遺直土上	① (11.8) ② (3.2)	杯部は底部外面力キメ、沈線が通る 他は 回転ナデ	A: 密 濃紺な長石を少し含む B: 良好 C: 内SP86/1 青灰色～SP85/1青灰色 一部SP82/1青黒色～SP2/1新黒色	杯部のみ残存
194	須恵器	杯蓋	2号墳前遺直土上	① (8.5) ② 1.8 受部径 (10.5)	天井部外面回転へう附り 他は回転ナデ 天井部外面へう記号	A: 密 濃紺な長石を多く、1～2mmの石英をわずかに含 む B: 良好 C: 内SP7/1暗紫灰色～5.584/2に5.5暗 褐色 外SP84/暗青灰色～SP83/1暗青灰色	
195	須恵器	高杯	2号墳前遺直土上	② (3.6)	底部外面2本の沈線が通る。ナデ 底部 内面シボリ痕 他は回転ナデ	A: 密 濃紺な長石を多く含む B: 良好 C: 内SP84/1 青灰色 C: 内SP86/1暗青灰色	底部のみ残存 外面降灰
196	須恵器	盃	2号墳前遺直土上	① (11.9) ② (3.3)	口頸部に1本の沈線が通る 他は回転ナデ	A: 密 1～2mmの石英を少し含む B: 良 C: 内SP86/1 青灰色	口頸部破片 内面降灰
197	石製品	勾玉	2号墳前遺直土上 付近埋土	長2.45 厚3.5 重4.9 孔径2.4～2.9	両面穿孔	C: 青緑色一部白色	磨玉製
198	須恵器	高杯	3号墳1区 流土(赤茶色土)	① (11.6) ② (6.4)	杯部の底部外面削突文、2ヶ所に沈線 他は回転ナデ 脚部は外面回転ナデ 内面シボリ痕 通かし一部残存する	A: やや密 1mm程度の長石、石英を含む B: 良 C: 内 SP85/1青灰色 外SP84/1暗青灰色	口径が小さく他器 種の可能性あり
199	須恵器	杯蓋	3号墳3区周溝内近 流土(赤茶土)	① (9.8) ② (2.5)	底部外面沈線通る 内外面回転ナデ	A: 密 濃紺な長石を少し含む B: 良 C: 内SP86/1 青灰色 C: 内SP86/1暗青灰色	
200	須恵器	杯蓋	3号墳3区周溝内土 (灰濁土)	① (15.0) ② (2.55)	内外面回転ナデ 口縁部に暗線状段 あり 外部外面沈線通る	A: 粗 濃紺～1mmの長石、石英を含む B: やや不 良 C: 内SP86/1暗青灰色～SP84/1暗青灰色	内外面降灰
201	須恵器	杯身	3号墳3区周溝内近 流土(赤茶土)	② (2.2)	内外面回転ナデ	A: 密 濃紺～5mmの長石、石英を少し含む B: 良好 C: 内SP86/1青灰色	口頸部破片 内面降灰
202	須恵器	高杯	3号墳3区周溝内土 (赤茶土)	② (11.1)	杯部下半力キメ、削突文・内面不定方向 ナデ 底部は外面力キメ、回転ナデ・内 面シボリ痕 三方向の通かし	A: 粗 濃紺～5mmの長石を多く含む B: 良 C: 内SP84/1 暗青灰色～SP82/1青黒色 外SP87/1暗青灰色～SP83/1暗 青灰色	
203	須恵器	盃	3号墳3区周溝内近 流土(赤茶土)	① (11.4) ② (9.5)	口頸部外面1本の沈線・内面シボリ痕 他は回転ナデ	A: 密 濃紺～1mmの長石、石英を少し含む B: 良好 C: 内 SP85/1青灰色 外SP85/1青灰色～SP84/1暗青灰色	口頸部破片
204	石製品	磁石	3号墳3区 流土(赤茶土)	長7.2 幅2.3 厚1.1 重25.4			砂岩製 使用面2面
205	須恵器	高杯	3号墳3区流土	② (2.9)	杯部は底部外面力キメ 他は回転ナデ	A: やや粗 1～2.5mmの長石を多く含む B: 良 C: 内 SP86/1青灰色 外SP87/1青灰色～SP86/1青灰色	杯部のみ残存
206	須恵器	高杯	3号墳4区墳頂上 流土(赤茶土)	① (11.5) ② (7.25)	杯部は底部外面回転へう附り・内面不定 方向ナデ 脚部内面ナデ 他は回転ナデ	A: 密 濃紺な長石を少し含む B: 良好 C: 内SP87/1 暗青灰色～SP84/1暗青灰色 外SP86/1青灰色～SP83/1暗 青灰色	
207	須恵器	盃	3号墳4区周溝内土 (黒濁土)	① (7.6) ② 8.0	底部外面へう切り後ナデ 他は回転ナデ	A: 密 1～2mmの長石、石英を含む B: 良 C: 内SP87/1 暗青灰色。SP84/1暗青灰色 外SP87/1暗青灰色	内外面降灰
208	須恵器	埴輪	3号墳Aトレンチ脇 表土	② (3.25) 残存幅3.6	外面ナデ 内面回転ナデ	A: 密 2～4mmの石英を少し含む B: 良好 C: 内SP84/1 暗青灰色 外SP87/1暗青灰色 33/暗褐色	把手部破片
209	土師器	小皿	3号墳東側壁付近 表土内埋土	② (1.2) ③ (6.5)	底部外面赤附り 他は回転ナデ	A: 濃紺な長石、雲母を含む B: 良 C: 内SP87/6暗 黄褐色	
210	石製品	勾玉	4号墳	長4.1 厚1.7 孔径4.45 重24.9	鉄針で片面穿孔	C: SG17/明オリーブ灰色～S18/1灰白色	磨玉製
211	石製品	管玉	4号墳	外径0.39 長0.7 孔径0.18 重0.2	穿孔内側に穿孔時の回転痕 石針による 両面穿孔	C: 淡青色不透明	磨玉製
212	石製品	管玉	4号墳	外径0.27 長0.57 孔径0.1 重0.2	穿孔内側に穿孔時の回転痕 石針による 両面穿孔	C: 緑灰色	磨玉製
213	ガラス 製品	小玉	4号墳	外径0.3 高0.22 孔径0.12	引き伸ばし技法	C: 1084/赤色	表面に酸蝕
214	ガラス 製品	小玉	4号墳	外径0.45 高0.27 孔径0.12 重0.1	引き伸ばし技法	C: 1084/赤色	表面に酸蝕
215	ガラス 製品	小玉	4号墳	外径0.4 高0.28 孔径0.14	引き伸ばし技法	C: 青色	表面に酸蝕
216	ガラス 製品	丸玉	4号墳	外径0.92 高0.6 孔径0.22 重0.6	引き伸ばし技法	C: 群青色透明	
217	ガラス 製品	丸玉	4号墳	外径0.84 高0.6 孔径0.18 重0.6	引き伸ばし技法	C: 群青色透明	
218	ガラス 製品	丸玉	4号墳	外径0.95 高0.5 孔径0.24 重0.6	引き伸ばし技法	C: 群青色透明	表面に縦方向の溝 が多く入る
219	ガラス 製品	丸玉	4号墳	外径0.98 高0.6 孔径0.3 重0.9	引き伸ばし技法	C: 群青色透明	
220	ガラス 製品	丸玉	4号墳	外径0.97 高0.51 孔径0.28 重0.7	引き伸ばし技法	C: 群青色透明	
221	ガラス 製品	丸玉	4号墳	外径0.9 高0.7 孔径0.19 重0.6	引き伸ばし技法	C: 群青色半透明	表面に酸蝕
222	ガラス 製品	丸玉	4号墳	外径0.9 高0.49 孔径0.18 重0.5	引き伸ばし技法	C: 群青色透明	
223	ガラス 製品	丸玉	4号墳	外径0.9 高0.6 孔径0.25 重0.6	引き伸ばし技法	C: 群青色透明	

表8 唐山遺跡第2次調査出土遺物観察表⑥

遺物番号	種類	器種	出土地点	法量 (cm・g) ①口縁②器高③底径 ④高台径⑤最大径 ※〈底径〉〈残存量〉	形態・技法・文様の特徴	A:胎土 B:焼成 C:色調	備考
224	ガラス製品	丸玉	4号墳	外径0.73 高0.41 孔径0.19 重0.3	引き伸ばし技法	C:群青色透明	
225	ガラス製品	丸玉	4号墳	外径0.85 高0.53 孔径0.18 重0.5	引き伸ばし技法	C:群青色透明	
226	ガラス製品	丸玉	4号墳	外径0.89 高0.61 孔径0.2 重0.7	引き伸ばし技法	C:群青色半透明	
227	ガラス製品	丸玉?	4号墳	外径0.83 高0.71 孔径0.32 重0.7	引き伸ばし技法	C:群青色半透明	
228	ガラス製品	丸玉	4号墳土器い	外径0.84 高0.55 孔径0.17 重0.5	引き伸ばし技法	C:群青色透明	
229	ガラス製品	丸玉	4号墳土器い	外径0.68 高0.45 孔径0.21 重0.5	引き伸ばし技法	C:群青色透明	
230	ガラス製品	丸玉	4号墳床下け時	外径0.73 高0.54 孔径0.28 重0.5	引き伸ばし技法	C:青色透明	
231	ガラス製品	丸玉	4号墳主軸ベルト	外径0.75 高0.55 孔径0.18 重0.5	引き伸ばし技法	C:群青色透明	
232	ガラス製品	丸玉	4号墳	外径0.77 高0.96 孔径0.14 重0.8	引き伸ばし技法	C:群青色不透明	
233	ガラス製品	丸玉	4号墳	外径0.63 高0.67 孔径0.19 重0.4	引き伸ばし技法	C:群青色透明	
234	ガラス製品	小玉	4号墳	外径0.35 高0.26 孔径0.13	引き伸ばし技法	C:青緑色不透明	
235	ガラス製品	小玉	4号墳	外径0.55 高0.34 孔径0.25 重0.2	引き伸ばし技法	C:群青色透明	
236	ガラス製品	小玉	4号墳	外径 (0.42) 高0.28 孔径 (0.16)	引き伸ばし技法		
237	ガラス製品	小玉	4号墳	外径0.44 高0.25 孔径0.12	引き伸ばし技法	C:群青色透明	表面に縦線
238	ガラス製品	小玉	4号墳	外径0.42 高0.25 孔径0.15	引き伸ばし技法	C:群青色透明	
239	ガラス製品	小玉	4号墳土器い	外径0.42 高0.23 孔径0.13 重0.1	引き伸ばし技法	C:群青色透明	
240	ガラス製品	小玉	4号墳土器い	外径0.38 高0.22 孔径0.15 重0.1	引き伸ばし技法	C:濁った青色半透明	
241	ガラス製品	小玉	4号墳 (出土位置不明)	外径0.37 高0.23 孔径0.16	引き伸ばし技法	C:淡青色透明	
242	ガラス製品	玉破片	4号墳	残存径0.2 残存幅0.25	引き伸ばし技法		
243	ガラス製品	玉破片	4号墳床面 土器い	残存径0.3 残存幅0.2	引き伸ばし技法か	C:コバルトブルー透明度や低い	
244	須恵器	杯身	4号墳 墳丘表土→流土	① (L.1) ② (L.1) 受部径 (3.9)	底部外面回転ヘラ削り 他は回転ナデ	A:密 微細な長石、石英、雲母を含む B:良 C:内外 5/85/1青灰色	
245	須恵器	盃	4号墳 東側表土削ぎ	③ (L.9)	外面カキメ後波状文 内面回転ナデ	A:やや密 微細な3mmの長石を多く、黒色粒を含む B: 良 C:内外5/85/1青灰色→5/84/1暗灰色 外5/85/1青灰色	底部破片
246	須恵器	盃	4号墳 東側表土削ぎ	④ (L.6)	外面カキメ 波状文、2本の浅溝 内面 回転ナデ	A:粗 2~5mmの石英、微細な長石、黒色粒を含む B: 良 C:内外5/85/1青灰色→5/84/1暗灰色 外5/85/1青灰色	底部破片
247	磁器	青磁碗	4号墳 墳丘表土から流土	⑤ (L.1) ⑥ (L.4)	内外外面微細 高台裏付は地割ぎ 見込み片 方等の工具により施文	A:精良 微細な白色粒子を少量含む B:良 C: 10/17/1明緑灰色 胎5/85/1青灰色→5/84/1暗灰色	観察系青磁碗?
248	須恵器	高杯?	5号墳 I 区周溝	① (L.95) ② (L.12.8)	裾裾部内外面回転ナデ	A:密 微細な3mmの長石、石英を少し含む B:良 C: 5/85/1青灰色 外5/85/1暗灰色	裾裾部破片
249	須恵器	不明	5号墳 I 区周溝	③ (L.6)	外面回転ナデ 内面回転ナデ	A:やや粗 1~3mmの長石、石英を少し含む B:良 C: 5/85/1青灰色 外5/85/1暗灰色	薄灰
250	須恵器	杯身	大溝上層 (黒色土)	①13.4 ②4.3 ③5.3	底部外面回転ヘラ削り 底部内面不定方 向ナデ 他は回転ナデ	A:やや粗 1~4mmの長石、石英を含む B:良 C:内 5/85/1青灰色 外5/85/1暗灰色	やや灰みあり
251	須恵器	杯身	大溝上層 (黒色土)	① (L.4.4) ②4.8 ③ (L.8)	底部外面ヘラ切り後回転ヘラ削り 底部 内面不定方向ナデ	A:微細な白色砂粒、黒色粒、石英を含む B:やや 不良 C:内外7.5/85/1灰白色、一部10/15/1灰白色	
252	須恵器	平瓶	大溝上層 (黒色土)	① (L.1) ②14.9	底部外面手持ちヘラ削り 胴部カキメ 外面口縁→胴部ヘラ削ぎ	A:微細な白色砂粒をわずかに含む B:良好 C: 10/17/1灰白色 外10/17/1灰白色→13/1暗灰色	内外面微灰
253	須恵器	短頸瓶 (四耳型)	大溝上層 (黒色土)	① (L.7.6) ②10.5 ③8.3 ④ (L.4.9)	底部外面不定方向の工具ナデ 底部内面 手持ちヘラ削り 内面不定方向ナデ 胴部 内面シボリ痕	A:やや粗 1~4mmの白色砂粒を少し含む B:良好 C: 内外10/17/2/1灰白色→10/16/1灰白色	外面微灰 焼き跡残る
254	新羅土器	盃	大溝上層 (黒色土)	①14.2 ②17.8 ③11.8 ④22.2	裾裾部外面シボリ痕 胴部三角尖帯、カキ メ状波線、二条目点文、縦長溝線文 外 面下平部木目直交平行切目ヨコナデ 後輪ナデ 底部内面ヨコナデ 底部ナデ 貼付付着	A:1~3mmの白色砂粒を多く含む B:非常によい C: 内外10/13/1灰白色 外10/13/1灰白色→10/14/1灰白色	C:口縁部・底部内面 薄灰
255	石製品	砥石	大溝上層 (黒色土)	残存径9.2 厚3.0 厚3.0 重124.5			砂岩 使用面4面

表9 唐山遺跡第2次調査出土遺物観察表⑦

遺物 番号	種類	器種	出土地点	法量 (cm・g) ①口径②幅③底径 ④高⑤最大径 ※(單元組)・残存部	形態・技法・文様の特徴	A: 胎土 B: 焼成 C: 色調	備考
256	須恵器	杯蓋	大溝中層 (灰茶土)	①16.2 ②3.4 つまみ径2.0 つまみ径1.0	天井部外面回転ヘリ有り 天井部内面不 定方向ナデ 他は回転ナデ 外面ヘリ記 号	A: 粗 織物～3mmの白色砂粒、長石、石英を含む B: 良好 C: 内外10Y5/1灰色～5P94/1暗青灰色	横けきあり
257	須恵器	杯蓋	大溝中層 土器集中	①15.6 ②2.0 受部径13.3 つまみ径2.4 つまみ径1.0	天井部外面回転ヘリ有り 他は回転ナデ 外面ヘリ記号	A: 密 織物～2mmの長石、石英を含む B: 良 C: 内 5P5/1青灰色 外5P96/1青灰色 外5P93/1暗青灰色	
258	須恵器	杯身	大溝中層 集中周辺 (灰茶土)	① (13.9) ②5.0 ③8.7	底部外面回転ヘリ有り 底部内面不定方 向ナデ 他は回転ナデ	A: 3mm以下の長石、石英を多く含む B: やや良 C: 内 10Y5/1灰色～5P5/1青灰色 外10Y5/1灰色 5P4/1 灰色	
259	須恵器	杯身	大溝中層 (灰茶土)	①11.95 ②3.9	底部外面ヘリ切り後ナデ 底部内面ナデ 他は回転ナデ 外面ヘリ記号	A: 2mm以下の長石、石英を多く含む B: 良 C: 内 10Y7/1灰白色～3P4/1灰色 外10Y7/1灰白色～5P5/1青灰色	横けきあり 内外面降灰
260	須恵器	杯身	大溝中層 (灰茶土)	① (12.3) ② (3.7)	内外面回転ナデ 底部付近外面回転ヘリ 有	A: 織物～1mmの長石、石英を含む B: 良好 C: 内 3P4/ 灰色～3P3/1暗灰色 外 3P7/1灰白色～3P2/1黒色	
261	須恵器	杯身	大溝中層 (灰茶土)	①10.4 ②3.0 受部径12.6	底部外面ヘリ切り後ナデ 底部内面不定方 向ナデ 他は回転ナデ 外面ヘリ記号	A: 織物～2mmの長石、石英をわずかに含む B: 良好 C: 内 3P4/ 灰色～5P96/1青灰色 外 3P7/1灰白色 5P95/1 青灰色	
262	須恵器	高杯	大溝中層 周縁土器集中	①14.4 ②8.2 受部径8.95	杯部は底部外面回転ヘリ有り・内面不定方 向ナデ 胴部は内外面シボリ底 他は 回転ナデ 胴部内面ヘリ記号	A: 2mm以下の長石、石英を多く含む B: 良好 C: 内 5P5/1暗青灰色～5P5/1暗青灰色 外 5P4/1暗青灰色	
263	炊煮器 土器	小型甕	大溝中層 (灰茶土)	① (15.2) ②15.5 ③14.8	外周半直交の平行切ぎ、板ナデ 体部 内面平行切ぎ具痕 口縁部は回転ナデ	A: やや粗 織物～2mmの長石、石英を含む B: 良好 C: 内外 7.5YR7/6褐色	
264	土師器	小型甕	大溝中層 (灰茶土)	① (13.6) ②13.2	体部外面ハナゲナデ 体部内面ヘリ有り 底部内面筆劃の調整不明 口縁部は コナナデ	A: 3mm以下の長石、石英を多く含む B: 良 C: 内 7.5YR7/6褐色 外 5YR7/6褐色 外 5YR7/6褐色 外 5YR7/6褐色	
265	土師器	小型甕	大溝中層 (灰茶土)	① (15.2) ②12.3	体部外面ハナゲナデ 底部外面ヘリ有り 口縁部はコナナデ	A: 織物～2mmの長石、石英を多く含む B: 良 C: 内 7.5YR7/6褐色 外 5YR7/6褐色 外 5YR7/6褐色 外 5YR7/6褐色	
266	土師器	台付鉢	大溝中層 (灰茶土)	① (18.7) ②11.1 ③8.5	内面周り口の調整 外面周縁ハナゲナ デの可能性	A: 2mm以下の長石、石英、金雲母を多く含む B: 良 C: 内外 5YR6/8褐色～7.5YR6/8褐色	
267	須恵器	杯蓋	大溝上層～中層 (黒色土)	① (13.9) ②2.5 つまみ径2.4 つまみ径1.2	天井部外面回転ヘリ有り 天井部内面不 定方向ナデ 他は回転ナデ	A: 密 織物～2mmの長石、石英を少し含む B: 良 C: 内 5P6/1青灰色 外5P94/1暗青灰色	
268	須恵器	杯蓋	大溝上層～中層 (灰茶褐色土)	① (14.0) ② (2.5) 受部径 (16.6)	天井部外面回転ヘリ有り 他は回転ナデ 天井部内面不定方向ナデ	A: 密 織物～2mmの長石、石英を含む B: 良好 C: 内外 3P7/1灰白色～3P2/1灰色 3P2/1灰色	つまみは欠損する
269	須恵器	杯蓋	大溝上層～中層 (黒色土)	①16.4 ②2.7 受部径14.2 つまみ径2.9 つまみ径1.0	天井部外面回転ヘリ有り 天井部内面不 定方向ナデ 他は回転ナデ 外面ヘリ記 号	A: 密 織物～3mmの石英を含む B: 良 C: 内5P94/1暗 青灰色 外5P94/1暗青灰色 外5P93/1暗青灰色	
270	須恵器	小型甕	大溝上層～中層 (黒色土)	① (13.0) ②17.3 ③ (17.8)	外周下半部平行タタキ目？をナデ消し 上半部力キメ 内面下半部切ぎ具痕一部 格子状	A: 織物～2mmの白色砂粒を少し含む B: 良好 C: 内外 5Y4/1 灰色～3P3/1暗灰色 外10Y6/1灰色～3P3/1暗灰色	外面一部降灰
271	須恵器	杯蓋	大溝上層～下層 (黒色土)	①15.4 ②3.1 つまみ径2.2 つまみ径1.2	天井部外面回転ヘリ有り 天井部内面不 定方向ナデ 他は回転ナデ	A: 密 B: 良 C: 内5P6/1青灰色 外5P94/1暗青灰色～ 5P4/1暗青灰色	
272	須恵器	短頸甕	大溝上層～下層土器 集中の中層 (灰茶土)	① (16.3) ②15.7 ③ (11.3)	体部上段～底部外面ヘリ有り 底部内面 ナデ 他は回転ナデ 裏面内ヘリ記号	A: 2mm以下の長石、石英を含む B: 良好 C: 内外 10Y4/1灰色～10Y3/1オリーブ褐色 5P96/1青灰色	体部外面に別個体 が融着
273	須恵器	杯蓋	大溝中層～下層 (灰茶土)	① (12.8) ②2.2 受部径 (15.2) つまみ径2.9 つまみ径0.9	天井部外面回転ヘリ有り 他は回転ナデ 天井部内面不定方向ナデ	A: 織物～2mmの長石、石英を多く含む B: 良好 C: 内 3P4/ 灰色～5P93/1暗青灰色 外10Y5/1灰色～3P2/1黒色	外面降灰
274	須恵器	杯身	大溝下層 (赤茶土)	①11.5 ②3.6 ③7.8	底部外面ヘリ切り 底部内面不定方向ナ デ 他は回転ナデ 底部外面ヘリ記号	A: やや粗 織物～2mmの長石、石英を含む B: 良好 C: 内外 5P6/1 青灰色 5P93/1暗青灰色	
275	須恵器	杯身	大溝焼乱	② (2.7)	内外面回転ナデ	A: 織物～2mmの白色砂粒を含む B: 良 C: 内10Y5/1灰色 外 5Y6/2灰黄色～5P5/1青灰色	
276	石製品	石硯	1号墳破石1区 表土	長2.03 幅1.85 厚3.8 底1.0			黒曜石
277	石製品	石硯	1号墳前庭部盛土	残存長2.12 残存幅1.4 厚0.4 重0.7			黒曜石
278	石製品	石硯	1号墳1区境庄 盛土	長2.92 幅1.63 厚0.4 底1.4			黒曜石
279	石製品	磨石	1号墳前庭部 横断ベルト2・3層	長7.0 幅4.6 厚3.55 底38.8			燧石
280	石製品	磨石片	2号墳周部埋土	残存長4.4 残存幅5.9 底38.2			玄武岩
281	石製品	石硯	2号墳1区境庄 境中層	長6.6 幅4.2 厚1.0 底28.4			安山岩
282	石製品	二次加工 2号墳1区境庄 剥片	長8.5 幅4.2 厚1.3 底42.7				安山岩
283	石製品	二次加工 2号墳1区境庄 剥片	長4.05 幅3.8 厚0.7 底11.6				安山岩
284	石製品	石硯	2号墳1区平坦部 黒褐色土・赤褐色土	残存長2.7 幅1.4 厚0.35 底0.7			輝石黒曜石

V. 総括

1 主要遺構の時期と古墳群の形成過程

上田 龍児

1号墳 主体部は単室両袖の横穴式石室で、玄室平面形が長方形であることや丘陵尾根に位置する点で、相対的に古相に位置付けられる可能性がある。Ⅰ区盛土内からはⅣA期以降に主流となる頸部に斜線文を施す須恵器大甕が出土した。Ⅱ区周溝からは口径が大きい須恵器杯H身や波状文を施す須恵器甕が出土したが、細片のため古墳に伴うかどうかは不明である。石室形態や墳丘出土の須恵器大甕のほか、2号墳との位置関係から、ⅣA期の築造と位置付けておきたい。また、玄室・羨道～石室開口部付近ではⅥ期の須恵器が出土しており、7世紀後半に追葬や墓前祭祀などがあったものと考えられる。

2号墳 石室は複室両袖の横穴式石室で、玄室平面形は長方形である。1号墳と比べ石室石材が大型で、積み方はやや粗い。前室からは原位置を保つ状態でⅣA期の須恵器杯H（杯蓋口径：11.8～12.7cm、杯身受部径：12.6～13.3cm）が出土し、築造・初葬時期を示す可能性がある。1号墳との位置関係や石室構造から2号墳が後出することから、ⅣA期でも新相段階の築造・初葬と位置付けておく。また、羨道部出土の須恵器杯G蓋や暗文土師器の存在から7世紀中頃に追葬や墓前祭祀があったものと考えられる。なお、玄室内から12世紀代の土師器杯や白磁碗も出土しており、中世段階における石室の再利用を示す。また、近代以降の遺物も伴うことから、当該期の営みを示す。

3号墳 石室は単室両袖の横穴式石室で、玄室平面形は羨道側がやや開く略正方形である。石室形態からは、1・2号墳よりも新相に位置付けられる。古墳に伴う遺物は非常に少なく、石室形態から想定される年代観よりも古相の遺物もある。1・2号墳との関係からⅣB～Ⅴ期の築造と考えられる。なお、玄室内から中世期の土師器皿が出土しており、石室の再利用を示す。

4号墳 石室形態は不明で、古墳に直接伴う土器もないが、副葬品の玉類は古墳時代後期に位置付けられる。丘陵尾根に立地することや4号墳の斜面下方に位置する3号墳からⅢB期以前の須恵器が出土していることから、1・2号墳よりも古相に位置付けられる可能性がある。

5号墳 古墳に伴う遺物は皆無で、石室構造も不明な点が多いが、3号墳築造時に古墳そのものが大きく破壊されていることから、3号墳より古相であることは確実である。

大溝 2号墳の周溝が埋没した後に掘削していることから、少なくともⅣA期以降に掘削されたことは間違いない。詳細は後述するが、7世紀後半前後に掘削し短期間で埋没したものと考えられる。

古墳群の形成過程 最古相の古墳は4号墳及び5号墳である。いずれも破壊が顕著で出土遺物も少ないことから、詳細な築造時期は不明であるが、丘陵尾根に位置している点からは4号墳が古墳群の築造契機になった可能性がある。4・5号墳ともに古墳時代後期に位置付けられ、調査区内で出土した土器の様相から、ⅢA～ⅢB期に位置付けられる。

続くⅣA期には丘陵尾根に1号墳が築造され、短期間のうちに丘陵裾部に2号墳が築造される。

その後、IV B～V期には3号墳が築造され、これをもって造墓活動を停止する。なお、4・5号墳が徹底的に破壊されていることから、4・5号墳と1～3号墳は系譜的に連続しない可能性もある。

その後、VI期には2号墳の周囲に大溝を掘削し、この段階で1・2号墳に対する追葬や墓前祭祀が行われる。これ以後は、中世及び近代における石室の再利用が認められる。

2 大溝及び1号墳石室開口部付近の土器群について

上田 龍児

大溝は2号墳を囲むように巡り、調査開始当初は2号墳に伴う周溝と考えていた。ところが、大溝が2号墳の本来の周溝を切ること、大溝の形状が2号墳の南東方向へと延びていくことから、2号墳とは別の遺構であるという認識に至った。また、1号墳石室開口部付近出土土器と大溝出土土器が接合関係にあることが確認されたことや大溝出土遺物の大半が1号墳南側の直下で確認されていることから、大溝出土土器は本来的には1号墳開口部付近における土器を使用した行為に伴うもので、最終的に大溝に流れ込み埋没した土器群である、という結論に至った。大溝出土土器の出土状況については本文中でも記述したが、新羅土器を含む重要な土器群であることから、改めて出土状況を整理したうえで、特徴的な土器の位置付けを示すこととする。

(1) 出土状況の整理

①1号墳羨道・開口部付近 羨道部では須恵器短脚高杯（第26図87）と須恵器台付壺（第26図88）、開口部付近では須恵器小型甕2点（第26図92・93）とこれにセットとなる須恵器杯B蓋が2点（第26図90・91）ある。いずれも完形品に近く、1号墳に供献した土器群と評価できる。このうち、須恵器台付壺は大溝中層出土の破片と接合した。須恵器杯B蓋は天井部に擬宝珠ツマミ・口縁部にカエリを有し、VI期に位置付けられる。

②大溝下層 当該土層は周辺の地山由来の土が流入したものと考えられ、大溝掘削時期に最も近い時期を示す。完形品の須恵器無台杯（第72図274）が出土した。丸底気味のものは小田浦60-1号窯跡や大宰府条坊跡98次 SX005などV～VI期古相の土器群に類例がある。

③大溝中層 当該土層は下層と類似しており、周辺の地山由来の土が流入した土層と考えられる。大溝掘削からさほど時間を経ずに埋没した可能性がある。須恵器杯B（第71図258）・杯H（第71図261）・無台杯（第71図259）・高杯（第71図262）、土師器甕（第71図264・265）・椀（第71図266）、軟質系土器甕（第71図263）が出土した。いずれも完形品もしくは完形品に近い。このうち、須恵器杯B蓋・高杯は1号墳開口部付近の破片と接合した。須恵器杯B蓋は天井部に擬宝珠ツマミ、口縁部にカエリを有し、VI期に位置付けられる。須恵器杯Bは高台端部の張り出しが弱いが高台がやや高い点から、VI期の範疇で捉えることができる。無台杯は下層出土資料と類似し、同時期の所産と考えてよい。杯Hは大溝出土土器の中で最も古い様相の土器であるが、後述するように諸特徴が当該地には認められないものである。完形品であり、他の土器群と同時期に埋没したものと考えられる。高杯はVI期に主流となるものである。

④大溝上層 当該土層は黒色腐食土層で、周辺が土壌化した段階で堆積した土層と考えられる。須

恵器杯B（第70図250）・椀（第70図251）・平瓶（第70図252）・四耳壺（第70図253）、新羅土器壺（第70図254）が出土した。いずれも完形品もしくは完形品に近いが、平瓶・四耳壺、新羅土器は細片化した状態で出土した。また、須恵器椀は1号墳羨道部出土の破片と接合した。須恵器杯Bは高台端部が外側に踏ん張るもので、VI期に位置付けられる。新羅土器は縦長連続文を施しており、7世紀後半以降の所産である。

⑤上層～中層 大溝上層と中層の土器が接合した土器群である。須恵器杯B蓋（第72図267・269）・短頸壺（第72図272）・小型甕（第72図270）がある。いずれも完形品に近い。須恵器杯B蓋はいずれも擬宝珠ツマミを有するが、口縁部にカエリがあるものとなないものがある。カエリがないものは高くしっかりとした擬宝珠ツマミを有しており、VII A期には降らずVI期でも新相に位置付けられよう。

⑥小結 大溝出土土器群は、1号墳開口部付近の土器群と接合関係にあること、大半が完形品もしくは完形品に近いこと、全て1号墳南側直下の溝中で出土していることから、本来的には1号墳開口部付近における行為に伴う土器群と捉えることができる。また、平瓶・四耳壺、新羅土器などは細片化して埋没しており、意図的な破砕行為が行われた可能性もある。

1号墳開口部付近の土器群と大溝下層・中層・上層の土器群で土器の顕著な時期差は認められないことから、1回もしくは短期間の行為で使用した土器群である可能性が高い。1号墳開口部付近の土器群と大溝中層・上層土器群が接合関係にあること、大溝中層土器群と上層土器群が接合関係にあること、大溝下層出土の遺物が少ないこと、などから大溝に投棄したものではなく、当初は1号墳開口部付近に置かれた（投棄された）土器群が、大溝の埋没過程で順次流入したものと考えられる。

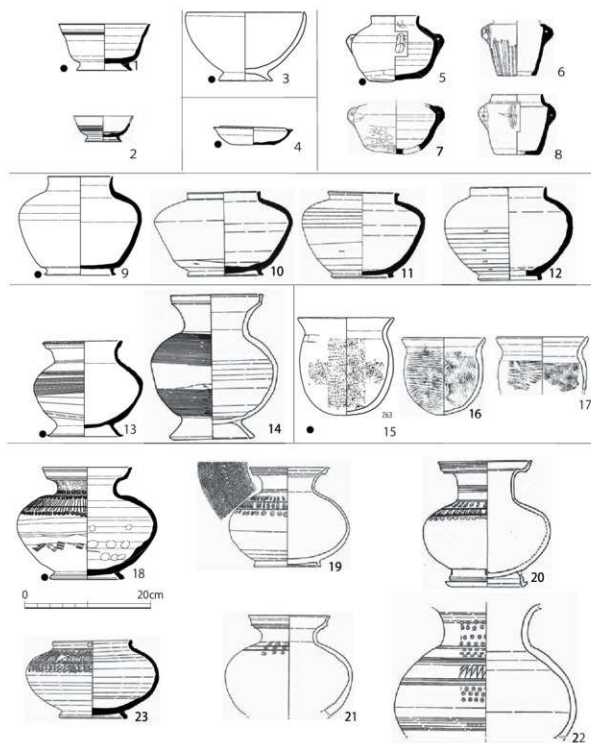
土器群の時期は、VI期の範疇で捉えられるものであり、口縁部にカエリがない須恵器杯B蓋の存在から7世紀第4四半期～8世紀第1四半期（久住・長編年：Ⅲ2期）に位置付けられる（久住・長2023）。

（2）特徴的な土器（第74図）

①須恵器椀（1） 高台付きの椀で、器高・高台がやや高い点から一般的な杯Bとは異なる。口縁端部を面取りすることや外面にカキメを施す点から、いわゆる金属器模倣椀に位置付けられる。金属器模倣椀は牛頸竈跡群での生産が認められるが、牛頸の事例は高台が高く口縁部が直立気味に立ち上がるものが多い点やIV～V期に中心があることから、本例とは異なる。類例を提示するならば、大野城跡百間石垣出土の未定型の杯Bとされる資料（2）がある。

②土師器椀（3）「ハ」字に開くやや高い高台を有する椀で、体部は内湾気味に立ち上がり、口縁部外面を面取りする。口縁部の面取りや高台の存在から、金属器模倣椀との関連性も想定できるが、土師器であることや類例が全くないことから位置付けが難しい。今後、注意が必要な資料である。

③須恵器杯H（4） 口径10.4cm（受部径12.6cm）で、立ち上がりは著しく低い。底部が平底であることや底部内面に多角方向のナデを施す点が特徴である。調査区内で確認された杯Hとは明らかに異質で、周辺の乙金地区遺跡群や牛頸竈跡群にも類例は見出し難い。他地域からの搬入品の可能



●は唐山遺跡第2次調査大溝出土、他は下記のとおり

- 2：大野城跡百間石垣 6：野添遺跡第9次調査包含層 7・8：善一田遺跡第4次調査15号墳
10：大宰府政庁跡中門地区 11：大宰府政庁跡南門地区 12：大宰府政庁跡北門地区 14：堤ヶ浦古墳群SK18
16：善一田遺跡第4次調査ST07 17：善一田遺跡第4次調査SX16 19：大邸遠城下里34号墳
20：金海礼安里古墳群78号墳 21：大邸時至地区古墳群9号石室墓 22：晋州武村IV-Ⅱ地区平地
23：善一田遺跡第4次調査南谷部

※2は2019長直信『西海道の土器編年研究』『大宰府学研究』九州国立博物館アジア文化交流センター研究論集第1集から引用

第74図 唐山遺跡第2次調査大溝出土土器と参考資料(S=1/6)

性も含め、検討が必要な資料である。

完形品であることを考慮すると、混入品ではなく他の大溝出土土器群と同時期の所産と捉えるのが妥当であろう。7世紀中頃以降の須恵器杯Hについては水城跡の資料の存在などから以前から注目されていた。近年では、杯Hの一部は7世紀第4四半期まで存在する可能性が指摘されている(久住・長2023)。これらは、口縁部の立ち上がりが著しく低い点や一部は平底気味のものがある点で、本資料と同様の傾向を示す。一方で、他の資料が口径が9cm前後であり、本資料の口径が10.4cmであり差異を示す。

④須恵器四耳壺(5) 口縁部が短く直立する抹角平底の小型短頸壺である。肩部の4ヶ所に縦耳を貼り付ける。類例を見出しがたい一点ものであるが、7世紀の資料で縦耳を有する小型壺類として、善一田遺跡4次15号墳I区周溝(8)や野添遺跡9次包含層(6)に類例がある。なお、善一田遺跡4次15号墳IV区出土例は、耳の数は不明であるが器形・量量が類似する資料(7)がある。

⑤短頸壺(9) 体部は肩の張りが強く、底部は平底である。頸部の締まりは弱く、口縁部は外反しながら短く立ち上がり、口縁端部は丸みを帯びる。高台はやや高く、端部は外側への張り出しが顕著である。

牛頭窯跡群の短頸壺は、胴部最大径が上位にあり肩が張る形態のものから、胴部最大径が下位にあるものへ変化することが明らかになっている。下原幸裕氏の集成(下原2012)の中で、牛頭窯跡群の中で古相(7世紀後半～8世紀前半)に位置付けられている井手窯跡群38・39号窯跡灰原出土例は体部が偏球形で頸部の締まりは強い。口縁部は直立して立ち上がり、口縁端部は面取りする。底部は断面方形のものが主体である。また、8世紀第1四半期が下限とされる大宰府政庁中門・南門跡出土の2例(10・11)はいずれも井手窯跡群38・39号窯跡灰原出土例に近い。

本例は、8世紀前半以前の既知の資料とは、口縁部を面取りしない点や高台端部が顕著に張り出す点、頸部付け根の締まりや肩の張りが弱い点などで異なる特徴を有している。年代的にも福岡平野最古級の短頸壺に位置付けられる可能性があり、生産地や出現の経緯・系譜等を含め注意が必要な資料である。

⑥脚付壺(13) 球形の体部に高い高台がつく。口頸部は外反して立ち上がり、頸部付根に小さな三角突帯を貼り付ける。口縁部外面を肥厚し、外形は受口状(二重口縁)に見える。三角突帯や受口状口縁は新羅土器と共通する要素であり、新羅土器模倣品と評価できるが、それ以外の要素は須恵器そのものである。近い資料として堤ヶ浦古墳群SK18の脚付壺(14)があり、明確な二重口縁となる資料である。

⑦軟質系土器(15) 小型の甕で、外面横方向の擬格子タタキ目、内面縦方向の平行文当具痕が残る。内面平行文当具痕の存在から、新羅・加耶系の軟質系土器に位置付けられる。なお、博多湾沿岸地域の軟質系土器は、6世紀中頃～7世紀前半に多く、7世紀中頃に減少し、7世紀後半にはほぼ消滅する。こうした中で、本資料は7世紀後半段階の希少な軟質系土器である。7世紀中頃以降の可能性のある資料として、善一田遺跡4次土坑墓群(ST03・ST07)の副葬品に事例がある(16・17)。7世紀後半の軟質系土器が集落遺跡にはなく、墳墓のみに伴うことから、墳墓に対する副葬・供献用として軟質系土器が残存する可能性がある。

⑧新羅土器壺(18) 偏球形の胴部に太く短い頸部がつくことが特徴である。文様は単体スタンプ二重円点文と縦長連続(列点)文(宮川氏のA手法・一部B手法あり、重見氏のT手法)である。ここでは、時期・生産地を検討した上で、意義について触れたい。

【時期の推定】 宮川氏は縦長連続文の出現を7世紀後半に位置付け、施文方法はA→B→C手法の方向で変化するとし、B手法は8世紀に出現すると位置付けた(宮川1987)。これに対し重見氏はA・B手法は同一の施文方法の表現の差と判断しT手法と位置付けた(重見2012)。朴成南氏は縦長連続文の成立を7世紀後半(第4四半期)とし、このうちB・C手法の出現を8世紀初頭(第1四半期)に位置付けた(朴2022)。文様構成・施文方法からみて、7世紀第4四半期～8世紀第1四半期に位置付けられ、ほかの土器群の時期とも矛盾はない。

【生産地の推定】 7世紀以降の新羅土器壺の中で主流となる長頸壺は、7世紀後半以降は頸部は細長く、体部下半に最大径があり横に大きく張り出すことが特徴である。これに対し本例は、頸が太く短い球形胴で体部上半に最大径がある点で特異で、器壁が非常に厚い点も特徴である。太く短い頸部に注目して類例を探したところ、大邱・達城地下里遺跡34号墳(スタンプ水滴文+二重円文:7世紀中頃以前:19)、金海・礼安里古墳群78号墳(スタンプ三角文+円点文:7世紀中頃以前:20)、大邱・時至地区古墳群9号石室墓(ヘラ書き三角文+二重円文:7世紀前以前:21)、晋州・武村IV-II地区平地120号井戸(縦長連続文+二重円文:統一新羅:22)、扶余・陵山里寺跡第9次調査北辺建物2(二重円文+水滴文)などで確認できる。こうした特徴を有する壺は、新羅の首都である慶州においては類例を見出し難く、旧加耶地域・旧百濟地域を含む周縁部に分布しており、生産地の推定に繋がる可能性がある。また、本例と類似した文様構成をもつ新羅土器が、唐山古墳群に近接する善一田古墳群で確認されている。善一田例は、口縁部が短く直立する短頸壺で、こうした器形の土器は、7世紀前半以前に主流となるものであり、7世紀後半以降の事例は類例を見出したい。根拠を示すことはできないが、新羅中心部以外において古い器形が残存する可能性を想定している。唐山例・善一田例ともに朝鮮半島で類例がないのであれば、あるいは日本列島において製作した忠実再現品の可能性もある。今後、胎土分析等を通じて検証する必要がある。

【意義】 完形品の新羅土器が7世紀第4四半期～8世紀第1四半期に限定できる須恵器とともに比較的良好な状態で出土した点で重要である。近接する善一田古墳群でも、類似する文様構成の新羅土器が7世紀第4四半期に位置付けられる須恵器と伴っており、新羅土器と須恵器の並行関係を検討する上で定点となる資料である。

また、7世紀後半以降は、全国的に古墳に伴う新羅土器が皆無に近い状況の中で、当地域では2例の新羅土器が確認された。当地域で6世紀中頃に始まる新羅・加耶地域との交流が長期間維持され続けたことを示す非常に重要な資料といえる。

参考文献

- 大野城市教育委員会2016『野添遺跡群5－野添遺跡第9次調査－』大野城市文化財調査報告書第140集
大野城市教育委員会2017『乙金地区遺跡群23－善一田遺跡第4次調査－』(上巻)大野城市文化財

調査報告書第159集

久住猛雄・長直信2023「九州島における飛鳥時代の土器編年—土器検討部会のまとめと遺跡動態分析にあたっての留意点—」『集落と古墳の動態Ⅳ—飛鳥時代—』第24回九州前方後円墳研究会大会発表資料集（第1分冊）

重見泰2012『新羅土器からみた日本古代の国家形成』学生社

下原幸裕2012「いわゆる薬壺形短頸壺の基礎的検討—福岡平野を中心に—」『九州歴史資料館研究論集』37

福岡市教育委員会1987『堤ヶ浦古墳群』福岡市埋蔵文化財調査報告書第151集

土田純子2017『東アジアと百済土器』同成社

寺井誠2019『渡来文化の故地についての基礎的研究—新羅・加耶の要素を中心として—』日本学術振興会科学研究費補助金研究成果報告書

宮川禎一1987「文様からみた新羅印花文陶器の変遷」『高井悌三先生喜寿記念論集 歴史学と考古学』

（韓国文献）

大東文化財研究院2015『達城城下里遺跡Ⅲ（古墳篇6-2）』大東文化財研究院学術調査報告第73輯

嶺南文化財研究院2013『大邱 時至地区古墳群Ⅱ（4）』嶺南文化財研究院学術調査報告第206冊

朴成南2022『統一新羅土器様式の研究』雄山閣

釜山大学校博物館1993『金海礼安里古墳群Ⅱ』釜山大学校博物館遺跡調査報告第15輯

三江文化財研究院2011『晋州 武村Ⅳ-Ⅱ地区平地（1）』

韓国伝統文化大学校考古学研究室2010『扶余 陵山里寺跡第9次発掘調査報告書』

3 唐山遺跡第2次調査2号墳出土暗文土師器の位置付け

山元 瞭平

(1) はじめに

唐山遺跡第2次調査2号墳からは暗文土師器が出土した(第48図191)。暗文土師器は飛鳥・奈良時代において、畿内を中心に消費された特徴的な土器である。金属器を志向して生み出されたこの土器には、暗文やヘラミガキが多用され、金属器特有の質感が表現されている。九州では7世紀第2四半期頃から認められるが、在地の土器様相に組み込まれることはなく、限定的な在り方を示す。筆者はかつて博多湾沿岸地域における暗文土師器の出土状況について整理し(上田・山元2023)、以下の点を示した。

- ①福岡平野・早良平野とも7世紀第2四半期頃に、畿内産暗文土師器の搬入が始まる。
- ②早良平野では7世紀中頃に、地元で模倣した暗文土師器を古墳へと副葬する事例が増加する。
- ③福岡平野では7世紀中頃に出土例が増加し、模倣品・搬入品が混在する。古墳への副葬は希薄であり、那珂遺跡群(福岡市)や博多遺跡群(同)といった官衙・港湾関連の遺跡、前ノ原遺跡(春日市)や平蔵遺跡(那珂川市)といった大宰府外郭線に近い遺跡で出土する。
- ④早良平野では8世紀以降姿を消すが、福岡平野では8世紀も安定的に出土し、特に大宰府や博多遺跡群への搬入品が多い。

このように、博多湾沿岸地域では東の福岡平野、西の早良平野で暗文土師器の動向が大きく異なる。こうした点を踏まえ、唐山遺跡出土資料の位置付けを図りたい。なお、用語については、前稿同様に暗文の施された土師器を「暗文土師器」と総称し、畿内から搬入されたものを「搬入品」、地元(九州)で生産されたものを「模倣品」と呼ぶ(註1)。器種の分類名称は、奈良文化財研究所のものに拠る。また、資料の時期的位置付けには共伴した須恵器の年代観を用いることとし、牛頭窠跡群の須恵器編年(舟山・石川編2008)を使用した。

(2) 唐山遺跡第2次調査2号墳出土資料の概要

資料は底部から体部にかけて丸みを帯びた器形で、畿内における土師器杯Cに当たる。口径15.6cm、器高5.4cmを測り、径高指数(註2)は34.6である。口縁端部の形状は摩滅により不明瞭であるが、本来は面取りしている可能性がある。外面も器面の剥離が著しく、口縁付近にミガキが残る程度である。内面には一段の放射状暗文が施される。底部内面の中央に二重の円形くぼみが認められ、外側は幅5mmの浅いくぼみ(凹線)が直径4cm程の円を描く。内側は直径1.5cm程度のくぼみで、断面をみると中央に向かってすり鉢状をなす。くぼみは暗文の施文後に、指によるナデで付けられたものとみられる。2号墳の羨道入口部黄褐色土上面から牛頭窠編年V期に位置付けられる須恵器杯G蓋・身(第48図189・190)とともに出土している。

(3) 類例の検討

結論から先に述べると、2号墳の資料は模倣品とみられる。そこで、博多湾沿岸地域における土

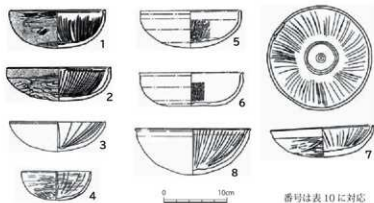
表10 暗文土師器一覧

No	遺跡名	所在地	遺構名	出土場所	法量 (cm)		径高 指数	赤彩	円形 くぼみ	須恵器			文献 (報告書)
					口径	器高				IVB	V	VI	
1	鋤崎古墳群 A 群	福岡市西区今宿	9号墳	不明	15.0	6.0	40.0	○	○				福岡市506集
2				玄室	16.3	5.3	32.5	○	○				福岡市52集
3	金武古墳群	福岡市西区金武	乙石 3号墳	玄室	15.0	4.7	31.3	○	○				福岡市1280集
4			810号墳	羨道・前庭部	10.8	4.5	41.7	○	○				
5	金武古墳群 8次	福岡市西区金武	D1号墳	羨道 or 玄室	15.8	5.9	37.3	○	○				
6					16.4	5.3	32.3	○	○				
7	東油山古墳 E 群	福岡市南区検原	2号墳	玄室	16.4	4.7	28.7	○					福岡市823集
8	柏原古墳群	福岡市南区柏原	81号墳	不明	18.2	7.2	39.6	○					福岡市125集
9	唐山遺跡2次	大野城市乙金東	2号墳	羨道	15.6	5.4	34.6		○				本書

土師器杯 C の模倣品と比較し、位置付けを図ることとする。

始めに、搬入品と模倣品を区別する際の指標を示す。模倣品にしから認められない特徴には、下記のものがある。

- ①外面に赤色顔料を塗布する。
- ②底部内面中央に円形のくぼみを有する。



第75図 暗文土師器実測図 (S=1/6)

これらは、畿内の資料には認められない特徴である(註3)。

①は、畿内産の暗文土師器特有の発色を意識して塗布された可能性が高い。②は一重と二重の両者があり、後者の方が多い。二重の場合、外側は幅5mm程度の浅いくぼみ(凹線)が直径4cm程度の円を描く。内側は直径1.5cm程度のくぼみで、断面すり鉢状をなす。この円形くぼみは、内面の俯瞰図面で表現されたり、報告文で言及されたりと、以前から認識されてきた。一方で、実測図の断面にくぼみが表現されるのみで、実際に資料を確認しなければ判別できない場合も多い。前稿でも指摘したように、指によるナデで意図的に付けられたものだが、その意図や役割等は明らかにできていない(上田・山元2023)。

今回は②の特徴を有する資料に焦点を絞り、博多湾沿岸地域における類例を収集したところ、9点確認できた(表10・第75図)。以下では各資料の概要について述べる。

①土師器杯 C 模倣品の諸例

鋤崎古墳群 A 9号墳 2点出土しており、1は口径15.0cm、器高6.0cm、径高指数40で、丸底気味である。2は口径16.3cm、器高5.3cm、径高指数32.5で平底気味である。いずれも口縁部は面取りされ、外面は下半部がケズリ、上半部はミガキ調整である。外面には赤色顔料が塗布され、内面には一段の放射状暗文がめぐる。また、2のみ口縁部付近に鋸歯状の暗文が施される。どちらも底部中央には円形くぼみが認められる。1は出土位置の記述がないが、2は玄室内の第1・2面から

見つっている。同じ面から出土した須恵器には平底の杯 A や高台を持つ杯 B があり、牛頭編年 VI 期に位置付けられる。

金武古墳群乙石 C3 号墳 口径 15.0cm、器高 4.7cm で、径高指数 31.3 と扁平な印象を受ける。口縁端部の外面には沈線がめぐり、外面は下半部がケズリ、そのほかはナデ調整である。内面には放射状暗文が一段めぐり、外面は赤彩される。底部内面に直径 1cm ほどの円形くぼみがある。玄室から出土しており、伴出した須恵器には杯 H と杯 B がある。前者は IV B 期、後者はかえり付の蓋を伴う牛頭編年 VI 期に相当するもので、時期幅を有する。

金武古墳群 8 次 B10 号墳 口径 10.8cm、器高 4.5cm で、径高指数 41.7 で丸底気味である。口縁端部は丸くおさめる。外面にはミガキが密に施され、内面には放射状暗文が一段めぐり、外面は赤彩されており、顔料が内面にも垂れている。底部内面に直径 2.5cm ほどの円形くぼみがある。義道・前庭部から出土しており、共に確認された須恵器には杯 H・杯 G・杯 B がある。いずれの土器群に伴うかは判断できず、牛頭編年 IV B～VI 期と時期幅を有した資料である。

金武古墳群 8 次 D1 号墳 2 点出土しており、5 は口径 15.8cm、器高 5.9cm、径高指数 37.3 で、丸底気味である。6 は口径 16.4cm、器高 5.3cm、径高指数 32.3 で平底気味である。丸底・平底の二者が存在する点は鋤崎古墳例と似る。いずれも口縁端部は面取りされる。両者は調整や胎土もよく似ており、外面は上半部がミガキ、下半部がケズリで調整され、赤彩されている。内面は放射状暗文が一段めぐり、底部中央には円形くぼみが認められる。報告書の記述から石室内の出土と判断できるが、詳細な出土位置は不明である。ともに報告された須恵器には平底の杯 A や高台を持つ杯 B があり、形態から牛頭編年 VI～VII A 期に位置付けられる。

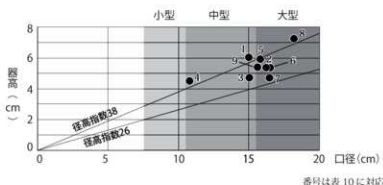
東油山古墳 E2 号墳 口径 16.4cm、器高 4.7cm で、径高指数 28.7 と扁平な印象を受ける。口縁部は面取りされる。外面にはミガキが施され、底部はケズリにより調整される。赤彩はない。内面には放射状暗文が一段施される。底部内面の中央には円形くぼみが認められる。須恵器とともに玄室内に副葬されていた。須恵器には杯 G と IV A 期相当の大ぶりの杯 H が存在するが、報告書では杯 G 身と並置されていたとの記述があるため、牛頭編年 V 期前後に位置付けられようか。

柏原古墳群 H1 号墳例 口径 18.2cm、器高 7.2cm、径高指数 39.6 を測り、半球形で深みがある。口縁端部は面取りされ、外側へつまみ出される。外面はナデ調整で、赤彩されない。内面には放

射状暗文が一段めぐり、底部内面中央に円形くぼみが認められる。出土位置は不明。共に報告された須恵器は杯 G が主体で、牛頭編年 V～VI 期に位置付けられる。

②形態的特徴

法量は口径で見た場合、最小値 10.8cm、最大値 18.2cm であり、15～16cm 台のものが



第76図 暗文土師器法量分布図

多い。畿内における杯Cの口径分布については、11.5cm未満の小型品、11.5cm～15.5cmの中型品、15.5cm以上の大型品に分けられているが（大澤2019）、これに照らせば、中型品と大型品の境に分布の中心が認められる（第76図）。この点から、中～大型品を好んで製作した可能性がある。器高の深浅は、畿内では時期差を示す属性であるため、後ほど検討する。口縁部は面取りするものが多く、畿内の暗文土師器を強く意識していることが分かる。暗文については、いずれも一段放射状のものであり、3・7は密度が低く、個体により精粗がある。外面には赤色顔料を塗布するものもあるが、すべてに認められる属性ではない。底部内面に認められる円形くぼみについては、二重の円のもののが最も普遍的だが、中心に小円だけを設けるもの（第75図3）もあり、バリエーションがある。

③分布と出土状況

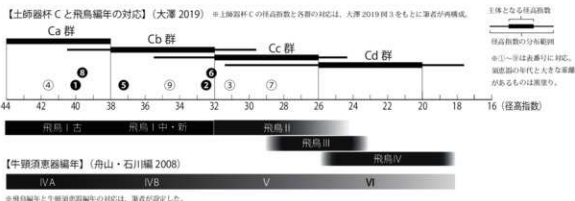
上記の特徴を備える模倣品は唐山例を除くと、いずれも早良平野一帯で確認されている。これらはすべて古墳から出土しており、石室内で他の土器類とともに副葬される、あるいは羨道部への供献事例が多い。

④時期的位置付け

模倣品はいずれも古墳から出土しており、時期を絞り込むことが難しいものの、牛頸編年のV～VI期の須恵器とともに出土した事例が多いことから、概ね7世紀中頃から後半に盛行したものとみられる。畿内における土師器杯Cは、7世紀を通じて低平化することから、飛鳥・藤原地域における土器群の時期決定の指標となっている。模倣品も同様の变化を辿るのであれば、在地土器編年の年代決定に有効となるため、検討を加える。

畿内における土師器杯Cは径高指数から4つの段階に大別されており、Ca群：飛鳥Ⅰ古相、Cb群：飛鳥Ⅰ中～新相、Cc群：飛鳥Ⅱ・Ⅲ、Cd群：飛鳥Ⅳに対応する（大澤2019）。各群の径高指数は互いに重複しながらも、主体は低平化へと向かう。須恵器の年代観に基づくと、模倣品と対比すべき畿内の資料はCc・Cd群となる。これを参考に今回抽出した資料群の径高指数分布を第77図に示した。大きな時期幅の見込まれる資料（③・④）を除くと、須恵器の年代観と齟齬のないもの：⑦・⑨、須恵器の年代観と大きく乖離するもの：①・②・⑤・⑥・⑧の二者に区別できる。後者はいずれも須恵器の年代観よりも古手の様相を呈する。須恵器から見れば牛頸編年VI期頃、すなわち7世紀後半に位置付けられるため、畿内における土師器杯CのCd群に対応するならば矛盾がない。しかし実際には、飛鳥Ⅰ（7世紀前半）のCa・Cb群の領域に含まれ、深みがある古手の様相を示しており、須恵器の年代観から導き出される位置付けとは大きく乖離している。

こうした須恵器の年代観との乖離には、いくつかの要因が想定できる。一つは模倣品の製作から古墳の副葬までの時期差が見込まれる場合である。古墳出土資料という点から最も支持できる要因と言える。加えて、継続的な土器副葬により須恵器にも時期幅が存在するため、本来の所属時期を誤認しているという人為的な要因も否定できない。一方で、製作から副葬までの時期差は存在しない場合も考えられ、模倣品製作者が畿内における土師器杯Cの変化を把握していない、あるいは把握しているが、意図的に古手の形態のものを製作し続けたというパターンもあるだろう。資料が乏しい現状では、いずれの解釈がより確からしいかは判断できないが、少なくとも畿内産の土師器杯



第77図 畿内産暗文土師器杯Cの径高指数と模倣品の対応関係

Cとその模倣品が同様の变化を辿る可能性は低いものとみられる。よって、在地土器の年代観を土師器杯C模倣品から推測することも困難である。今後は径高指数以外の属性についても検討を進め、各資料の型式学的な前後関係を再度検証するとともに、在地土器と土師器杯C模倣品の良好な共伴事例を収集し、両者の時期的乖離の要因を探る必要がある。

(4) まとめ

唐山2次2号墳出土の暗文土師器と類例の比較を通して、下記の点を明らかにした。

- ・唐山例は模倣品であり、類例は早良平野一帯に分布する。また、唐山例と同じく古墳出土例が多い。
- ・模倣品は7世紀中頃から後半に盛行しており、唐山例もこの時期の所産である。

以上のとおり、唐山例は形態・出土状況ともに早良平野的な在り方を示す資料である。冒頭でも述べたとおり、福岡平野における暗文土師器の古墳副葬事例は極端に少なく、唐山例は特殊な存在と評価できる。早良平野における暗文土師器は、古墳出土事例の多さから、畿内との関係を示す貴重品であり、なおかつ属人的な性格のものと評価されており(上田・山元2023)、唐山例も同様の解釈で捉えておきたい。

また、今回注目した底部内面に円形くぼみを有する模倣品は、早良平野を中心に分布する点が判明したものの、生産地を早良平野とする根拠はなく、唐山例の生産地や入手過程に言及することはできない。さらに、管見の限り円形くぼみを持つ資料は、福岡県小郡市上岩田遺跡、熊本県熊本市二本木遺跡群など、九州の西岸地域に分布しており、近年は鹿児島県指宿市尾長谷迫遺跡でも確認されている(註4)。博多湾沿岸地域のみに認められる特徴でない点は注意すべきだが、類例の分析を進めることで、どの地域で出現し拡散したのか、その過程をより具体的に復元できるものと期待される。

執筆に際しては、下記の方々や機関に多くのご教示とご協力を得た。記して感謝申し上げます。

大澤正吾 小田裕樹 久住猛雄 松崎大嗣 森川実 福岡市埋蔵文化財センター 独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所

註1) 大澤正吾氏に唐山出土資料を実見いただいた際、胎土や発色、器面の剥離の仕方も畿内のも
のと遜色ないとのご教示を得た。一方で、色調の再現が難しいためか、赤彩する資料も存在する
ことから、模倣レベルは一様でない。現状では模倣品とひとくくりにはしているが、忠実再現品・
模倣品といった枠組みでの区分も可能であり、今後検討を深める必要がある。

註2) 口径に対する器高の比率を示す数値。 $\text{器高} \div \text{口径} \times 100$ で算出。

註3) 小田裕樹氏のご教示による。

註4) 正式な報告書は刊行されていないが、令和6年1月に日本最南端の暗文土師器として大きく
報道されており、報道記事の写真からも底部内面の円形くぼみが確認できる。

参考文献

- 上田龍児 山元瞭平 2023「7世紀の博多湾沿岸地域」『集落と古墳の動態Ⅳ－飛鳥時代－』九州
前方後円墳研究会
- 大澤正吾 2019「飛鳥時代における土師器杯C・杯Aの変遷とその区分」『飛鳥時代の土器編年再
考』奈良文化財研究所・歴史土器研究会
- 舟山良一 石川 健 編 2008『牛頸窯跡群－総括報告書1－』大野城市文化財調査報告書 第77
集 大野城市教育委員会

図出典

第75図：各報告書から引用（引用文献は表10を参照）

第76図：山元作成

第77図：大澤2019図3をもとに山元作成

4 唐山遺跡第2次調査2号墳出土馬具の検討

神 啓崇

(1) はじめに

唐山遺跡第2次調査2号墳（以下、「唐山2号墳」という。）馬具の編年の位置と馬装を検討する。唐山2号墳では、玄室排水溝、前室床面及び前室排水溝から1組の馬具が出土した。攪乱されているので、副葬状態を示していないことは、馬装の検討に際して留意する必要がある。以下に内訳を示す。

表11 唐山2号墳出土馬具の内訳

種類	内容	出土位置（点数）
轡	鉸具造立間環状鏡板轡	前室床面（1）
鞍	鉄製鞍座金具付鉸具	前室床面（1）、前室排水溝（1）
	鉄製鞍鉸具	前室床面（2）
	鉄製菱形座金具破片	前室床面（6）
鍔	吊金具破片	前室床面（5）、前室排水溝（1）
帯飾金具	菱形帯飾金具	前室床面（3）、前室排水溝（1）
	飾金具（破片を含む）	前室床面（10）、前室排水溝（2）、玄室排水溝（2）
鉸具	鉄製鉸具（大）	前室床面（3）
	鉄製鉸具（破片を含む）	前室床面（6）

(2) 編年の位置

編年の位置を比較的捉えやすい轡、鞍金具を取り上げて検討する。

轡 鉸具造立間環状鏡板轡は、TK43型式期段階に出現し、鏡板が大型から小型へ（岡安1984・1985）、鉸具の刺金がT字型刺金から蕨手型刺金へ変遷する（鈴木2008：pp. 166 - 167）。鉸具の形状や鏡板への接続方法から、鉸具可動式、鉸具有頸固定式、鉸具無頸固定式に分類でき、障泥金具や鉸具造立間鍔轡の影響を受けて成立したとみる意見がある（大谷2019）。

唐山2号墳轡は、鏡板全長6.6cm以上、最大幅6.2cmの小型で、鉸具は有頸固定式で蕨手型刺金である。この量や形態を踏まえれば、飛鳥Ⅰ期後半段階に位置付けられる。

鞍金具 唐山2号墳では、前輪、後輪に使う鉄製鞍鉸具が出土している。座金具を伴う2点が後輪に使うものである。鉸具に銑着した座金具は円形扁平部しか残っていないが、菱形突起片の基部円形部の形態と近似することから、本来は破片で出土した菱形突起片が扁平円形部の縁に付属していたと考える。なお、扁平円形部と菱形突起部の接合検討を試みたが、発掘調査後に補修がなされており確認できなかった。菱形突起を持つ座金具は、京都府神宮谷3号墳、奈良県烏土塚古墳、栃木県石下14号墳などに類例があり、TK209型式期段階以降のものである（宮代1996）。

以上の検討から、唐山2号墳馬具の編年の位置を飛鳥Ⅰ期後半段階と考える。

(3) 馬装

唐山2号墳の馬装について、面繫、胸繫、尻繫と鞍、鍔を取り上げて検討する。

面繫 面繫には、鉸具造立聞環状鏡板轡と鉄製鉸具、帯飾金具を使う。X字脚辻金具（菱形帯飾金具）は、2点1組で出土する傾向があり、馬形埴輪の表現を踏まえて、面繫の交差部に付くとみる意見がある（宮代1997）。ただし、菱形帯飾金具は、胸繫に装着する馬形埴輪の表現もあるので、別の場所に装着していた可能性も残る。唐山2号墳の菱形帯飾金具は4点あるので、4点すべて面繫に装着する場合は複条系、もしくは2点のみ面繫の場合は単条系が想定できるが、大小2点ずつ合計2組出土しているので、どちらも面繫交差部につく複条系とみたほうが理解しやすい。

胸繫・尻繫 胸繫や尻繫の装飾を示す杏葉や鈴などの部品は出土していない。胸繫と尻繫は、繫の革帯とその要所に使う帯飾金具、鉸具で構成される。

鞍 鉄製鞍鉸具以外に鞍を構成する部品は出ていないため、鉄製鞍鉸具を使う木装鞍が想定できる。鞍鉸具のうち、後輪には扁平円形で菱形突起を持つ座金具がつく。1つの座金具に菱形突起がいくつか付いていたのかは分からない。

鍔 鍔本体は残っていないので、木芯鍔であろう。鉄製吊金具、鉄製鉸具（大）2点1組を使う。吊金具は1対分出土したが、それぞれ形状が異なるので、どちらかは補修品の可能性がある。

（4）結語

唐山2号墳馬具は、飛鳥I期後半段階の倭系の馬装を構成するものである。鉸具造立聞環状鏡板轡を伴う馬装は、福岡県内では福津市手光波切不動古墳、内殿天田4号墳、宇美町観音浦南12号墳、15号墳、19号墳、33号墳などで出土している。特に観音浦南古墳群は、唐山古墳群と同じ四王寺丘陵上に立地し、唐山峠ルート（西垣2024）に近接した位置に造営される。この馬装が福岡平野と糟屋平野を結ぶ交通路付近に集中しているのは興味深い。人・物の輸送や、輸送に伴う馬匹の管理・供給に関与した被葬者像がうかがえる。

参考・引用文献

- 大谷宏治 2019「鉸具造立聞環状鏡板付轡の成立について（試論）」『和の考古学—藤田和尊さん追悼論文集—』ナベの会 pp.263-268
- 岡安光彦 1984「いわゆる「素環の轡」について—環状鏡板付轡の型式学的分析と編年—」『日本古代文化研究』1 pp.95-120
- 岡安光彦 1985「環状鏡板付轡の規格と多変量解析」『日本古代文化研究』2 pp.9-20
- 鈴木一有 2008「原分古墳出土馬具の時期と系譜」井鍋譽之編『原分古墳 調査報告編』（静岡県埋蔵文化財調査研究所調査報告 第184集） pp.163-174
- 西垣彰博 2024「糟屋屯倉と評衡」『律令国家成立期の地域動態1—筑紫から大宰府へ—』（古代官衙・集落研究会特別研究集会 研究報告資料） pp.西垣1-西垣37
- 宮代栄一 1996「古墳時代の金属装鞍の研究—鉄地金銅装鞍を中心に—」『日本考古学』3 pp.53-82
- 宮代栄一 1997「古墳時代の面繫構造の復元—X字脚辻金具はどこにつけられたか—」『HOMINIDS』1 pp.49-70

5 鉄釘に残存する木材痕跡を用いた木棺構造の想定復元

小林 啓

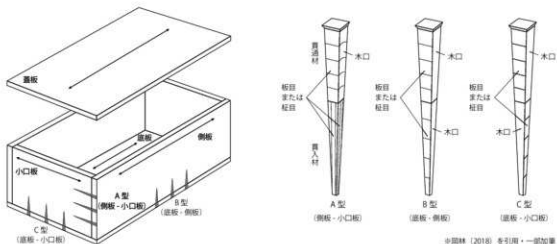
(1) はじめに

唐山遺跡（2次）の調査では1号墳の玄室から数点の鉄釘が出土している。これら鉄釘は木棺の固定に用いた緊結具と考えられている。木棺自体は経年により腐朽し、本来の形状や構造は完全に失われているが、鉄釘の表面には木棺の痕跡を示す木材がわずかながら残存している。本稿では鉄釘に残存する木材を解剖学的形質により分類し、各釘の木材パターンから木棺構造を想定復元した結果について報告する。

(2) 資料と方法

資料は唐山遺跡1号墳から出土した鉄釘6点である。玄室内は盗掘等による影響のためか出土遺物は殆どなく、鉄釘も木棺を構築するには明らかに少ない。一方、出土した鉄釘は何れも初葬時床面から検出されており、当初の位置から大きく動いていない可能性も考えられる。

鉄釘の観察は実体顕微鏡（LEICA S9i）にて行った。鉄釘の頭部側の木材（以下、貫通材）と先端部側の木材（以下、貫入材）を解剖学的形質により分類し、各釘の木材パターンを特定した。なお、器物の基礎的構造及び釘の木材パターンは先行研究における定義を用いた（第78図・岡林2018）。



第78図 器物の基本的構造（左）と釘の木材パターン（右）

(3) 結果

鉄釘6点を観察した結果、A型3点、B型1点、B・C型1点、A～C型1点を確認した。個々の観察結果を表12、顕微鏡写真を第81図に示す。

A型の鉄釘は、№98・100・102である。№98は貫通材が「木口－柁目」、貫入材が「板目－柁目」でありA～I型に該当する（小林2024）。№100・102は貫入材のみで「板目－柁目」である。貫通材が未検出だが、貫入材の繊維方向が釘の長軸に平行することからA型と判別できる。

B型の鉄釘は、№103である。貫通材が「木口－柁目」、貫入材が「木口－柁目」でありB～I型

に該当する（小林2024）。

№101は貫入材のみで「木口－柾目」である。B型またはC型となるが、貫通材が欠損しているため両者を判別することはできない。№99は貫通材のみで「木口－柾目」である。A～C型の全ての可能性がある。貫入材が未検出のためこれらを判別することはできない。

（４）まとめ－木棺構造の想定復元－

観察の結果明らかとなった各釘の木材パターンを根拠に木棺構造を想定復元する。まず、木材パターンを特定した№98（A－I）と№103（B－I）から木棺の基礎構造を検討する。

№98（A－I）の貫通材は側板、貫入材は小口板の構造を示す。貫通材は「木口－柾目」、貫入材は「板目－柾目」であり、材の長軸方向と繊維方向が平行となることが分かる。従って、№98（A－I）の側板・小口板の木取りは板目材となる。№103（B－I）の貫通材は底板、貫入材は側板の構造を示す。貫通材は「木口－柾目」、貫入材は「木口－柾目」であり、材の長軸方向と木材の繊維方向が平行となることが分かる。№103（B－I）の底板・小口板の木取りも板目材となる。C型は出土しておらず未確認ではあるが、A－I型・B－I型が確認されていることから、木棺の基礎構造は板目材の組み合わせを想定できる。

次に木材の年輪の向きから各材の具体的な材の木取りを検討する。№98の貫通材（側板）は、年輪が釘の頭部側に向けて湾曲する（第79図）。木取りは木裏が木棺の外面と推定できる。№103の貫通材（底板）は、年輪が釘の先端側に向けて湾曲する（第79図）。木取は木表が木棺の外面と推定できる。

最後に木棺の推定位置について考察する。鉄釘の出土位置に木材パターンを反映させたものを第80図に示す。A型は玄室の短軸方向に分かれる様に出土しており、更に片側の№98と№100は一定の間隔を空けた位置にある。一辺を欠いているが、長方形の四方に配置した様な位置関係にある。出土した釘の点数が少なく可能性の域をでないが、木棺は玄室の短軸方向に主軸をもつよう納められていたことが推測できる。

表12 鉄釘の観察結果

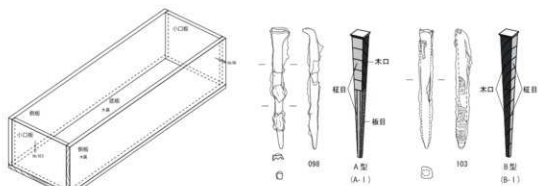
№	形状	貫通材	貫入材	木材パターン
98	完形	木口－柾目	板目－柾目	A型（A－I）
99	完形	木口－柾目	未検出	A～C型
100	完形	未検出	板目－柾目	A型
101	先端部のみ	－	木口－柾目	B・C型
102	先端部のみ	－	板目－柾目	A型
103	完形	木口－柾目	木口－柾目	B型（B－I）

参考・引用文献

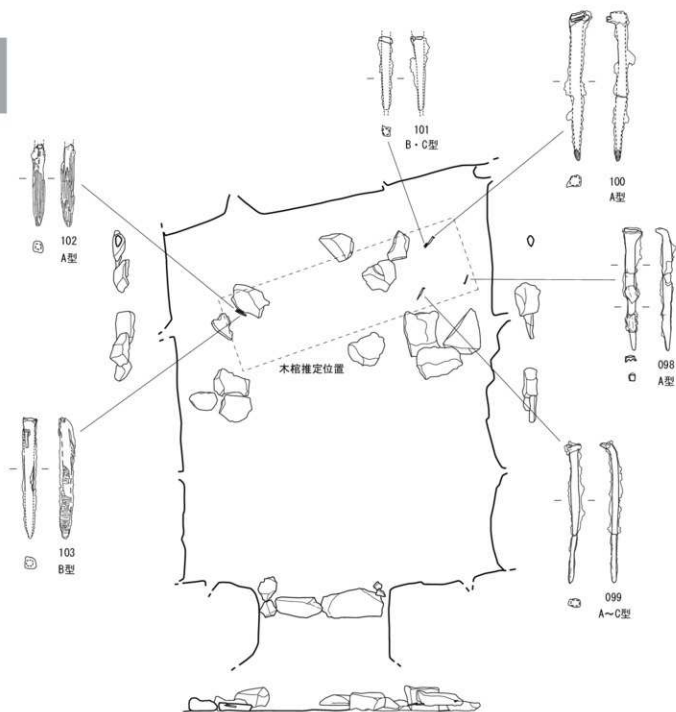
岡林孝作 2018「釘付式木棺の系譜と機能」『古墳時代棺槨の構造と系譜』同成社

小林啓 2024「鉄釘に残る木材痕跡を用いた木棺構造の復元的研究」『東北芸術工科大学研究紀要』

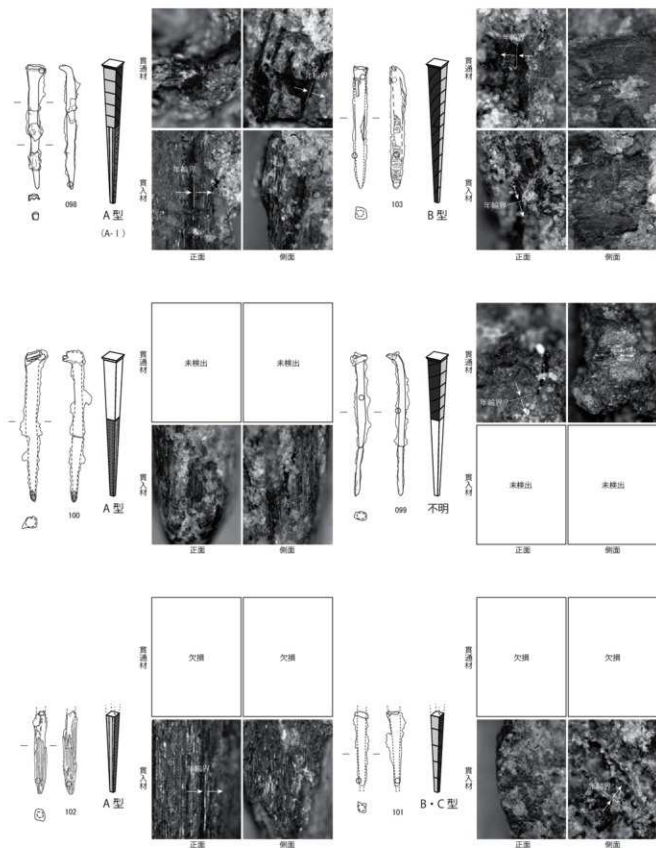
東北芸術工科大学文化財保存修復研究センター



第79図 鉄釘の木材パターンと材の木取り



第80図 鉄釘の出土状況と木材パターン



第81図 鉄釘の顕微鏡観察結果

6 唐山遺跡第2次調査出土玉類についての検討

森 春奈

(1) 唐山遺跡第2次調査出土玉類資料の位置づけ

唐山遺跡第2次4号墳では、製作年代がさかのぼる可能性がある玉類が出土している。翡翠製勾玉は、大賀氏による分類におけるNn型と考えられる。先行研究で、6世紀後半以降の北部九州地域ではNn型の翡翠製勾玉の出土量が他地域と比べて非常に多く、後期における製作の可能性も指摘されている(大賀2010, 2013)。

碧玉製管玉は、2点とも弥生時代前期末～古墳時代前期に流通していたものと考えられ、本古墳での副葬時期である後期に流通している片面穿孔され太身大型を呈する山陰系の碧玉製管玉が用いられていないという点は特徴的である。今回出土した半島系の管玉もふくめ、古墳時代後期における碧玉製管玉の伝世品の出土は先行研究で一定数みられることが指摘されている(井谷2019)。

ガラス小玉、丸玉に関して、詳細な分析が行えていないため詳しく言及することはできないが、おそらく大半は古墳時代に主に流通しているものと考えてよいと思われる。出土状況もふまえると、これら翡翠製勾玉1点と碧玉製管玉2点、ガラス玉複数点がセットとして被葬者に副葬されていた可能性が高い。

対して、2号墳では、古墳時代後期に生産されていたと考えられる山陰系玉類の水晶切子玉が出土している。切子玉は後期中葉後半に出現し、後期末まで継続して製作される(大賀2009)。ただ、断面六角形のものがあるが、本古墳出土例が断面七角形であるという点は指摘しておきたい。

また、特筆すべき点として、2号墳出土の翡翠製勾玉は形態や石材の色調からはN型の範疇と考えられるが、両面穿孔であることから位置づけがやや難しい個体で、現時点では判断を保留しておきたい。

以上、2号墳では、位置づけの難しい翡翠製勾玉と後期に製作された水晶製切子玉、4号墳では、後期に北部九州地域で特徴的に多く出土する翡翠製勾玉、伝世品と考えられる碧玉製管玉、その他ガラス丸玉、小玉が出土している。

(2) 大野城市所在の古墳群出土玉類について

大野城市所在の後期古墳の中で、玉類が出土している古墳は、25基ある。簡単にではあるが、本古墳群出土玉類の類例が出土している古墳について述べる。

翡翠製勾玉は、全6点出土している。Nn型と判断できる翡翠製勾玉は、善一田古墳群2次2号墳、善一田古墳群4次18号墳、25号墳、牛頭中通古墳群6号墳、9号墳から出土している。

位置づけが難しいものとして本古墳群2号墳出土勾玉をあげたが、牛頭中通古墳群6号墳出土の翡翠製勾玉2点のうち1点は、石材や形態にNn型の特徴をもちながら、両面穿孔である。唐山古墳群の資料の方が石材の質は高く端正なC字形を呈しているの、同一のセットとは考えにくい、類例として重要であろう。

碧玉製管玉は多くの古墳から出土しているが、今回出土している半島系管玉と考えられるものは、

善一田古墳群4次26号墳、牛頸中通古墳群12号墳からそれぞれ1点出土している。本古墳群のほかには2点以上の出土例はみられない。

出土玉類の組成について、半島系碧玉製管玉と翡翠製勾玉がともに出土している例はほかに確認できなかった。

(3) まとめ

本古墳群の年代について、玉から示すことはかなり難しいが、2・4号墳ともに少なくとも6世紀後半に副葬が行われた可能性は指摘できるだろう。

後期における玉類の伝世品は、碧玉製管玉の他にも天河石製玉類などがあげられるが、具体的な入手・流通経路は現時点でははっきりとわかっておらず、近畿地域の関与の度合いが低いより在地的な流通での入手の可能性が提示されている（大賀2010；井谷2019；吉田・比佐2021）。

今回は筆者の力量不足によりかなわなかったが、本古墳群の例のみならず、周辺地域、そして北部九州全体の遺跡における玉類の出土状況やその他副葬品、歴史的環境をふまえて検討することで、より具体的な議論にふみこめるだろう。

謝辞

本稿の執筆にあたっては、九州大学人文科学研究院の辻田淳一郎先生、独立行政法人国立文化財機構奈良文化財研究所の谷澤亜里氏に多くのご助言・ご指導をいただきました。末筆ながら、感謝申し上げます。

また、機会をいただきました大野城市教育委員会の皆様にも記して感謝申し上げます。

参考文献

- 井谷朋子2019「古墳時代後期・終末期における玉類の『伝世』－島根県内出土の碧玉製管玉をてがかりに－」『古墳時代の玉類の研究』島根県古代文化センター，pp.125－141
- 大賀克彦2001「弥生時代における管玉の流通」『考古学雑誌』第86巻第4号，pp.321－362
- 大賀克彦2002「弥生・古墳時代の玉」『考古資料大観9 弥生・古墳時代 石器・石製品・骨製品』小学館，pp.313－320
- 大賀克彦2005「弥生時代における山陰系玉類の流通」『玉文化』第2号 日本玉文化研究会，pp.37－52
- 大賀克彦2009「山陰系玉類の基礎的研究」『出雲玉作の特質に関する研究－古代出雲における玉作の研究Ⅲ－』島根県古代文化センター・島根県埋蔵文化財調査センター，pp.9－61
- 大賀克彦2010「第4章 百留横穴墓群出土の玉類に関する諸問題」『百留横穴墓群』上毛町文化財調査報告書13，pp.68－76
- 大賀克彦2012「古墳時代前期における翡翠製丁子頭勾玉の出現とその歴史的意義」『古墳時代におけるヒスイ勾玉の生産と流過程に関する研究』平成21～23年度科学研究費補助金 若手研究(B)研究成果報告書，pp.49－60

- 大賀克彦2013「玉類」『古墳時代の考古学4 副葬品の型式と編年』同成社, pp.147-159
- 大野城市教育委員会1980『牛頸中通遺跡群』大野城市文化財調査報告書 第4集
- 大野城市教育委員会2015『乙金地区遺跡群17～善一田遺跡 第2・3・5次調査～』大野城市文化財調査報告書第144集
- 大野城市教育委員会2017『乙金地区遺跡群23』大野城市文化財調査報告書第159集
- 谷澤亜里2020『玉からみた古墳時代の開始と社会変革』同成社
- 吉田東明・比佐陽一郎2021「福岡県の天河石製玉類」『九州歴史資料館研究論集』46九州歴史資料館 pp.17-37
- 藁科哲男1997「宇木汲田遺跡出土のヒスイ製勾玉, 碧玉製管玉の産地分析」『佐賀県立博物館・美術館調査研究書』第22集 佐賀県立博物館, pp.3-64

圖 版



(1) 唐山遺跡第1次調査1号墳 遠景 (北東より)



(2) 唐山遺跡第1次調査1号墳 全景 (南東より)



(1) 調査前現況（北東から）



(2) 墳丘近景（南から）



(3) 墳丘Bトレンチ断面
（南東から）

(1) 墳丘Bトレンチ周溝断面
(南東から)



(2) 墳丘Cトレンチ周溝断面
(北東から)



(3) 墳丘Aトレンチ周溝断面
(北から)





(1) 墳丘Bトレンチ石室裏込め
(南東から)



(2) 墳丘Cトレンチ石室裏込め
(北から)

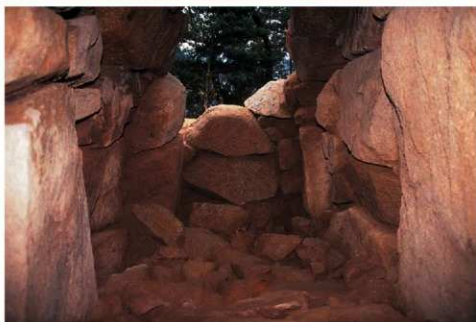


(3) 墳丘Aトレンチ石室裏込め
(北から)

(1) 閉塞状況（墓道から）



(2) 閉塞状況（石室から）



(3) 閉塞石一部除去（墓道から）





(1) 閉塞石除去後遺物出土状況
(墓道から)



(2) 閉塞石除去後遺物出土状況
(墓道から)



(3) 出入口部付近遺物出土状況
(墓道から)



(1) 出入口付近遺物出土状況
(羨道から)

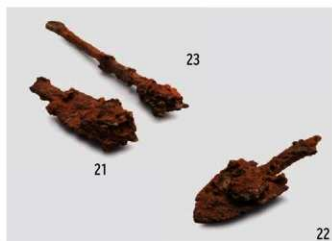


(2) 羨道敷石上土師器出土状況
(玄門から)



(3) 石室内耳環出土状況
(東から)

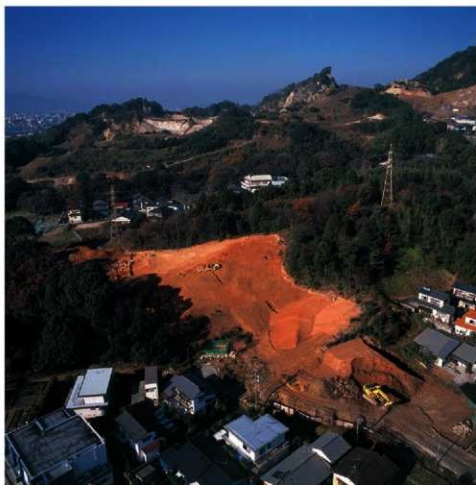




唐山遺跡第1次調査1号墳出土遺物（2）



(1) 第2次調査地全景
(南東上空から)



(2) 第2次調査地上空から南側
をのぞむ





(1) 1号墳墳丘全景（南上空から）

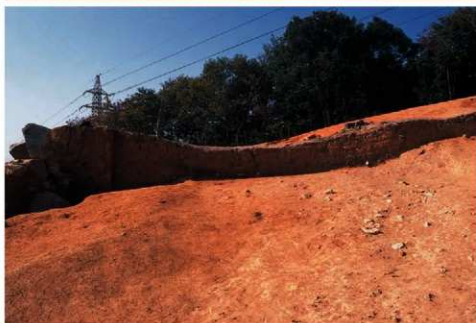


(2) 1号墳墳丘全景（東から）

(1) 1号墳Aベルト土層
(南から)



(2) 1号墳Bベルト土層
(東から)



(3) 1号墳Cベルト土層
(南から)

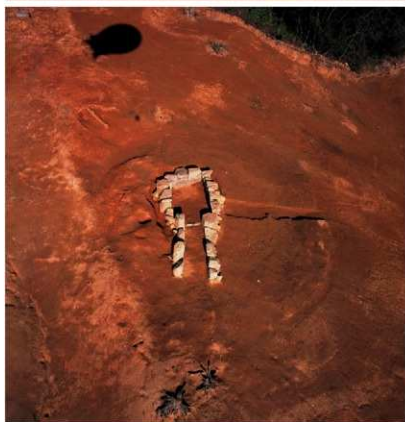




(1) 1号墳IV区墳丘土層（南から）



(2) 1号墳墳丘南側土層（南西から）



(3) 1号墳地山整形状況全景（上空から）

(1) 1号墳Ⅰ区墳丘内遺物出土状況①
(南西から)

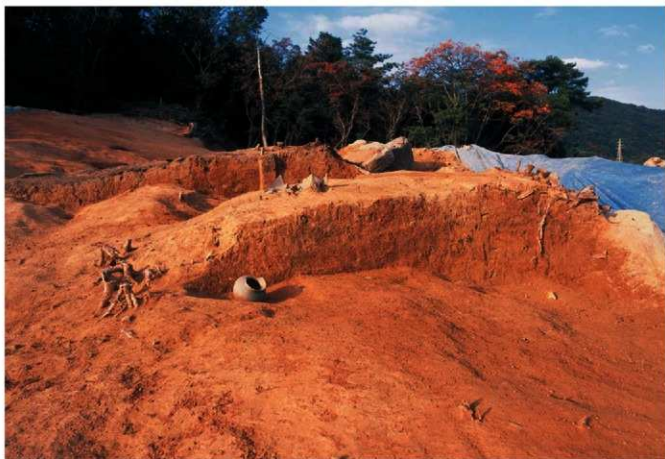


(2) 1号墳Ⅰ区墳丘内遺物出土状況①
(西から)



(3) 1号墳Ⅰ区墳丘内遺物出土状況①
(西から)





(1) 1号墳Ⅰ区墳丘内遺物出土状況②(南西から)



(2) 1号墳Ⅰ区墳丘内遺物出土状況②(南西から)



(1) 1号墳Ⅳ区遺物出土状況（南東から）



(2) 1号墳Ⅳ区遺物出土状況（南東から）



(1) 1号墳石室全景（南から）



(2) 1号墳東側玄門部（北西から）



(3) 1号墳西側玄門部（北東から）

(1) 1号墳玄室西側壁(南東から)



(2) 1号墳玄門部(北から)



(3) 1号墳追葬時床面(南から)





(1) 1号墳初葬時床面（南から）



(2) 1号墳羨道東側壁（南西から）



(3) 1号墳羨道西側壁（南東から）

(1) 1号墳閉塞石全景（南から）



(2) 1号墳閉塞部周辺遺物出土状況（南から）



(3) 1号墳閉塞石基底部全景（南から）





(1) 1号墳玄室奥壁側裏込め状況(北から)



(5) 1号墳玄室東側壁裏込め状況(東から)



(2) 1号墳玄室北東隅裏込め状況(北東から)



(6) 1号墳Aベルト石室掘方土層(南から)



(3) 1号墳玄室北西隅裏込め状況(北から)



(7) 1号墳Cベルト石室掘方土層(南から)



(4) 1号墳玄室西側壁裏込め状況(西から)

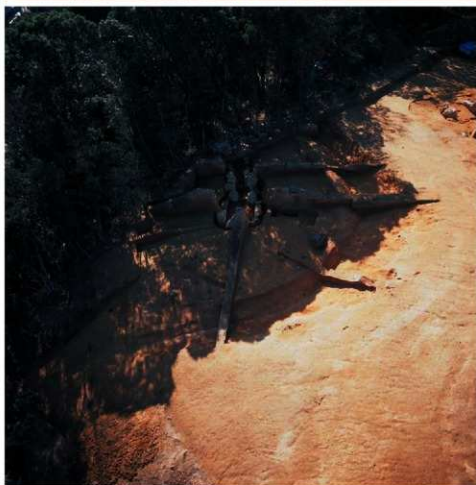


(8) 1号墳Bベルト石室掘方土層(東から)

(1) 2号墳墳丘全景
(北西上空から)



(2) 2号墳地山整形状況全景
(北上空から)





(1) 2号墳Aベルト土層（北から）



(2) 2号墳Bベルト土層（東から）



(3) 2号墳Cベルト土層（南から）



(1) 2号墳石室全景（南から）



(2) 2号墳石室全景（北から）



(1) 2号墳石室全景（上空から）



(2) 2号墳石室全景（南から）

(1) 2号墳玄室全景（西から）



(2) 2号墳玄室全景（南から）



(3) 2号墳玄室全景（北から）





(1) 2号墳玄室奥壁（南から）



(2) 2号墳玄室西側壁（東から）



(3) 2号墳玄室東側壁（西から）

(1) 2号墳玄門（北から）



(2) 2号墳西側玄門（北東から）



(3) 2号墳東側玄門（北西から）





(1) 2号墳東側玄門と側壁の関係(北西から)



(5) 2号墳東側玄門付近遺物出土状況①(北西から)



(2) 2号墳西側玄門と側壁の関係(北東から)



(6) 2号墳東側玄門付近遺物出土状況②(北西から)



(3) 2号墳玄室奥壁側排水溝(南東から)



(7) 2号墳玄門遺物出土状況(北西から)



(4) 2号墳玄室前室側排水溝(北から)



(8) 2号墳玄室排水溝内遺物出土状況(南西から)

(1) 2号墳前室東側壁（北西から）



(2) 2号墳前室西側壁（北東から）



(3) 2号墳前室敷石（北から）





(1) 2号墳前室遺物出土状況（北から）



(2) 2号墳前室遺物出土状況（西から）



(1) 2号墳前室遺物出土状況（西から）



(2) 2号墳前室遺物出土状況（北西から）



(1) 2号墳前室遺物出土状況
(北西から)



(2) 2号墳前室排水溝内遺物出土状況(北から)



(3) 2号墳前室排水溝内遺物出土状況(西から)

(1) 2号墳羨道全景（南から）



(2) 2号墳羨道西側壁（北東から）



(3) 2号墳羨道東側壁（北西から）





(1) 2号填閉塞石 (南から)



(2) 2号填閉塞石除去状況
(南から)



(3) 2号填築道排水溝土層
(南から)

(1) 2号墳葬道遺物出土状況
(南東から)



(2) 2号墳葬道遺物出土状況
(南東から)



(3) 2号墳葬道土層 (北から)





(1) 2号墳玄室奥壁裏込め
(東から)



(2) 2号墳玄室西側壁裏込め
(南西から)



(3) 2号墳玄室東側壁裏込め
(北東から)

(1) 2号墳前室西側壁裏込め
(南西から)



(2) 2号墳前室東側壁裏込め
(南東から)



(3) 2号墳前室～羨道西側壁裏込め
(南西から)





(1) 3号墳填丘遺存状況・5号墳検出状況全景（南上空から）



(2) 3号墳填丘遺存状況全景（南東上空から）

(1) 3号墳墳丘地山整形状況全
景(上空から)



(2) 3号墳墳丘地山整形状況全
景(南東上空から)





(1) 3号墳Aベルト土層（南から）



(2) 3号墳Bベルト土層（東から）



(3) 3号墳Cベルト土層（南東から）

(1) 3号墳Ⅳ区墳丘列石検出状況(南東から)



(2) 3号墳Ⅳ区墳丘列石検出状況(北西から)



(3) 3号墳現況(東から)

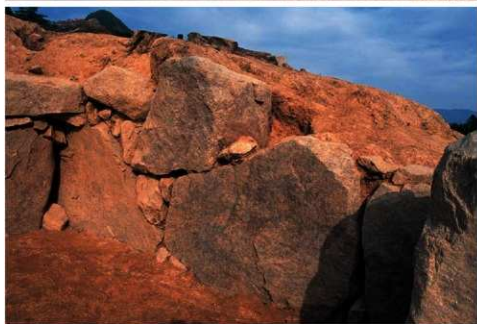




(1) 3号墳石室全景（南から）



(2) 3号墳玄室西側壁（南東から）



(3) 3号墳玄室東側壁（南西から）

(1) 3号墳玄門部（南から）



(2) 3号墳羨道西側壁
（北東から）



(3) 3号墳羨道東側壁
（北西から）





(1) 3号墳閉塞石検出状況①
(南から)



(2) 3号墳閉塞石検出状況②
(南から)

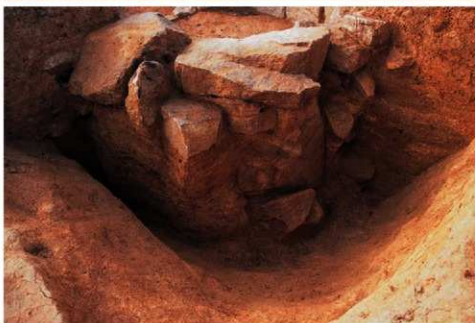


(3) 3号墳閉塞石基底部検出状況
(南から)

(1) 3号墳玄室奥壁・西側壁裏
込め状況（北から）



(2) 3号墳玄室奥壁・東側壁裏
込め状況（北東から）



(3) 3号墳羨道東側壁裏込め状
況（東から）





(1) 3号填築道南北土層
(南東から)



(2) 3号墳石室開口部付近南北
土層 (南東から)



(3) 3号墳地山整形状況全景
(南から)

(1) 4号墳全景（南上空から）



(2) 4号墳南北土層（西から）



(3) 4号墳石室全景（南から）

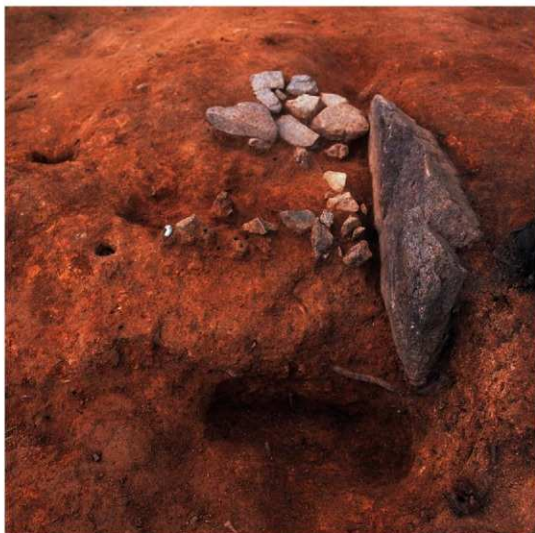




(1) 4号墳石室床面玉類検出状況（南から）



(2) 4号墳石室床面玉類検出状況詳細（南から）



(1) 4号填石室床面玉類検出状況（東から）



(2) 4号填石室床面玉類検出状況詳細（東から）



(1) 4号墳石室掘方検出状況
(南から)



(2) 4号墳玄室奥壁掘方土層
(西から)



(3) 4号墳石室掘方全景
(南から)



(1) 5号墳全景（上空から）



(2) 5号墳全景（北から）



(3) 5号墳全景（南東から）



(1) 5号墳玄室西側壁（南東から）



(2) 5号墳玄室東側壁（南西から）



(3) 5号墳玄室南北土層（西から）

(1) 5号墳石室南北土層
(南西から)



(2) 5号墳Aベルト (石室掘方)
土層 (南から)



(3) 5号墳Cベルト (石室掘方)
土層 (南から)





(1) 大溝全景（北上空から）



(2) 大溝土層（北から）



(3) 大溝（2号墳Bベルト東面）
（東から）



(1) 大溝上層遺物出土状況（北東から）



(2) 大溝上層遺物出土状況（東から）



(1) 大溝上層遺物出土状況詳細
(東から)



(2) 大溝上層遺物出土状況詳細
(東から)



(3) 大溝上層遺物出土状況詳細
(東から)

(1) 大溝中層遺物出土状況
(南東から)



(2) 大溝中層遺物出土状況詳細
(南東から)



(3) 大溝中層遺物出土状況
(南から)





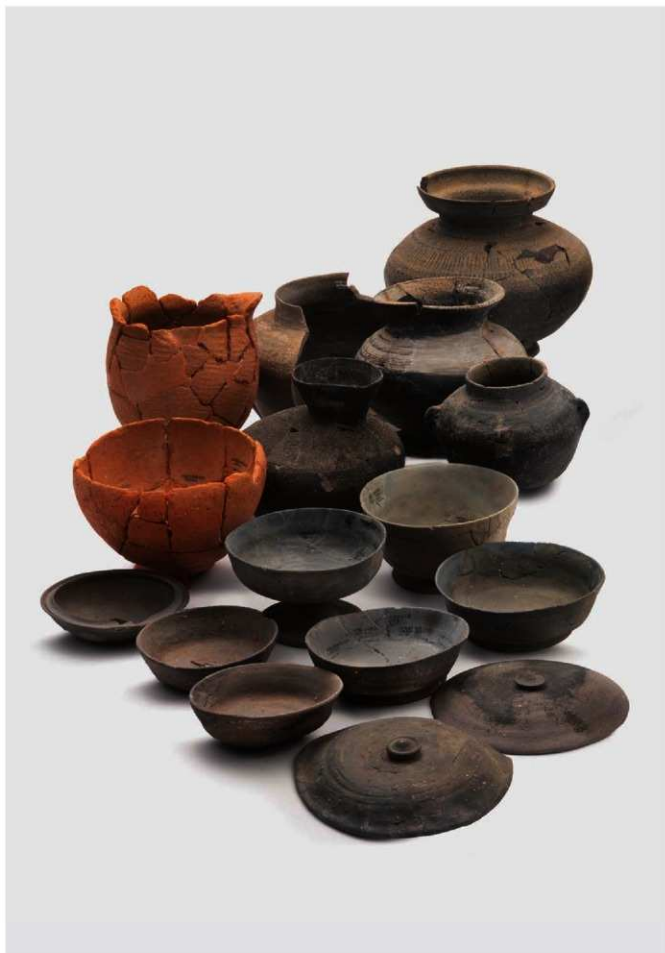
(1) SX11全景(南東から)



(2) 調査区西側平坦部全景
(北東から)



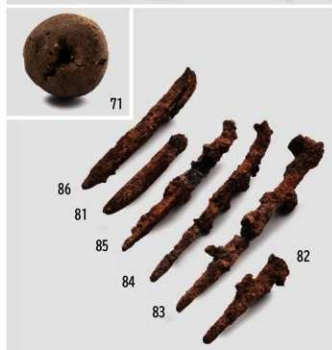
(3) 調査区西側平坦部詳細
(南から)



唐山遺跡第2次調査大溝出土土遺物



唐山遺跡第2次調査2号墳石室出土遺物（馬具集合）

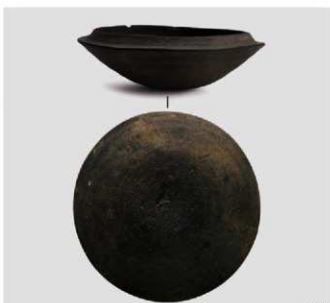


唐山遺跡第2次調査出土遺物（1）





126



129



127



130



128



131





唐山遺跡第2次調査出土遺物（5）





257



258



259



261



262



263



報告書抄録

ふりがな	からやまいせき							
書名	唐山遺跡 1							
副書名	第1・2次調査							
巻次								
シリーズ名	大野城市文化財調査報告書							
シリーズ番号	第220集							
編著者名	石川健・上田龍児							
編集機関	大野城市							
所在地	〒816-8510 福岡県大野城市曙町二丁目2番1号 電話 092 (501) 2211							
発行年月日	2025年3月31日							
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	° ′ ″	° ′ ″			
唐山遺跡 第1次調査	福岡県大野城市乙金東 4丁目1212-142他			33° 17′ 7″	130° 30′ 3″	2003.2.6 ～ 2003.3.31	670㎡	土地造成
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
唐山遺跡 第1次調査	古墳	古墳時代	古墳	須恵器・鉄製品		6世紀末～7世紀初頭の古墳		
所収遺跡名	所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号	° ′ ″	° ′ ″			
唐山遺跡 第2次調査	福岡県大野城市乙金東 3丁目1263-1、 1300-1、2			33° 33′ 3″	130° 29′ 41″	2007.5.7 ～ 2008.1.25	5,000㎡	道路建設
所収遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項		
唐山遺跡 第2次調査	古墳	古墳時代	古墳（5基）	須恵器・土師器・ 新羅土器・鉄製品 ・ガラス製品・石 製品		6世紀～7世紀の群集墳 統一新羅時代初期の新羅土器 畿内系暗文土師器		
要約	調査地は井野山から派生する丘陵上に位置する。横穴式石室を主体部とする古墳が第1次調査で1基、第2次調査で5基が確認された。 第1次調査で確認された1号墳は6世紀末頃に築造され、7世紀中葉頃まで追葬や儀礼が行われていたと推測される。 第2次調査で確認された古墳群の形成過程は、墳丘や主体部の破壊が顕著である4号墳や5号墳が最古相の古墳で6世紀前葉から中葉に築造された可能性が高い。その後、1号墳が6世紀末から7世紀初頭に築造され、続いて2号墳築造、7世紀前葉から中葉に3号墳が築造される。その後、7世紀後半に大溝が掘削され、1・2号墳では追葬・墓前祭祀が行われる。遺物では、大溝から7世紀後半～8世紀初頭の土器群とともに統一新羅時代の新羅土器が出土したことや、2号墳から7世紀中頃の須恵器とともに畿内系暗文土師器が出土したことが注目される。近隣の善一田古墳群出土の新羅土器や業師の森遺跡出土の暗文土師器の存在を含め、本古墳群の被葬者と朝鮮半島や近畿との関係をうかがうことができる重要な遺物である。また、1号墳では木棺に伴う鉄釘、2号墳では馬具の良好なセット、4号墳では玄室床面から玉類が多数に出土した。							

大野城市文化財調査報告書第220集

唐山遺跡 1

— 第1・2次調査 —

令和7年3月31日

発行 大野城市

〒816-8510 福岡県大野城市曙町2-2-1

印刷 九州コンピュータ印刷

〒815-0035 福岡市南区向野1丁目19番1号

